

姥神遺跡

UBAGAMI site

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書



1987・3

山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会
峡北土地改良事務所

姥神遺跡

UBAGAMI site

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書



1987・3

山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

今からおよそ3500年から4500年も前に我々の祖先が狩猟採集生活に明け暮れた村の痕跡が、1986年夏、大泉村姥神の日当りのよい丘の上で、地表から1m以上も土を掘り下げたところから姿を現わしました。我々はその村の跡を「姥神遺跡」と名付けたのですが、当時この村を何と呼んでいたのかは文字が発明される以前のことですから、今となっては知る手がかりはありません。しかし、どのような環境の中でどういう暮らしをしていたのかは、細かな調査によつておよそ明らかになりました。まず遺跡からたくさん掘り出された素焼きの上器の多くは食べ物を煮るための鍋で、煮こぼれた汁が上器の縁に炭となってこびりついています。また磨いた石の斧は木を切り倒す斧の刃（当時は鉄斧はありませんでした）、石を打ち欠いただけの斧はヤマイモなどを掘ったり、堅穴住居址の上間を作るための鎌の刃だと思われます。そのほか木の実の殻を割って磨り潰す道具、弓矢の矢尻、石の錐などの生活用具、土偶、石棒、丸石などのお祭りの道具なども遺跡のあちこちから次々と発見されました。また家の跡から出た焼けた炭が栗の木であると判ったのは、その後の鑑定によるものです。さらに石器に使われた石材の分析から、7km以上も遠くからわざわざ運ばれた石があることも明らかになりました。

这样に発掘調査から得られる成果は多く、そのひとつ一つの積み重ねがやがて祖先の本当の意味での歴史の叙述につながるものだと思われます。そのためにも、いろいろな方面で余裕のある調査体制が望まれるところです。

最後に調査及び整理に関わった多くの皆様、関係諸機関の皆様に対し厚く御礼を申し上げます。またクラブ活動を通して奉仕してくれた泉小学校郷土研究クラブの皆さん、本当に有難う。

昭和62年3月

大泉村教育委員会

教育長 浅川 義彦

例　　言

1. 本書は、昭和61年度県営圃場整備事業に伴う姥神遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、峠北土地改良事務所の委託を受けて、文化庁、山梨県より補助金を得て大泉村教育委員会が行ったものである。
3. 遺跡所在地 山梨県北巨摩郡大泉村西井出字姥神
4. 調査面積 2500m²
5. 発掘調査期間 昭和61年5月14日～11月1日
遺物整理期間 昭和61年10月14日～昭和62年3月31日
6. 調査事務局 大泉村教育委員会
　　浅川義彦(教育長)・山田初男(教育課長)・浅川正人(社会教育主事)・三井初枝(事務)
　　調査担当 横原功一(昭和61年7月1日以降は山梨文化財研究所研究員として、職員派遣要請に基づき調査を担当。)
7. 発掘調査参加者 相吉よしえ・浅川英三・浅川たつ子・浅川つた子・浅川日出子・浅川美代・浅川洋子・浅川米子・小池みさお・進藤キエ・島畠松代・中島種子・中島ねのえ・平井仁志・細田絹代・細田茂登技・三井種子・三井みさ子
　　整理参加者 有賀有子・池谷富士子・大村昭三・大村幸子・北浦薰・津金伸二・中沢洋子・名取つる子・平沢のり子・平山勝子・古屋真美・渡辺百合子
8. 遺物の実測・写真撮影・本文執筆及び編集は横原が行った。
9. 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御教示を賜わった。記して謝意を表したい。
(敬称略) 雨宮正樹・伊藤正幸・上野修一・小野正文・河西 学・數野雅彦・小林公明・桜下光男・佐野勝広・信藤祐仁・末木健・高奥浩明・田村弘幸・塙本師也・田代 孝・長沢宏昌・奈良泰史・新津健・古谷健一郎・保坂康夫・宮沢公雄・山下孝司・米田明訓
10. 本調査の出土品、諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。
11. 本調査にあたり、山梨県教育庁文化課・峠北土地改良事務所・山梨県埋蔵文化財センター・(財)山梨文化財研究所・大泉村土地改良区・泉小学校郷土研究クラブ・地権者の皆様に御指導、御協力をいただいた。衷心より謝意を表したい。
12. 本書使用地図は、国土地理院発行の1/50,000八ヶ岳、1/2,500谷戸、地勢図1/200,000甲府、山梨県発行の県営圃場整備事業計画図1/1,000、地質調査所発行1978(第2版)の1/1,000,000日本地質図である。
13. 遺構平面図の方位は磁北による。ピットの深さは-をつけてcmで表わす。焼土の分布はドットのスクリーン・トーンで示す。またセクション図、エレベーション図の水系レベルは図の端に記載したほか、L=○mで示した。
14. 遺物実測図の斜のスクリーン・トーンは破損部分を表わしている。
15. 石器の石質の同定については、(財)山梨文化財研究所の大村昭三氏にお願いした。また7分住居址の炭化物の分析は(株)バリノ・サーヴェイによるものである。

目 次

序

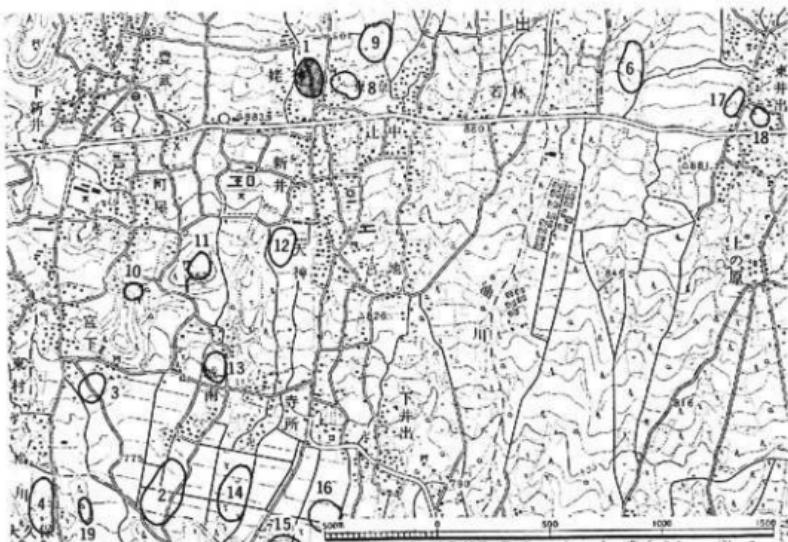
例 言

I 調査に至るまでの経過.....	3
II 遺跡の位置と環境.....	3
III 調査の方法と経過.....	4
IV 組 序.....	6
V 遺構と遺物.....	6
1 住居址とその遺物.....	6
2 土壙とその遺物.....	54
3 単独埋甕.....	60
4 集 石.....	61
5 配 石.....	63
VI 其の他の遺物.....	66
1 縄文時代の遺物.....	66
2 弥生時代の遺物.....	95
VII ま と め.....	96
1 姥神遺跡出土の石器について.....	96
2 第3群上器の縦年の位置づけについて(予察).....	100
引用・参考文献.....	104
付 炭化材同定報告.....	105

図 版



第1図 姥神遺跡の位置(1) (1/50,000)



第2図 姫神遺跡の位置(2) (1/25,000)



第3図 発掘区域とその周辺

I 調査に至るまでの経過

大泉村で初めて埋蔵文化財の調査が実施されたのは昭和52年の山梨大学考古学研究会による御所遺跡であったが、その翌々年、県営圃場整備事業に伴って、それまでの県内における調査事例をはるかに凌ぐ大規模な発掘調査がまず寺所遺跡から開始された。以来毎年村内各地で行われた発掘調査は、昨年までの9年間に総数9件を数え、大泉村内の主要遺跡の殆んどが調査し尽されたといつても過言ではない。本年度も昨年同様、西井山の小岩清水工区と谷戸の谷戸下工区、方城工区の計約20ヘクタールの圃場整備事業が予定されたため、昭和54年の大泉村内遺跡分布調査と、昭和60年3月と11月の試掘調査の結果に基づき、本調査実施地区を西井山の姥神地区の約1万m²の範囲に絞り込んだ。遺跡の名称は大泉村内遺跡分布調査報告に従い、地区の小字名から「姥神遺跡」と呼称することにした。

II 遺跡の位置と環境

姥神遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村西井山字姥神に所在し（第1・2図）、標高は885m～892mを測る。標高2899mの赤岳を主峰とする八ヶ岳の南麓は、安山岩を主体とした岩屑流堆積物によって先端が細長く伸びた台地状地形をなし、その台地を縦のように東に須玉川、塩川、南西に釜無川が流下する。遺跡は台地上のほぼ中央に位置し、塩川まで最短距離は約3.5km、釜無川まで約7kmを測る。八ヶ岳南麓では標高1000m～1500m付近に數多くの湧水地点が知られているが、それから発した水流が台地上を開拓しながら南北方向に流下し、台地下の河川に合流している。従って台地上は南北方向に細長い痩せ尾根が東西に連続した微地形を呈し、その尾根上には今日までに数多くの縄文時代の遺跡が確認されている。中でも近年調査例が増加しつつある縄文時代後・晩期の遺跡を示したのが第1図である。

1. 姥神遺跡 中～後期 今回の報告分である。標高約890m。
2. 金生遺跡 前～晩期 昭和55年調査され、その後国史跡として指定を受けた大規模な配石遺構を伴う大集落址。本遺跡から約1.8km離れる。標高約770m。
3. 豆生田第3遺跡 後期 昭和60年に調査。標高約780m。
4. 別当遺跡 後期 昭和59・60年に調査。標高約770m。
5. 長坂上条遺跡 後～晩期 昭和15年、大山史前学研究所によって調査された学史上有名な遺跡。配石を伴う。標高約700m。
6. 石堂B遺跡 後～晩期 昭和60・61年に調査された大規模な方形配石遺構、石棺墓群を伴う大集落址。主要部分は盛土保存された。本遺跡から約1.5km離れる。標高約900m。
7. 青木遺跡 後～晩期 昭和58年調査。石棺墓群を伴う集落址。標高約750m。

このように八ヶ岳南麓では標高700m～900mにかけた高冷地に縄文時代後・晩期の配石を伴

う遺跡が多いが、これは後・晩期の特色というよりむしろこの八ヶ岳南麓の地域性に基づいた、全国的にみても極めて特殊な事例といえる。これらのほかにも八ヶ岳南麓での調査例は多く、そのうち姥神遺跡周辺で調査された遺跡を示したのが第2図である。

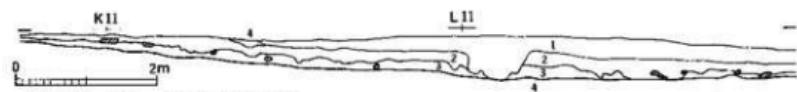
8. 東姥神B遺跡 平安時代を主体とした集落址。「安義」の墨書き土器出土。
9. 東原遺跡 平安時代の集落址。鍛冶遺構をもつ住居址が話題となる。
10. 御所遺跡 縄文時代前期・諸磯期の集落址。
11. 谷戸城址 県内で最も古いといわれる中世の山城。
12. 大神遺跡 縄文時代前期～中期初頭にかけての大集落址。
13. 城下遺跡 平安時代の集落址。縄文陶器、石鈴、貞觀永宝が出土した。
14. 寺所遺跡 平安時代の集落址。
15. 木ノ下・大坪遺跡 平安時代の集落址。
16. 原田遺跡 平安時代の集落址。
17. 石堂A遺跡 縄文時代中期の遺構のほか、平安時代の住居址が検出された。
18. 野添遺跡 縄文時代中期の集落址。学術調査によるものである。
19. 別当十三塚 板碑3基を伴う10基の中世の塚。

このほかにも八ヶ岳南麓では井戸尻遺跡群に代表されるように、縄文時代中期以前の集落址が濃密に分布しており、後・晩期の特異な集落形態を生む素地は十分形成されていたのである。

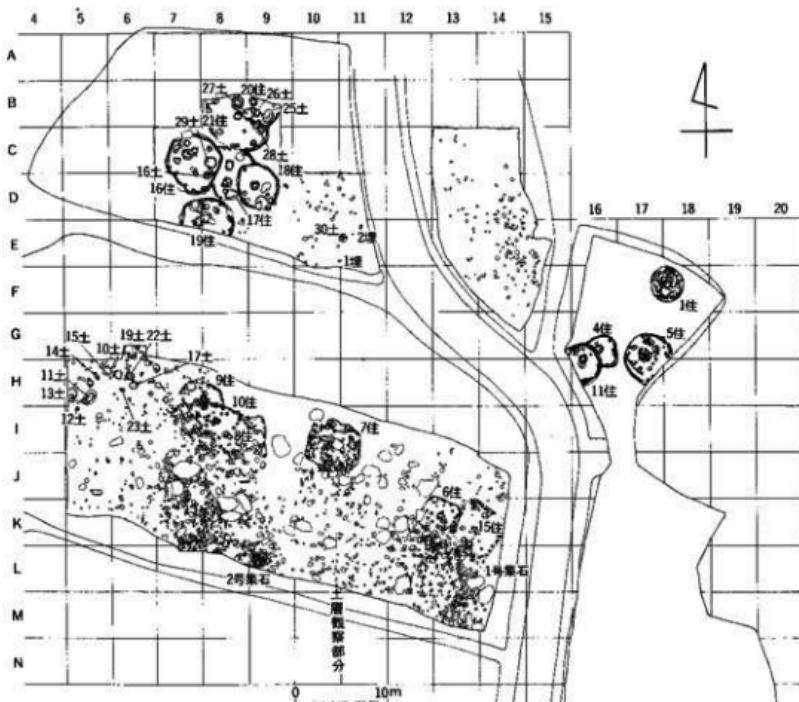
III 調査の方法と経過

まず土地改良事務所から示された圃場整備地区内の切り盛り図をもとに、地表面から50cm以上1m以下の盛り土箇所以外は調査対象箇所とみなし、改めて圃場整備地内の試掘を開始したのが5月14日である。約10日間の試掘の後、重機によって表土を剥ぐ箇所を選定し、5月26日から重機を投入した。調査対象地内の原状は水田、栗林であったが、場所によっては表土層が非常に薄く重機を入れられない場所もあり、手掘りによって対処した。そして表土剥ぎの終了した箇所から鉛筆がけを行ない、6月2日に磁北に基づいた5m幅のグリッドを設定し、北→南へA→V、西→東へ1→20と表示した。再び鉛筆がけによって遺構確認を行い、それが済んだ面から遺構の調査に入った。H5～M13グリッドに取りかかるや否や、次々と露出する多量の礫群によって調査は難行し、当初の発掘調査予算を予想以上に消耗する結果となった。従って調査は作業員数を大幅に減らして細々と続けられたが、各方面的御尽力によって追加予算を得、結局11月1日までかかって発掘調査は不十分ながら終了することができた。

遺物の整理作業は10月14日から、発掘調査と併行して石和町の御山梨文化財研究所内で開始し、水洗、注記、接合等の基礎作業は全て実施した。しかし時間的な制約から遺物の実測は一部割愛せざるを得なかった。



第4図 K11～L11の土層(%)



第5図 拝殿遺跡全体図(1/600)

- 凡例
- 往...○号住居址
 - 上...○坊上塙
 - 集...○石聚石
 - 壇...○分壇壇

IV 層序

調査地区の東部分（農道東側）では泉川の影響等により、ローム面までの土層の厚さ、層序は均一でないため、土層堆積状況の良好な調査地区のほぼ中央部分に相当するK11～L11杭に沿った面で上層観察を行なった。第4図のセクションは水田の天土、苔土、盛土を除去してあるため、原状では1層上に厚さ20～30cmの耕作土が覆っていたと考えていただきたい。土層は次のとおりである。1層 黒色土層一旧表土層。2層 黒褐色土層一主に縄文時代後期の遺物包含層。3層 黄褐色土層一ローム粒子を多く含み、不整面を呈す。主に縄文時代中期の遺物包含層。4層 黄色土一ローム（地山）。

V 遺構と遺物

姥神遺跡の調査で検出された遺構は、縄文時代中期住居址12軒（曾利II式期4軒、曾利III式期2軒、曾利IV式期4軒、曾利V式期2軒）、後期住居址8軒（堀之内I式期敷石住居址1軒、堀之内2式期2軒、堀之内2～加曾利B1式期2軒、加曾利B1式期1軒、加曾利B1～B2式期2軒）、土壙30基、集石2基、配石等である（第6図）。検出された遺物は縄文土器（中期後半～後期中葉）、石器（打製石斧、磨製石斧、凹石、磨石、石皿、砥石、石錐、磨き石、石匙、投擲状石器、多孔石、石棒、丸石、不定形扁平石、使用痕のある剝片、石核）、上製品（土偶、ミニチュア土器、杓子形土製品、有孔球状土製品、蓋、耳栓、円板状土製品）、石製装飾品、弥生土器（条痕文）、磨製石錐、平安時代土師器、灰釉陶器、中・近世陶器、キセル、古銭（咸平元宝、祥符通宝）、五輪塔（空・風輪3個、火輪3個、水輪1個、地輪5個）であり、その量はコンテナ約100箱分に相当する。

1 住居址とその遺物

本項では住居址番号順に窓穴、敷石を区別せずに説明する。尚、3号住居址は欠番。

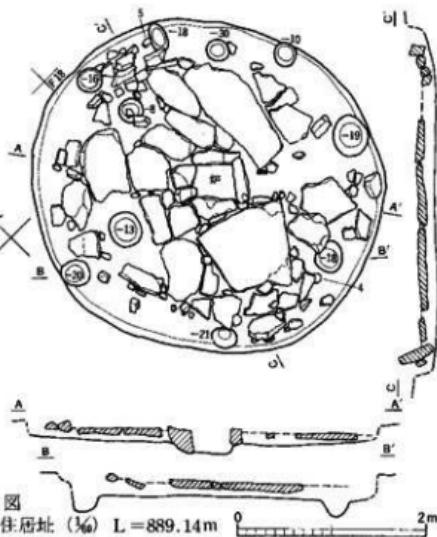
1号住居址

遺構（第6図、図版2） 位置 F17・18 形態 円形プランの敷石住居址。経過 重機による表土削平の際、敷石の一部が検出されて確認されたが、水田の苔土直下に存在するため敷石の多くは既に擾乱されたものと思われる。覆土 敷石面まで僅か10cm足らずしかないうえ、上層では苔土と混合した黒褐色土層で、遺存状況は不良。また住居の構築面（地山）は黒褐色土のため、壁の大部分がはつきりしない。主軸 S-44°-W 規模 3.7m×3.5m 床面 炉の左右に僅かな空間を残すほか、床面の大部分が安山岩の鉄平石（最大形は1.0m×0.9m×0.1m、1.3m×0.5m×0.1m）ではなく平らに不規則に敷きつめられる。また壁際には同じく鉄平石の細片や、やや小振りの鉄平石が積み重ねられたり、壁に立てかけられるようにして遺存した。

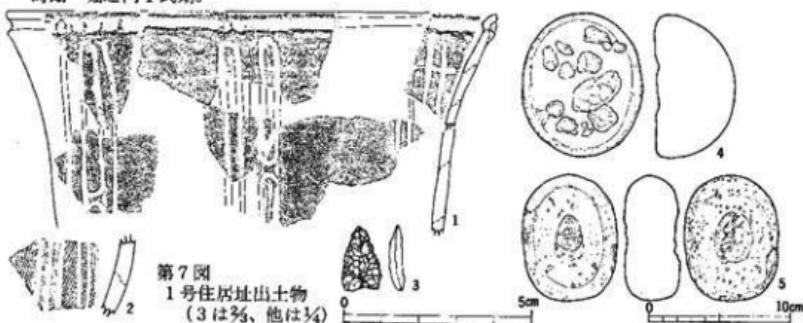
掘方面は敷石面よりも15cmほど下。周溝なし。ピット 壁に接して6箇所、やや内側に4箇所検出されたが、いずれも小さく浅いもので柱穴とは認め難い。炉住居のほぼ中央に $0.9m \times 0.8m \times 0.25m$ の方形石囲い炉が検出された。焼土、炭化物の堆積はなし。埋甕なし。遺物出土状況 敷石面から数cm浮いて少量の土器片が散在したほか、敷石面とほぼ同レベルで磨石2点が出土した。

遺物（第7図）1 焚之内1式の深鉢形土器。拡大口径35cm。胎土には長石、角閃石をやや多く含む。4 半球形を呈す磨石で、平坦面に浅い溝みが多数みられる。また部分的に赤変している。

時期 焚之内1式期。



第6図
1号住居址 (1/6) L=889.14m



2号住居址

遺構（第8図、図版2）、位置 T17・18 形態 卵円方形プランを呈する竪穴住居址。

経過 表土剥ぎの際、地表から僅か数cm下で炉石が露出して確認された。覆土 耕作による擾乱が床面まで及ぶため、耕作土と地山の黄色土（ローム）の混合土がみられる。主軸 S-50°E 構造 3.5m×3.6m×0.05m 床面 炉の北西部分が割合良好のほかは前記のとおり。

周溝 ほぼ全周する。ピット 7箇所検出されたが、柱穴は4本であろう。炉裏のものは擾乱か。炉 中央より北寄りに4枚の安山岩による、掘炬鍵状の大形方形石囲い炉が検出された。規模は $1.1m \times 0.9m \times 0.45m$ 。覆土には炭化物が微量含まれるが焼土は検出されなかった。埋甕

なし。遺物出土状況 炉西側で、倒立した伏鉢形土器口縁部片が出土したが人为的なものかどうかは不明。そのほか炉北側で少量の土器片が出土した。

遺物（第9図） 1 炉西の倒立土器。推定口径36cm。隆帶両脇のナデ→半截竹管による2本単位の沈線充填。裏母、長石、石英を多く含む。2 曽利IV式の深鉢形土器。推定口径22cm。沈線による区画後、羽状沈線文を充填→区画内に蛇行沈線文。

時期 曽利IV式期と思われる。

4号住居址

遺構（第10図、図版2）

位置 G・H16 形態 円形プランの堅穴住居址。

経過 炉石を検出した後、周溝を追ってプラン確認に努めた。覆土 厚さ10cm程の茶褐色土層のみ。主軸

S-40°-E 規模 (3.5m)

×3.8m×0.1m 床面 炉

北側でやや堅い床が確認されたが、他の部分では不明。

西側旁は11号住居址に切られて存在しない。ピット 周溝に沿って大小8箇所のピットが確認された。炉裏にはないため主柱穴は4本であろうか。炉 中央より北寄りの位置に、4枚の安山岩による掘炬燧状の方形石圓が検出された。規模は0.9m×0.7m×0.35m。南側（向って正面）の炉石一枚は破損して炉の内側へ傾く。炉内覆土は住居内覆土に近い暗茶褐色上層で、焼土、炭化物は見られなかった。埋甕 なし。遺物出土状況 炉の南側で、床面直上付近から約10cmぐらいまでの間に、比較的まとまった遺物が検出された。

遺物（第11図、図版9） 1 推定口径29cmの曾利III式深鉢形土器。2本の粘土紐で渦巻つなぎ文を推定6単位施した後、連弧状の区画内に棒状工具により12本程の縦位沈線を、区画下には8本単位の横齒状沈線文を充填し、更に連弧状の波頂部からそれぞれ2本づつの垂下沈



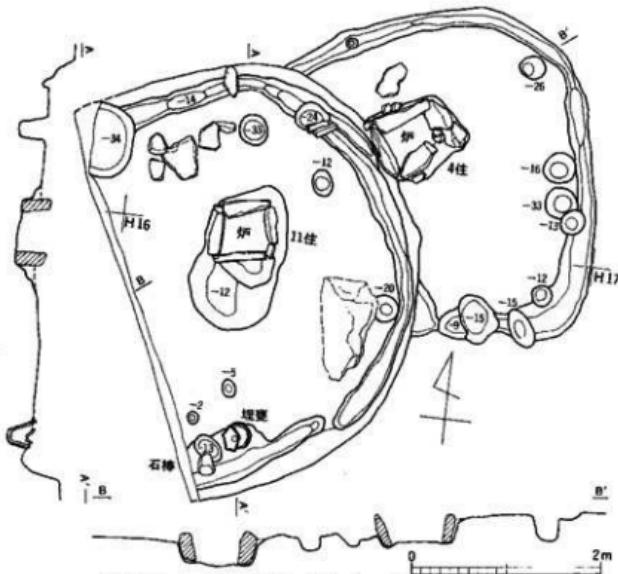
第8図 2号住居址 (No. 2) L=885.81m



第9図
2号住居址出土遺物 (No. 1)

線を棒状工具に
よって施文する。

4の胸部破片が
1と同一個体と
思われるが、そ
れによれば2本
の沈線は胸部中
央で渦を巻くよ
うである。5
曾利III式期併行
の連弧文土器で、
推定口径31cmを
測る。胸部の括
れ部分に2本の
隆線を施して口
縁部文様帯と胸
部文様帯に分け
た後、口縁部文
様帯には太い棒



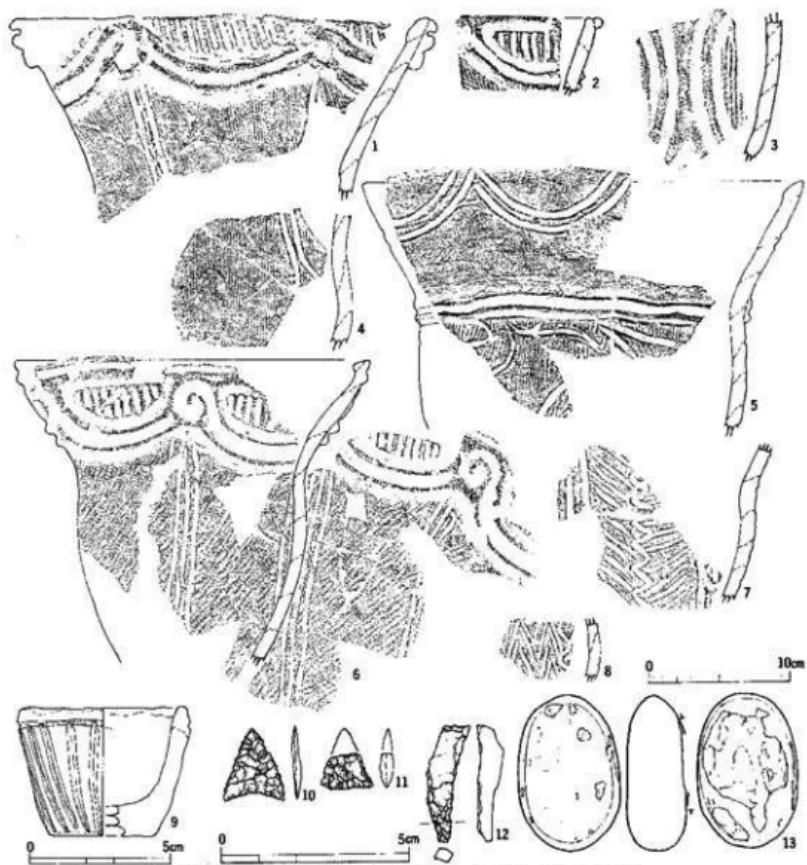
第10図 4・11号住居址 (16) L = 889.04m

状工具による2本の沈線を連弧状に8~9単位施す。施文方向は右→左。胸部文様帯は太い棒状工具による2本1組の渦巻文を施文した後、細い棒状工具で縦方向に沈線を一本ごとに充填し、再び太い棒状工具で渦巻文の修正を行っている。6 推定口径25cmの曾利・加曾利E折衷の深鉢形土器。2本の隆線によって推定8単位の渦巻つなぎ文を施文した後、各区画内に棒状工具で7~9本の縦位沈線を引く。胸部文様帯には縦位の縄文LRを充填した後、口縁部の渦巻文直下から棒状工具による垂下沈線を3本づつ施文する。胎土には雲母、長石、石英をやや多く含むほか、花崗岩の岩片(Ø 4mm)もみられることから花崗岩風化粒子を多く含んだ粘土(もしくは花崗岩風化粘土)が用いられたことは明白である。姥神遺跡の所在する八ヶ岳南麓(台上地城)には花崗岩を産する地域がないため、上器の文様上の特徴等を勘案すればこの土器は搬入品の可能性が極めて高い。9 口径6cmのミニチュア上器。

時期 曾利III式期。

5号住居址

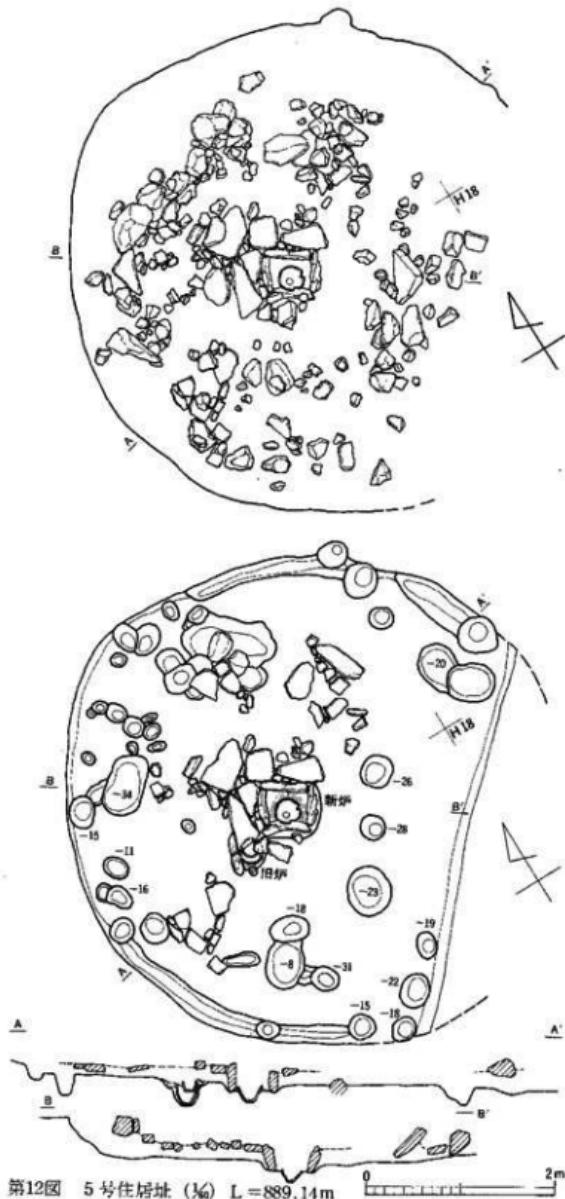
遺構(第12図、図版2、3) 位置 G・H17・18 形態 円形プランの部分敷石を有する堅穴住居址。経過 遺構確認の際、黒褐色土中に多量の礫がほぼ環状に並んで露呈したため(第12図上)、掘り下げたところ炉石が検出されて住居址と確認された。更に礫を撤去しながら



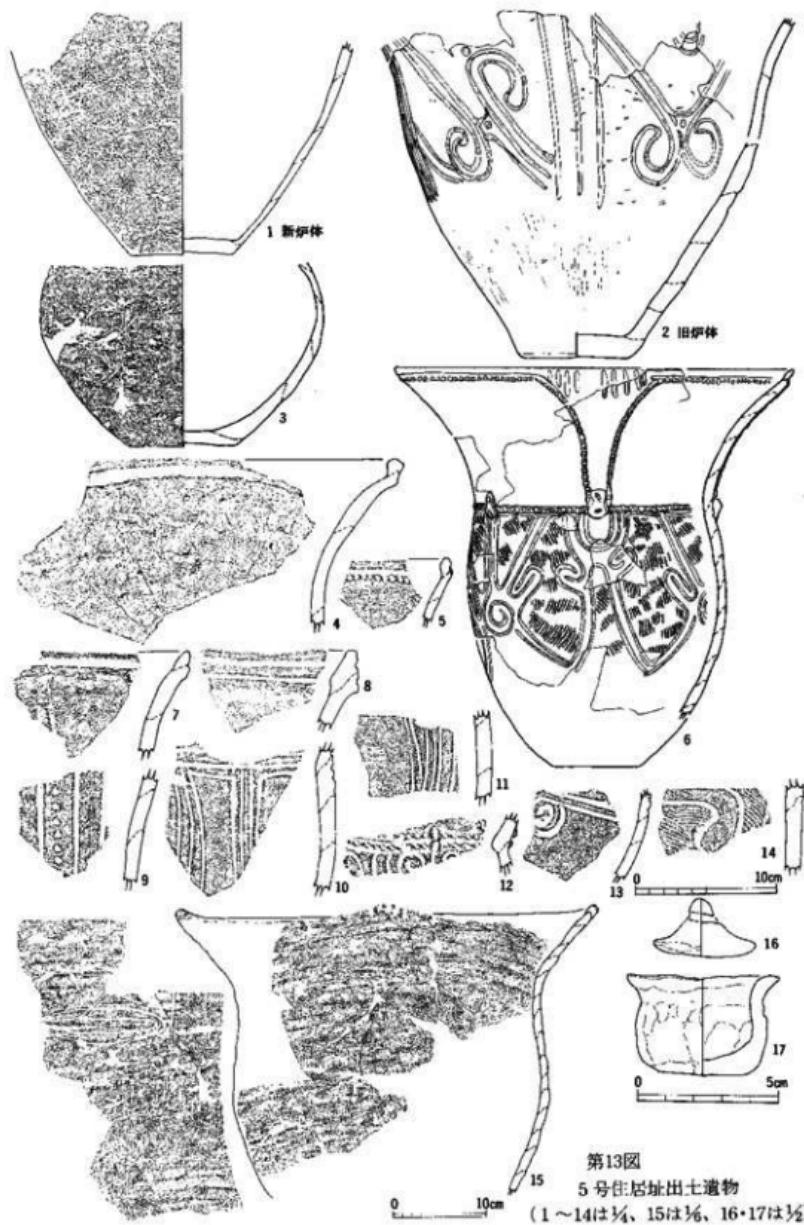
第11図 4号住居址出土遺物 (1~8・13は $\frac{1}{4}$ 、9は $\frac{1}{2}$ 、10~12は $\frac{1}{2}$)

ら掘方面を調査している途中、炉の西南隅直下から新たに炉体土器が出現したため、本址は建て替えを伴う住居址であることが判明した。南東部は調査不能であった。**覆土** 敷石面の上下で2層に別かれる。上層は、礫を多く含んだ暗茶褐色土層で、炭化物、骨片が少量確認された。下層はローム粒子を多く含んだ茶褐色土層。上層と下層間の敷石面では、特に貼り床らしい間層は認められない。**主軸** 新住居址はS-33°-Wと思われる。旧住居址は不明。**規模** 新住居址は $5.2m \times 5.1m \times 0.35m$ 。旧住居址は $3.6m \times 3.6m \times 0.5m$ 程度か。**床面** 新住居址には炉の北面に接した部分と、炉の北側と南側に敷石が遺存していたが、ほかに堅くしまった面はない。また環状に並んだ砾は、住居の北面壁際で積み上げるようにして床から立ち上っていたが、

壁の一部であろうか。旧住居址の床面は、埋設された旧炉体土器とほぼ同一であることを考えると、新住居址と同一レベルにあったと想定できる。周溝北東部と南西部に検出された。ピット 大小合わせて約50箇所検出されたが、土柱穴は6本か。炉 新炉は0.6m×0.6m×0.4mの方形石圍炉で、内部に胴部以下の深鉢形土器を正位に埋設している。焼土は土器周辺の炉底に薄く堆積していたが、土器内部の茶褐色土中には焼土、炭化物は全く認められなかった。旧炉は、深鉢形土器の胴下半を炉体土器として埋設してあったが、おそらく方形石围炉の石組が抜かれか体土器だけが残存したのである。また、その土器内部上層には、入れ子式になって別の胴部以下の鉢形土器が重なっていた。住居の建て替えに伴って炉石が抜かれ



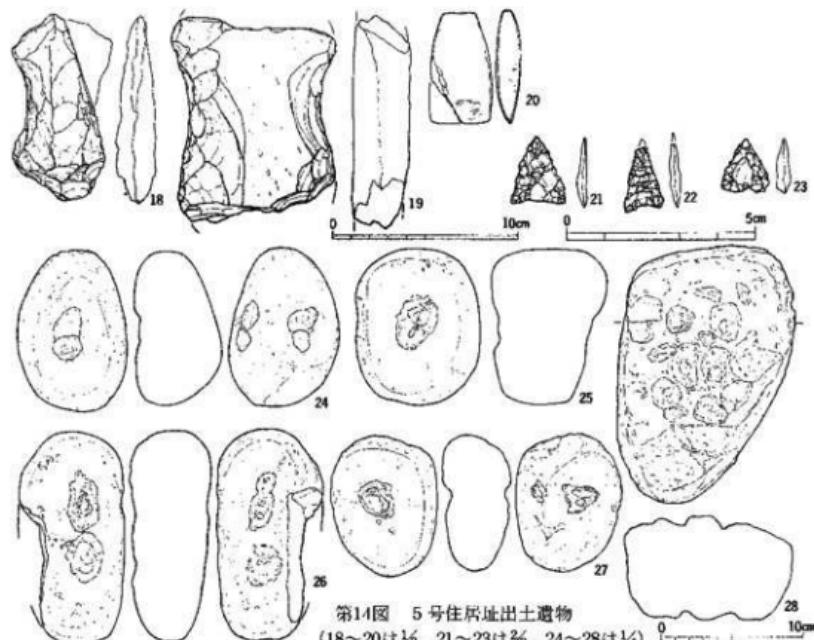
第12図 5号住居址 (No. 5) L=889.14m



第13図

5号住居址出土遺物

(1~14は1/4、15は1/6、16・17は1/2)



第14図 5号住居址出土遺物

(18~20は $\frac{1}{2}$ 、21~23は $\frac{1}{3}$ 、24~28は $\frac{1}{4}$)

たのにもかかわらず、炉内に口縁のない煮沸用土器が残されたとは考えにくいことと、土器の破損部の内外面に黄白色の灰の付着がみられることから、炉体土器の重複と考えられる。埋蔵なし。**遺物出土状況** 炉西側の壁際に環状に並んだ礫の直上から2個体の土器が重なって検出されたほか、ミニチュア土器が炉北東の敷石直上から、それに合うと思われる蓋が炉内上層から出土した。また炉北側の敷石直上から多孔石が出土した。

遺物 (第13、14図、図版9) 1 新炉内の炉体土器。口径24cm、底径7.5cm、高さ16cm。2 旧炉体土器。口径30cm、底径7.5cm、高さ21.5cm。3 旧炉体土器上層の炉体土器と思われる鉢形土器。破損部分の推定口径18cm、底径8cm、高さ13cm。1~3の新旧関係は2→3→1となる。6 炉西側の壁直上で15上に折り重なって出土した深鉢形土器。口径28cm、残存高25cm。施文順序は粘土紐貼付→棒状工具による沈線文→[L Rの縄文を区画内に充填、粘土紐上に棒状工具で刻み目施文]である。胎土中には長石が多いほか、角閃石、雲母、石英がやや多く認められる。15 6下出土の大規模粗製深鉢形土器。推定口径44.5cm、残存高31cm。胎土が特徴的で、安山岩の細礫(最大径5mm)をかなり多量に含むほか、輝石、スコリアを多く含む。また雲母は極く微量確認できた。八ヶ岳南麓で採取した粘土・混和材を使用していることが推測できる。内外面の整形、調整は非常に難である。17 敷石直上検出のミニチュア土器。口径5.5cm、底径3cm、高さ3.5cm。19 旧炉体土器に接して出土した分銅形石斧。

時期 堀之内1~2式期か。

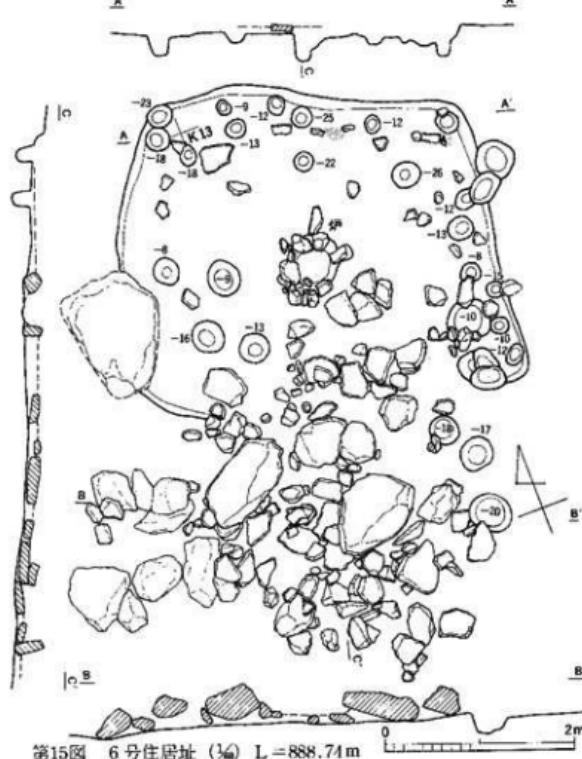
6号住居址

遺構（第15図、図版3）位置 K12・13 形態 入口に敷石を有する隅丸方形の堅穴住居址。経過 住居址の北壁が割合良好に検出されたため壁を追ってプランを捉えたが、東南隅は15号住居址と重複するため明瞭でない。また入口部の敷石に付随する配石は、その周間に拡がる配石と複合して、その範囲をはっきりと捉えることはできなかった。覆土 北壁付近に茶褐色土層が、その上層に黒褐色土が覆っていた。掘方面は非常に堅いロームで、北壁の壁際が焼成を受けて赤色化していたほか、数cm浮いて焼土ブロックもみられた。主軸S-25°-W 規模 3.2m×3.0m×0.15m。入口部は2.5m×2.0m程度。床面 敷石上面が床面レベルと思われるが、硬化面、貼り床面は確認できなかった。入口部には、安山岩の鉄平石による敷石が中央に敷かれ、その両脇に長径1m程の巨礫が配されていた。周溝 なし。ピット 大小25箇所ほどあるが、主柱穴は住居址の一辺に3~5本程度ではなかつたろうか。炉 10~20cm程の安山岩角礫を円形に並べたもので、焼土層はなかつたが、炉底のローム面が焼成を受けて僅かに赤変していった。埋蔵 なし。

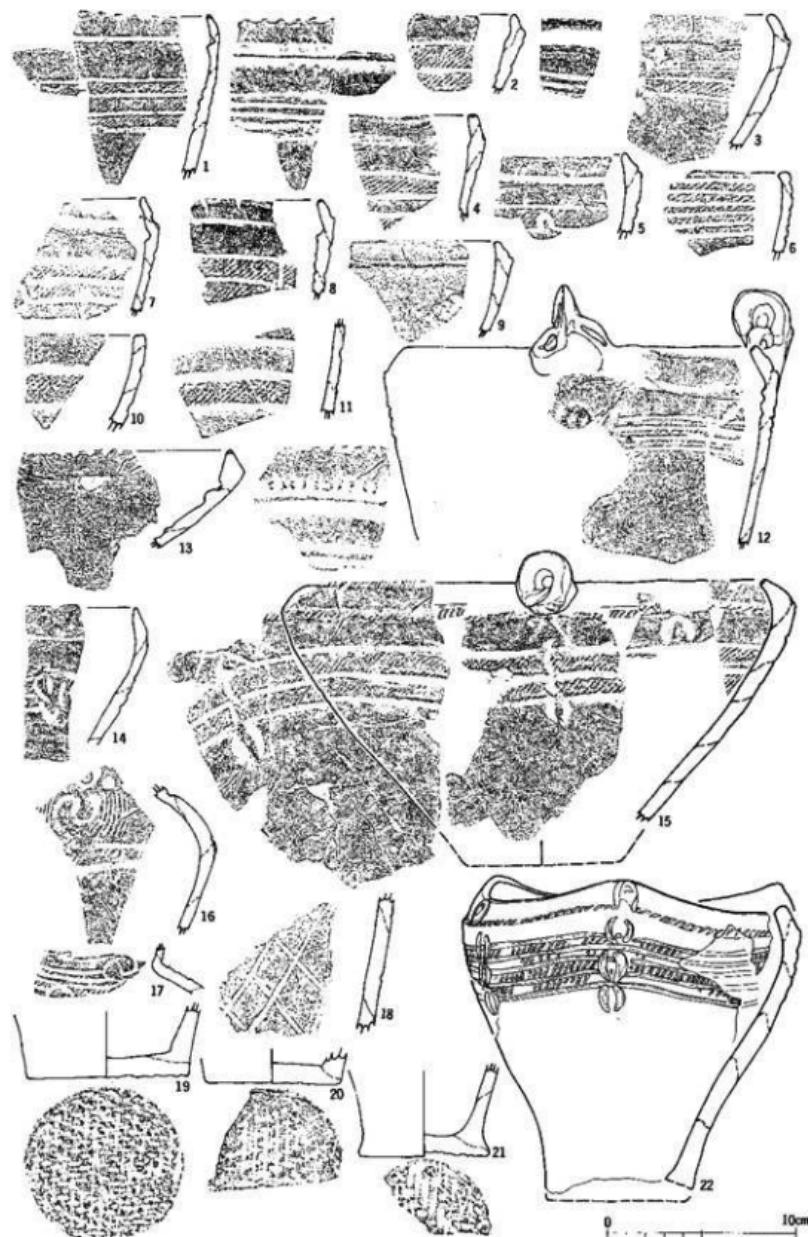
遺物出土状況 住居

内の中部分の茶褐色上中からまとまった資料を得ることができた。

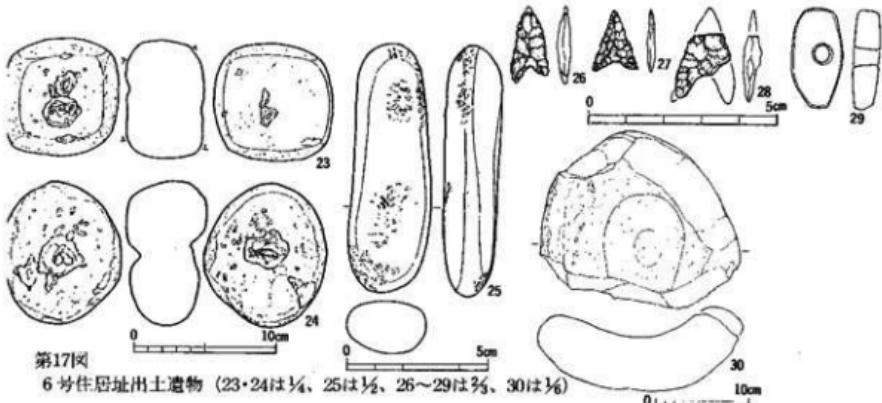
遺物（第16、17図、図版9、11）1口唇部が小波状を呈す深鉢形土器。肩部には沈線→斜めの刻み目、胴部には4本の沈線→横位の縄文Rが施文され、内面は肩部内側に横位沈線→連続刺突、その下に5本の横位沈線が施文される。胎土には雲母、長石が少量含まれる。3 肩部に斜めの刻み目、胴部には4本の横位沈線→



第15図 6号住居址 (3) L=888.74m



第16図 6号住居址出土遺物(少)



第17図

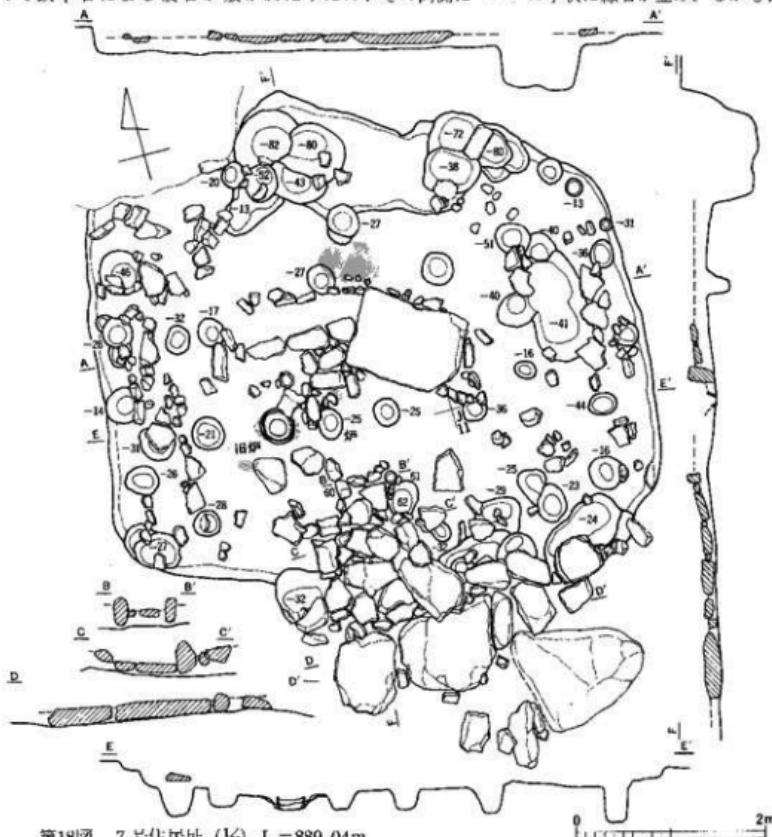
6号住居址出土遺物 (23・24は1/4、25は1/2、26～29は1/3、30は1/6)

縄文RLしが施された鉢形土器。胎土には長石等からなる約3mmの岩片がやや多く含まれるほか、石英、長石、スコリアが少量含まれる。4 口唇部、肩部とともに刻み目が施され、胴部に無文帯を挟んで2本以上の縄文(RL)帯をもつ深鉢形土器で、内面には小さな段がみられる。胎土には雲母がやや多く含まれるほか、長石、石英が少量みられる。7 肩部に沈線+斜めの刻み目、胴部に3本の横位沈線とそれを階段状に切る縦位沈線+縄文LRを施した深鉢形土器で、内面には段状の横位沈線がみられる。胎土には細片化した長石が大量に含まれ、粗雑な印象を与えるほか、石英、スコリアも僅かに認められる。12 耳状把手をもつ深鉢形土器で、口唇部には刻み目、肩部には横位沈線、胴部には横位の縄文RL→4本の横位沈線、内面には3本の横位沈線が施文される。また把手下には逆「の」の字状文がみられる。胎土には、長石、スコリア等が微量含まれる。13 外面無文の浅鉢形土器。口唇部は小波状を呈し刻みをもつ。内面にはII線直下に連続刺突文と隆線、胴部には2本以上の横位沈線+斜めの刻み目が施文される。15 耳状把手をもつ鉢形土器で、推定口径48cm、残存高28cm。口唇部と肩部には斜めの刻み目を、胴部には3本の横位沈線→RLの縄文を施文する。把手下には「へ」の字状文と縄文帯を切る階段状の縦位沈線を、その下には対弧文を施文する。胎土には安山岩の岩片(最大径0.5mm)がやや多く含まれる。16 注口土器の胴部。2条の横位沈線間に刻み目を施し、その上部では6本単位と思われる櫛齒状工具で集合沈線文を描く。外面の磨きが顕著であるのとは対照的に、内面は未調整。胎土には多量の長石と微量の石英を含む。18 格子目文を有する粗製深鉢の胴部。格子目文の施文順序は左上りの斜線→右上りの斜線である。胎土には多量の石英、長石、やや多く雲母を含む。22 3単位の波状口縁をなす深鉢形土器。口径16cm、残存高15.5cm。斜めの刻み目が肩部に施文された後、口縁の波頂部と谷部に粘土粒が貼付される。胴部には4条の横位沈線→波頂部下の3継続の対弧文→横位の縄文LR。胎土には長石、石英、角閃石がやや多い。29 黄緑色を呈する蛇紋岩製の玉。長径2.6cm、短径1.3cm、厚さ0.7cm、重量4.2g。ほぼ中央には0.4cmの孔が貫通する。住居址の東南隅で検出された。

時期 加曾利B1式期。

7号住居址

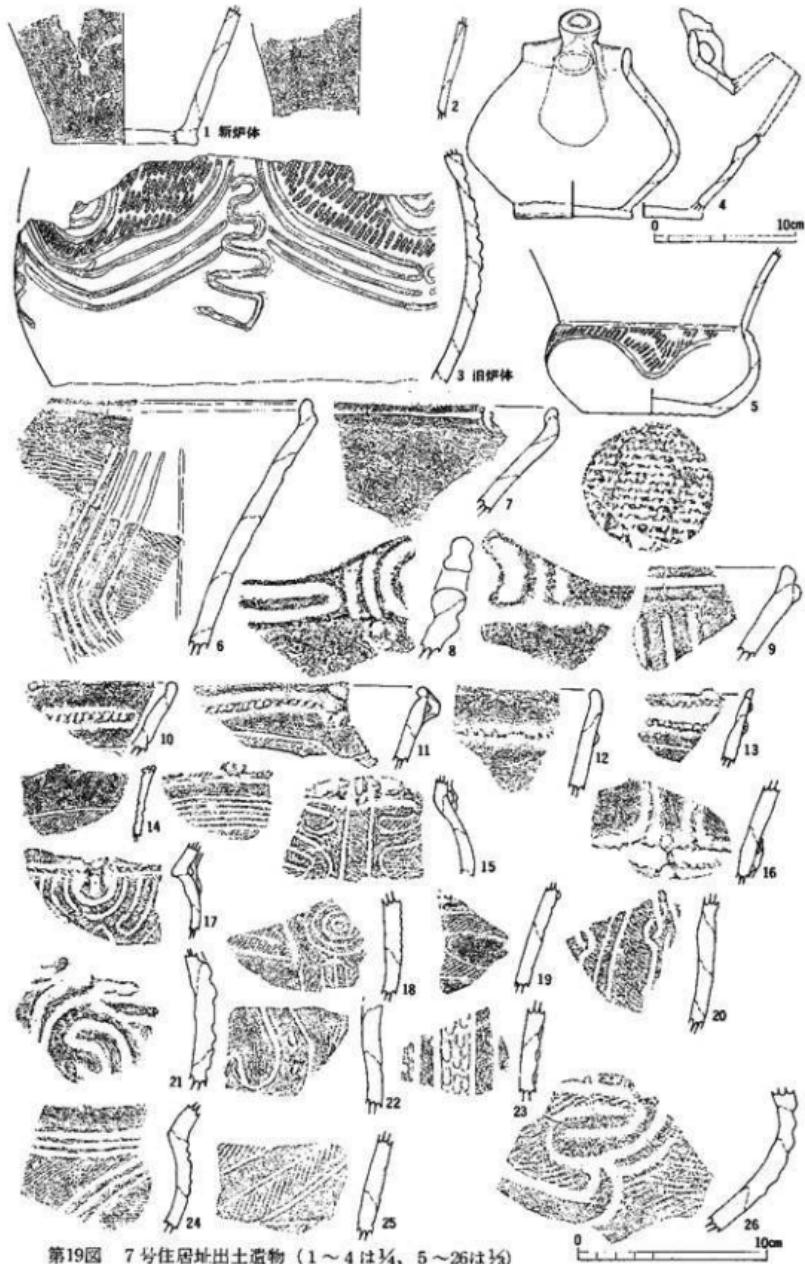
遺構 (第18図、図版3、4) 位置 I・J10・11 形態 入口と炉周辺に敷石を有する隅丸方形の堅穴住居址。経過 重機による表土剥ぎの際、苦土直下で入口部の敷石を検出したため、北へ追ってプランを確認した。掘方を調査中、炉の西側に別の埋甕炉が出現し建て替えを伴う住居址であることがわかった。覆土 上層は苦土と混合した黒褐色土層。下層はローム粒子を多く含んだ黄褐色土層で、遺物を包含する。掘方面はロームである。主軸 S-10°-W
規模 5.8m×4.5m×0.3m。入口部は3m×1.5m。床面 炉北側に1.2m×0.9mの安山岩鉄平石等による敷石が巾2.8mにわたって施されていたが、炉南側にも入口部から連続して敷石があったと考えられる。また入口部には最先端に最大径1mほどの鉄平石でテラスが設けられ炉に向って鉄平石による敷石が敷かれたうえに、その両側に「ハ」の字状に線石が並ぶ。しかも、



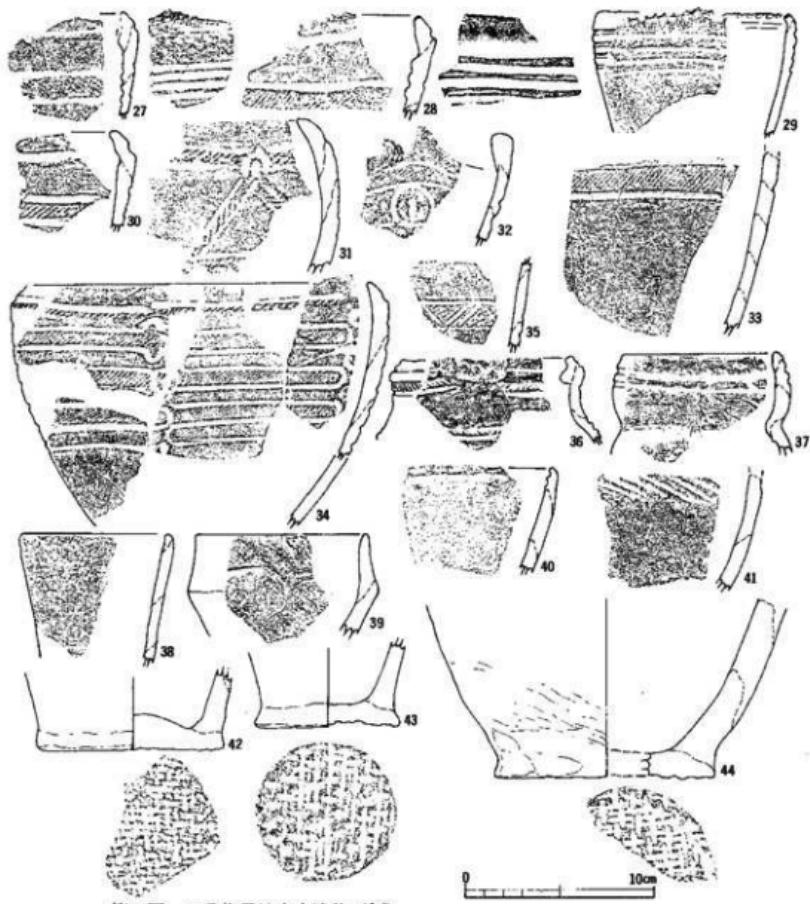
第18図 7号住居址 (1/6) L=889.04m

その末端には両脇に2本、途中に1本の合計3本の無頭石棒が直立して埋設されていた。そのほか住居址の壁際には、細長い鉄半片石や礫が1~2列、壁に沿って並ぶ。床面は敷石のレベルを想定すると全体的に欹弱であった。掘方は明瞭で、掘方~敷石面間やその上面にはあちこちに焼土ブロック、炭化物、焼成を受けた骨片の散布がみられた。周溝なし。ピット掘方面で確認したところによると、1辺4~5本の上柱穴のほか、その内側に2~3本の柱穴がありそうである。炉中央やや南寄りに0.6m×0.5mの方形石皿があり、その内部に上器底部を正位に埋設したが体土器が検出され、その周囲には少量の焼土が堆積していた。またその西0.5mの位置には、掘方面に正位にしっかりと埋設された直径30cmの深鉢形土器胴部利用の炉体土器が検出された。土器内の覆土は、上層が炭化物を少量含んだ黒褐色土、下層が茶褐色土である。上器の周囲の地山は焼成を受けていた。埋甕なし。遺物出土状況 敷石のレベル付近からやや多くの遺物が出土した。また、細片化した骨片が、敷石の上下を問わざ各所から多量に出土した。

遺物（第19~22図、図版9） 1 石圓炉中の炉体上器。2 1の外側に重なり合っていた胴部破片。3 旧炉の炉体土器。残存口径30cm、残存高16cmの壠之内1式の深鉢形土器胴部。沈線文→縄文LRが施文されている。胎土にはやや多くの長石、雲母、角閃石等がみられる。4 推定口径7.5cm、底径8.5cm、高さ14.5cmの注口上器。5 残存高8.5cm、底径7cmの壠之内2式の鉢形上器。胴部には沈線文→縄文LRが施文される。胎土には雲母、長石、石英を多く含む。床直出土。6 壠之内1式の深鉢形土器破片。沈線文→縄文LRが施文される。胎土には長石、スコリア、角閃石が多い。26 3と同タイプの上器。縄文はLR。胎土に長石を多く含む。28 口唇部に刻み目、外面には沈線間に縄文LR、内面には沈線が施される。胎土には長石が多い。29 口唇部に横8の字状の小突起をもつ小型深鉢形上器。推定口径10cm。胎土には多量の長石と雲母が含まれる。31 沈線文+縄文LR。やや多くの石英、長石、雲母を含む。33 加骨利B1式の深鉢形土器胴部。長石、角閃石を多く含む。34 内外面ともによく研磨された鉢形土器。推定口径18cm。沈線文→(肩部の刻み目、沈線文間の縄文LR)。胎土には少量の長石と微量の雲母がみられる。45 口径3.6cm、底径3.5cm、高さ4.7cmの無文の完形ミニチュア土器。炉北側の板石付近から出土。長石、角閃石を多く含む。46 口径4.4cm、底径2.5cm、高さ3.6cmの無文の完形ミニチュア土器。住居址のピット上層から出土。内側底に爪形圧痕が残る。52 住居址の東南隅出土の環状石製品。直径2.8cm、黄褐色の泥岩製である。2.2g。画面からの穿孔によって、中央に径1.2cmの孔が貫通する。従って幅0.6cmの環をなすものだが、使用法、類例については不明。58 側縁に垂直方向のかすかな擦痕をもつ、細砂粒の砂岩製磨き石。長径6.3cm、短径4.6cm、厚さ2.1cm。59 緑泥片岩製の小形石棒。重機による表土剥ぎの際に、入口部配石付近から検出された。60 入口部敷石末端の左側に直立して出土。自然石の表面を敲打によって調整している。長さ31cm、幅15.0cm。61 60の反対側に直立。長さ34.3cm、幅13.8cm。62 61の南側にピットを挟んで直立。長さ28.2cm、幅10cm。60~62ともに安山岩製で、図の上方を上にして埋設されていた。63 V字形にカーブした安山岩の不定形石製品で、敷石面



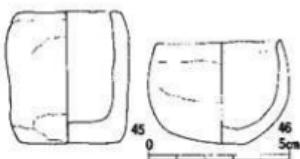
第19図 7号住居址出土遺物 (1~4は $\frac{1}{4}$ 、5~26は $\frac{1}{2}$)



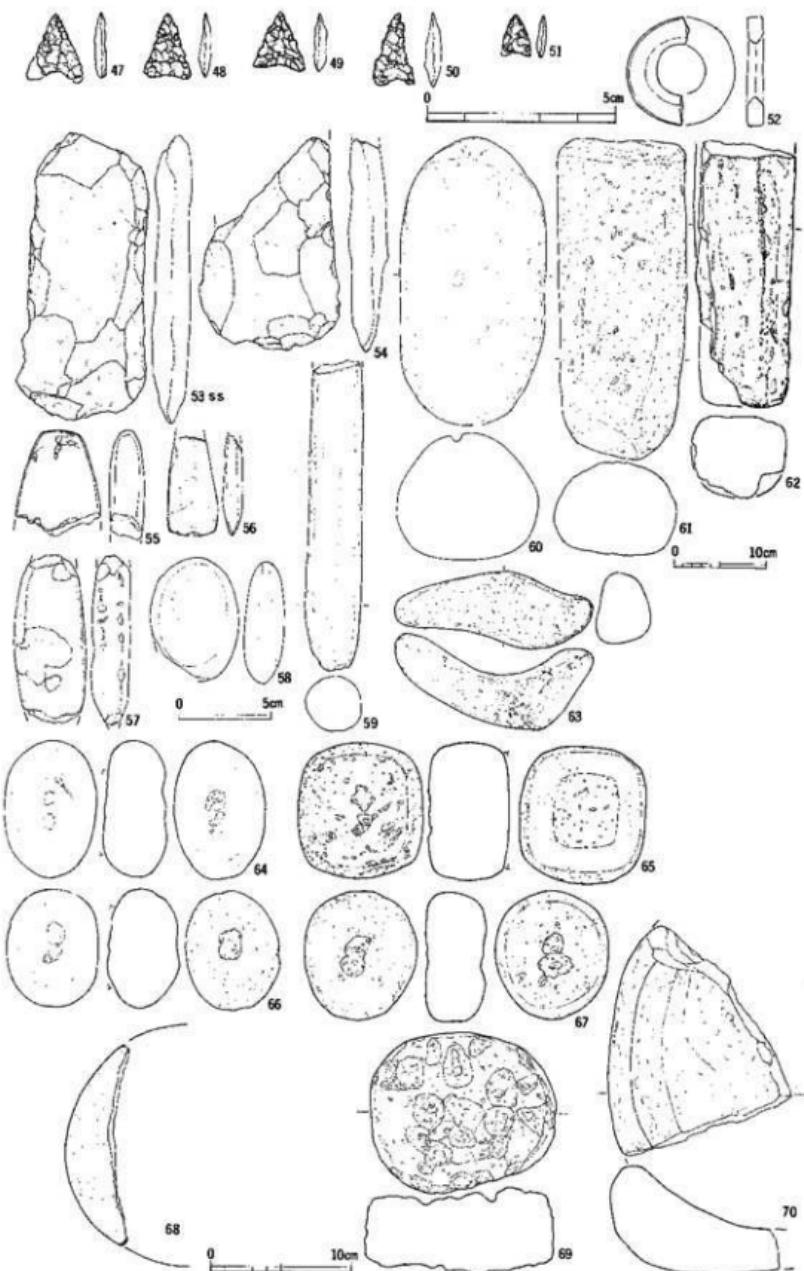
第20図 7号住居址出土遺物(少)

と同レベルで出土した。自然石をある程度加工してあると思われる。この他、水晶の結晶2本が入口部付近で出土した。

時期 堀之内1式期と、堀之内2～加曾利B1式期。



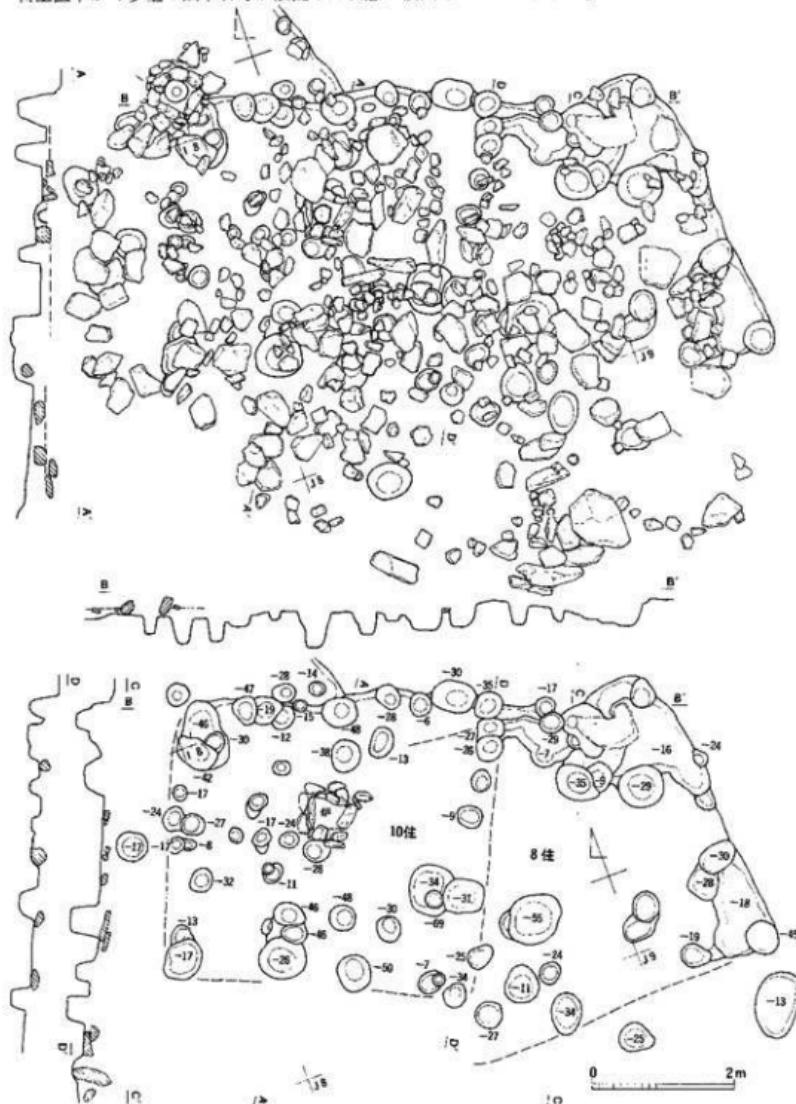
第21図 7号住居址出土遺物(少)



第22図 7号住居址出土遺物 (47~52は1/3、53~59は1/3、60~63は1/6、64~70は1/4)

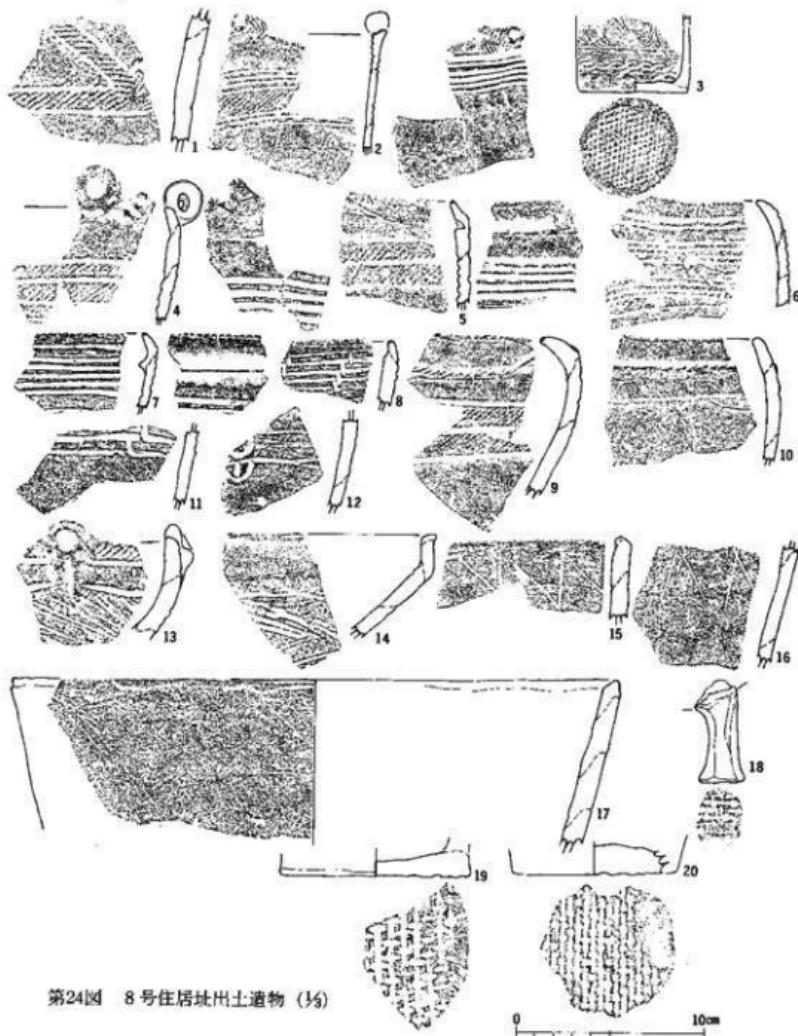
8号住居址

遺構（第23図、図版4） 位置I・J8 形態 配石を有する隅丸方形の堅穴住居址。経過苦上直下から多量の鉄半石等が散乱した状態で被出されたため、石を撤去しながら下げたところ



第23図 8・10号住居址(1/2) L=889.04m(上は礫出土状況、下はピット検出状況)

ろ、落ち込みと多数のピットが確認されて、その配置から住居址と考えた。西側が10号住と重複している。覆土 上層は茶褐色土層。下層は暗黄褐色土層。掘方面は非常に堅いローム面。主軸 S-3°-E 規模 南・西壁が不明のためはつきりしないが、 $4.2m \times (5m) \times 0.1m$ ほどであろう。床面 上層には多量の安山岩鉄平石や礫が攪乱された様子で散在していた。おそら



第24図 8号住居址出土遺物 (36)



く住居入口等の敷石の石材であろうが、この中には焼成を受けて赤変したものが3割ほど含まれていたことから、石の搅乱はあるいは人為的なものかもしれない。床面らしい堅い面は確認できなかった。周溝なし。ビット

20数箇所検出されたが、主柱穴は不明瞭である。炉 確認できなかった。埋甕なし。遺物出土状況 鉄平石等とほぼ同レベルで少量出土。

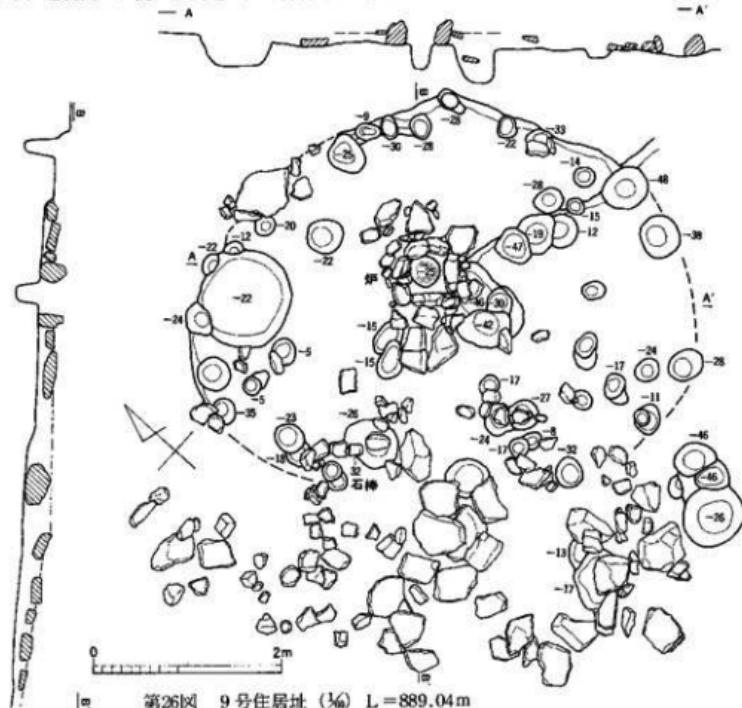
遺物（第24、25図） 1 堀之内2式の深鉢形土器胴部。沈線文→縄文L R。胎土には長石、石英、雲母を多く含む。5 口唇部に刻み目をもち、外面には3条の横位沈線→縄文R L、内面には6条以上の横位沈線を施す。長石、石英をやや多く含む。6 内外面ともよく研磨され、外面には肩部に2条、胴部に9条の横位沈線→縄文L Rを施文する。長石、角閃石を少量含む。8 口唇部に刻み目、口縁部外面には5条の横位沈線→4本の階段状縦位沈線、内面には1条の横位沈線を施文する。9~6号住居址の第16図15の浅鉢形土器と同一個体。13 把手をもつ鉢形土器。口縁部に2条の横位沈線を引き、その間を無文帶として上下に縄文L Rを施文する。胴部には2条単位の羽状沈線文を施文する。胎土には、チャート、泥岩、砂岩のやや丸い小礫を多く含むほか、長石、石英、雲母はもやや多く、八ヶ岳南麓の台上には存在しない胎土構成を示す。15~16と同一個体。外面に格子目文、内面に1条の沈線が施された粗製の深鉢形土器。胎土には雲母、石英、長石、スコリア、角閃石が認められる。17 無文の粗製深鉢形土器。胎土には長石、石英等を多く含む。18 底面に網代痕をもつ上器の脚部と思われる破片。21 口径3.7cm、底径3cm、高さ4.8cmのミニチュア上器。

時期 堀之内2式～加曾利B1式期頃であろう。

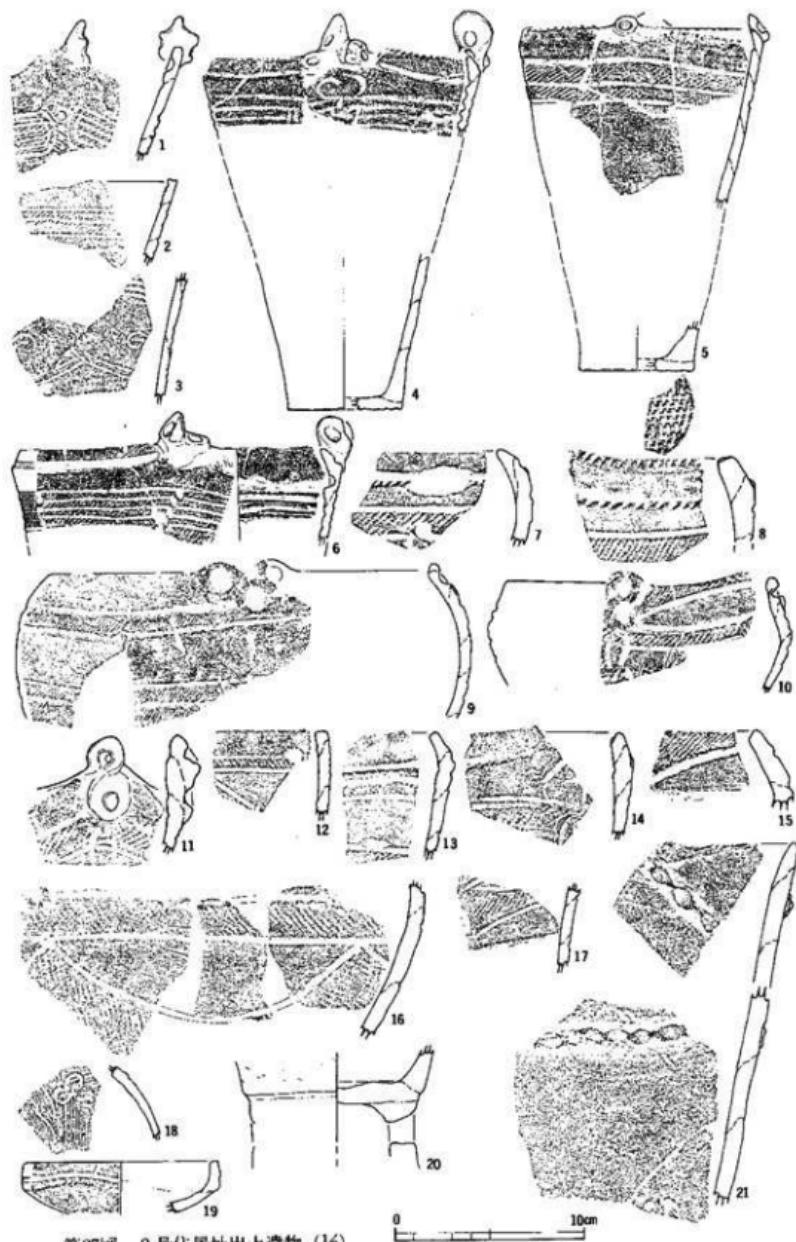
第25図 8号住居址出土遺物
(21は1/2、22~24は3/4、25~28は1/4、29・30は1/2)

9号住居址

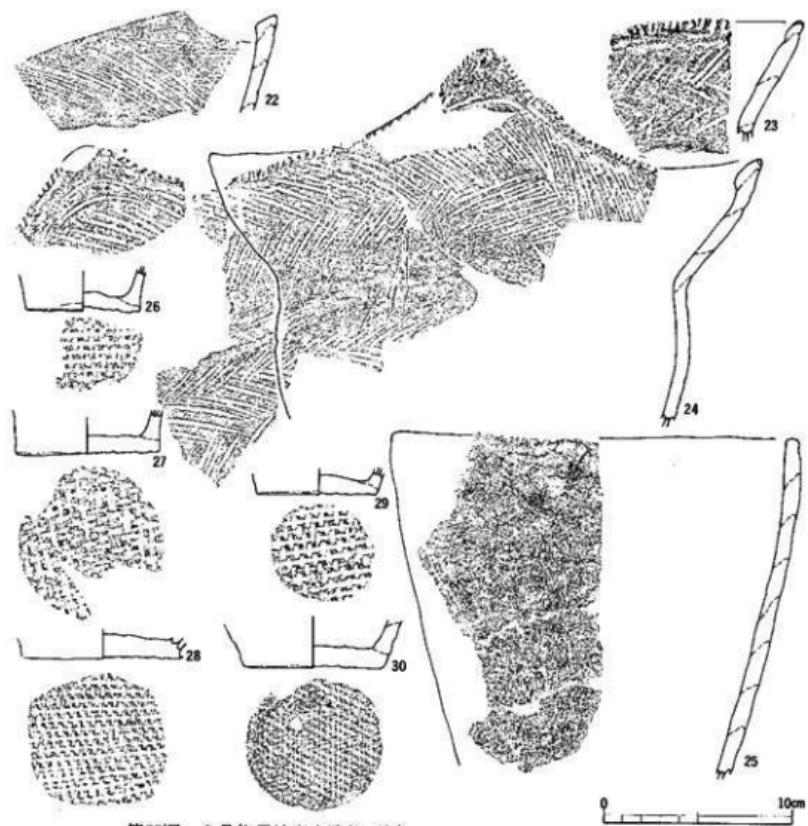
遺構 (第26図、図版4,5)位置 H・I 7・8 形態 炉の前方と入口部に敷石を有する柄鏡形プランの竪穴住居址。 経過 既に試掘によって苔上直下から炉石と北壁の一部を検出していたため、その壁を追って南側を下げたが壁は西側で消滅、東側では10号住居址との重複によって遺存状況は不良であった。掘方面で検出したピットと入口部の敷石からプランを推定した。**覆土** 8・10号住居址覆土の黄褐色土面が本址の床面に相当し、その上層には部分的に苔土と混合した茶褐色土が堆積していた。掘方面はロームである。**主軸** S-45°W 規模 (5.3m) × 4 m × 0.15m。入口部は 3 m × 2 m の範囲と思われる。**床面** 黄褐色土上面には堅い面はなかったが、敷石レベルが床面と思われる。入口部の敷石には、その西側に石棒を含む角礫等で配石が認められた。**周溝** なし。 **ピット** 壁下に小さめのピットが約20箇所、住居址内に敷設所あるが、そのうち主柱穴は内側に4本想定できよう。**炉** 中央やや北西寄りに、前方部に敷石を有する方形石囲いが設けてあった。石囲いは 0.6 m × 0.7 m の規模で、中央に10号住居址のものかと思われるピットが掘り込まれる。炉内には焼土が薄く堆積していた。**埋甕** なし。**遺物出土状況** 炉周辺と入口部付近から出土した。また入口部の配石中には石棒片が組



第26図 9号住居址 (1%) L = 889.04m



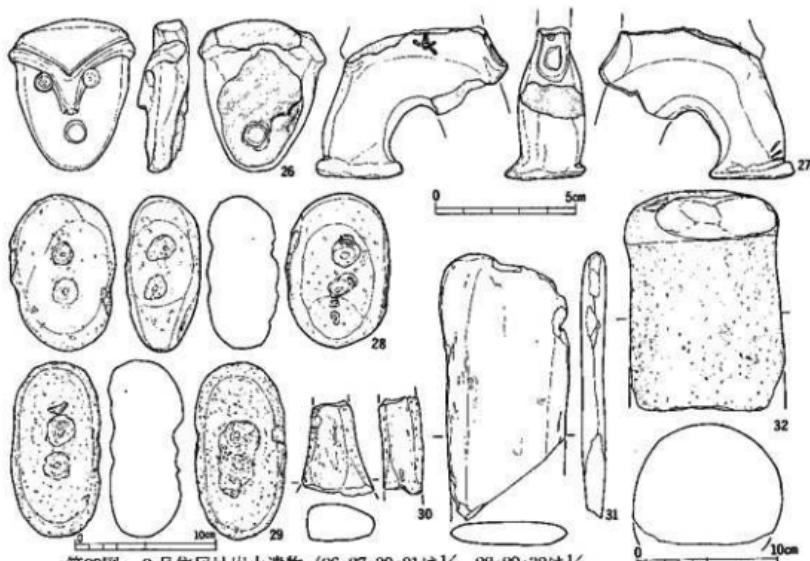
第27圖 9號住居址出土上遺物 (36)



第28図 9号住居址出土遺物(3)

み込まれていた。

遺物（第27～29図）1 沈線文→縄文R。3 2条の沈線文間に縄文RLを施す。4 耳状把手をもつ深鉢形土器で、推定口径18cm。口唇部に斜み目を有し、外面に4条以上の横位沈線文と把手下の逆「の」の字文、内面に5条以上の横位沈線文が施される。胎土には長石、スコリアを多く含む。5 把手をもつ深鉢形土器で、推定口径15cm。口唇部に刻み目、外面に3条の横位沈線文+縄文L。胎土には雲母、長石が極めて多い。6 耳状把手をもつ深鉢形土器で、推定口径16cm。外面の縄文はL。9 推定口径20cmの加骨利B2式と思われる鉢形土器。口縁部に3個の窪みによる装飾を施し、その下に縦位沈線を2本引く。縄文はL。胎土には雲母、石英、長石がやや多い。10 推定口径14cmの鉢形土器で、口縁部に弧線文、把手下に対弧文を施す。縄文はLR。雲母がやや多い。16 脚部に弧線文をもつ鉢形土器。縄文はRL。胎土に



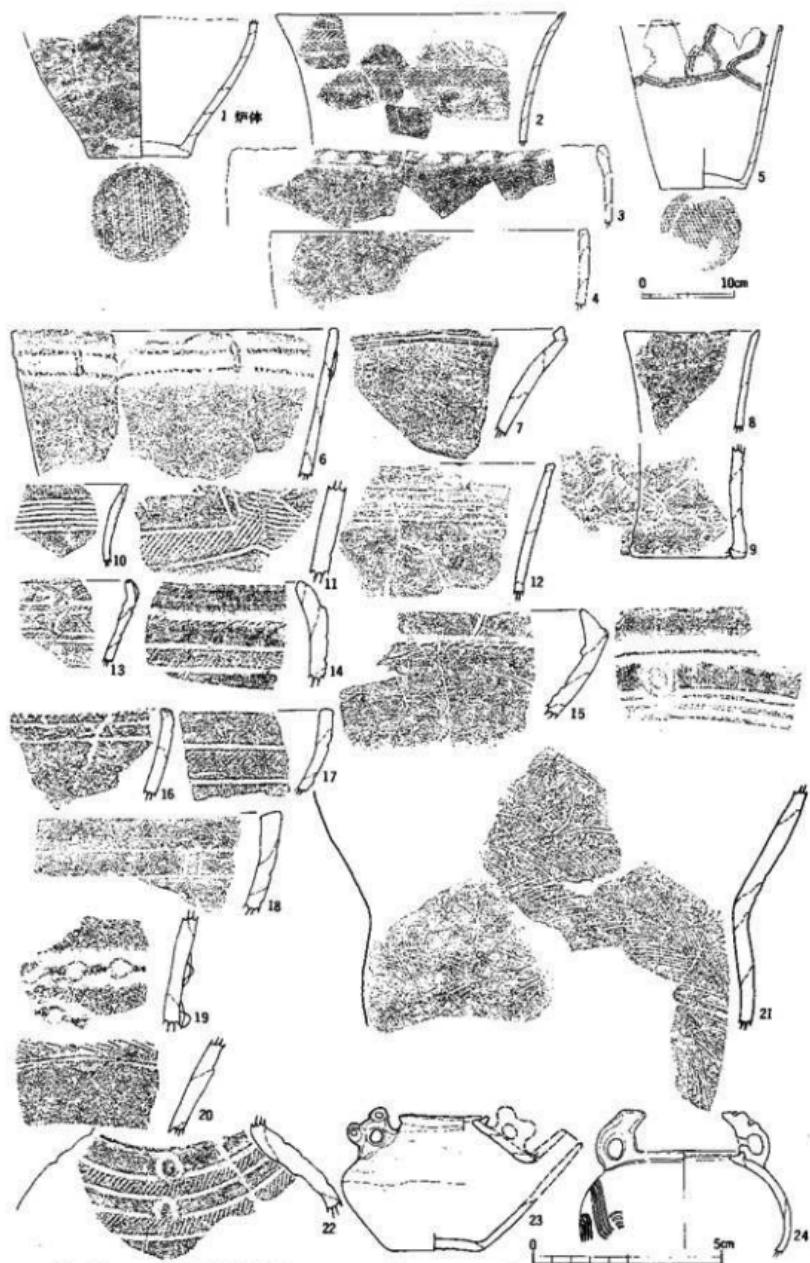
第29図 9号住居址出土遺物 (26-27・30-31は1%, 28-29・32は1%,
33-34は2%, 35は1%)

長石を多く含む。20 円孔状の透かしを有する台付土器底部。21 押圧のある紐線文をもつ粗製深鉢形土器。胎土には、長石、スコリアが多く、石英、雲母もみられる。24 推定口径29cmの羽状弦線文上器。殆んどの破片はD7の出土である。口縁部内面には厚い炭化物、胎土には長石、石英が認められる。25 無文の粗製深鉢形土器。長石、石英を非常に多く含む。26 土偶頭部。破損面は接合面である。27 土偶脚部。腹部の断面に接合面が観察される。棒状圧痕等はない。30 砥石。粗粒の砂岩製。31 用途不明の石製品。砥石の可能性がある。32 入口部配石の石棒。長さ15.3cm、幅11cmの安山岩製である。

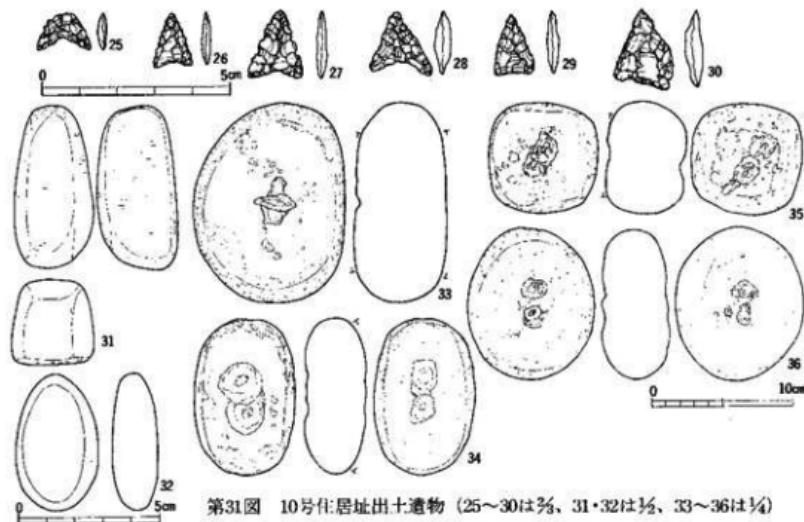
時期 加曾利B1式期～2式期。

10号住居址

遺構 (第23図、図版4,5)位置 17・8 形態 配石を有する隅丸方形プランの堅穴住居址。
経過 9号住居址の調査中、8号住居址と同じく散乱した多量の礫、鐵平石の間に炉石が検出されたため確認できた。覆土 8号住居址と同一。多量の礫は、炉石上に乗った例から住居廃絶後に堆積したものが多いと思われる。主軸 S-33°W 規模 4.5m×4m×0.3m 床面 明確な敷石はなかったが、入口部に平らに設置された鐵平石が残存しており、6・7・8・10号住居址同様、入口部には敷石があったものと考えたい。床面は平らな鐵平石と同レベルにあったと思われる。周溝 なし。ピット 壁下に25箇所、入口部にやや大きめなものが2箇所、住居内側



第30図 10号住居址出土遺物 (1~5は $\frac{1}{4}$ 、6~23は $\frac{1}{2}$)



第31図 10号住居出土遺物 (25~30は $\frac{1}{2}$ 、31・32は $\frac{1}{2}$ 、33~36は $\frac{1}{4}$)

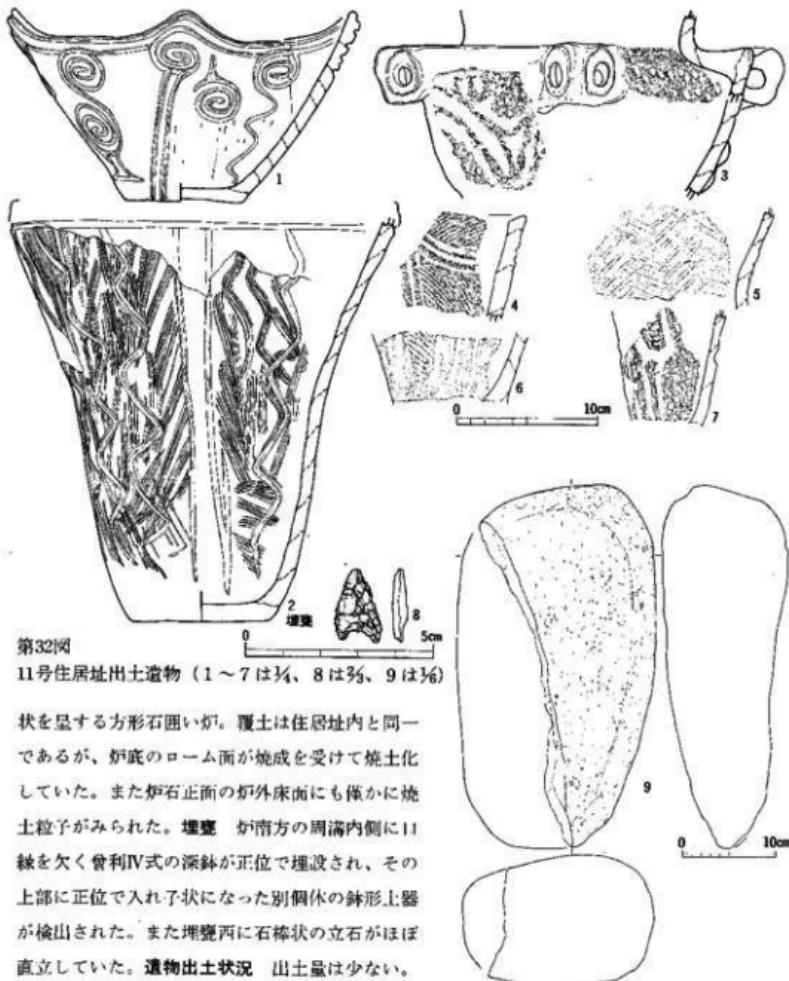
に10款箇所みられる。このうち北壁下のピットにはしっかりした掘り込みのものが多い。住居の1辺に3~4本程度の柱穴が想定できそうである。炉 住居の中央からやや北寄りに炉体土器をもつ方形石囲い炉が検出された。0.7m×0.7m×0.2mの4枚の安山岩による方形石囲いの周囲に礫が並び、炉石は焼成を受けてひどく割れていた。また、炉体土器は胴下半の深鉢形土器を利用していた。炉内覆土は炭化物を含む茶褐色土であるが、焼土は全くなし。埋甕なし。遺物出土状況 磨中、或いは磨下からほとんどの遺物が出土した。

遺物 (第30・31図、図版9) 1 炉体土器。内面中ほどに黄白色の灰と思われる帶がみられる。残存口径25.5cm、底部11cm、残存高15cm。2 3条の沈線内に羽状沈線を施した帯状の文様で構成された深鉢形土器。細片化した雲母を多量に含む。3 推定口径40cmの粗製深鉢形土器。口縁部には粘土帶上に斜めの指頭圧痕状の痕みが連続する。胎土中に角閃石がやや多い。5 角閃石、輝石を多く含むほか、長石、安山岩もみられる。6 推定口径17cmの深鉢形土器。胎土には多量の長石、少量の角閃石を含む。11 繩文はL R。12 4条の横位沈線→繩文 L R→3個の刺突。14 肩部に刻み目、沈線間に縄文 L Rが施される。19 純縄文の粗製深鉢形土器。多量の石英、泥・砂岩粒子のはか安山岩、長石も多い。21 波状口縁を有する羽状沈線文土器胴部。雲母、長石をやや多く含む。22 2本の縩文(L.R)帯と縱連対弧文が施された注口上器胴部。23 注口部を欠損した小形注口上器。口径4.7cm、底径4.8cm、高さ7cm。堀之内式期のものであろうか。31 短軸方向に無数の擦痕を有する磨き石。後、面ともに使用痕が甚だしい。32 周縁に擦痕を有する円礫を利用した磨き石。31、32はともに硬質の泥岩製。

時期 堀之内2式期。加曾利B式土器は8・10号住居址からの混入だろうか。

11号住居址

遺構（第10図、図版2）位置 G・H16 形態 円形プランの竪穴住居址。経過 4号住居址調査中、4号住居址を切る形で検出された。西側は調査区外。覆土 茶褐色土層。掘面はローム。主軸 S-8°-E 規模 4.5m×(3.7m)×0.3m。床面 厳くしまっている。周溝 ほぼ全周する。北西部では2列重複する。幅20cm、深さ10cm。ピット 周溝内側に大小6箇所みられる。主柱穴は炉裏の1本を含めて5~7本であろう。炉 0.65m×0.6m×0.3mの掘炬鍵



第32図

11号住居址出土遺物（1～7は34、8は36、9は36）

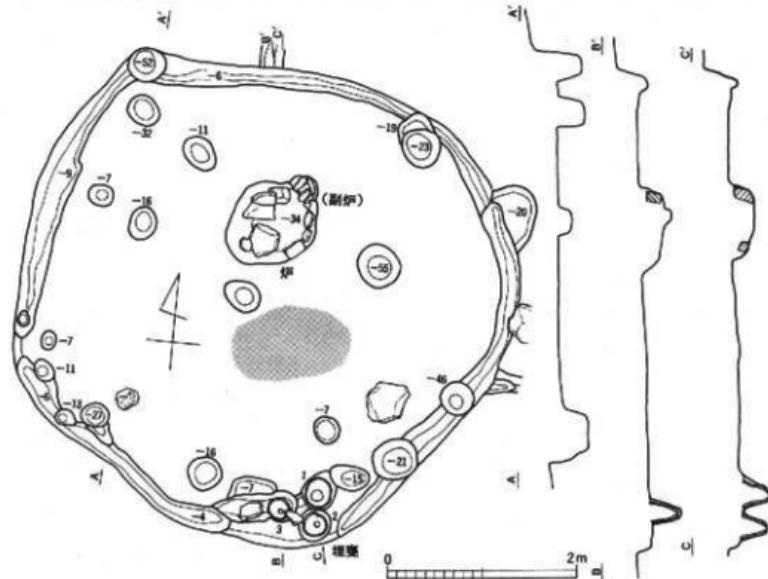
状を呈する方形石囲い炉。覆土は住居址内と同一であるが、炉底のローム面が焼成を受けて焼土化していた。また炉石正面の炉外床面にも僅かに焼土粒子がみられた。埋甕 炉南方の周溝内側に口縁を欠く曾利IV式の深鉢が正位で埋設され、その上部に正位で入れ子状になった別個体の鉢形土器が検出された。また埋甕西に石棒状の立石がほぼ直立していた。遺物出土状況 出土量は少ない。

遺物（第32図、図版9）1 口径24cm、底径8.5cm、高さ13.5cmの鉢形土器。4単位の波状口縁をなす。棒状工具による渦巻文、蛇行文等が施された類例の少ないタイプである。2 埋甕。残存口径27.5cm、底径10cm、残存高28cm。胸部を2本の縦位沈線で4単位に区切る→4本単位の櫛齒状工具で各区画内に蛇行文、斜線文等を充填→2区画内に1本づつの蛇行沈線を、残りの2区画内に2本づつの蛇行沈線を施す。胎土には長石、角閃石を多く含む。3 有孔鉗付土器。長石、石英が多く含まれるほか、花崗岩片（最大径0.5cm）がみられる。4 半截竹管によって口縁部に連弧文→胸部に縦位沈線を施した後、縄文RLを充填する。胎土には安山岩片、角閃石、輝石、石英を含む。6 縄文LR。9 埋甕西の立石。安山岩の転石。

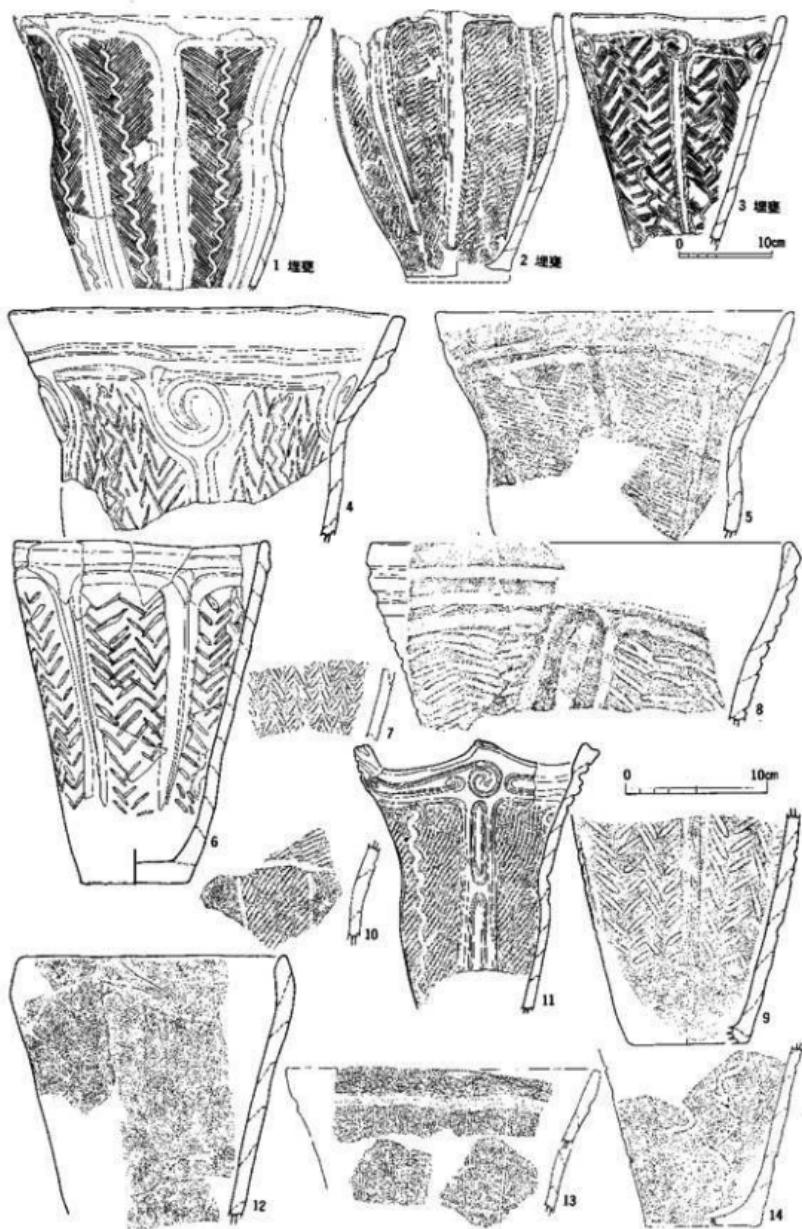
時期 曽利IV式期。

12号住居址

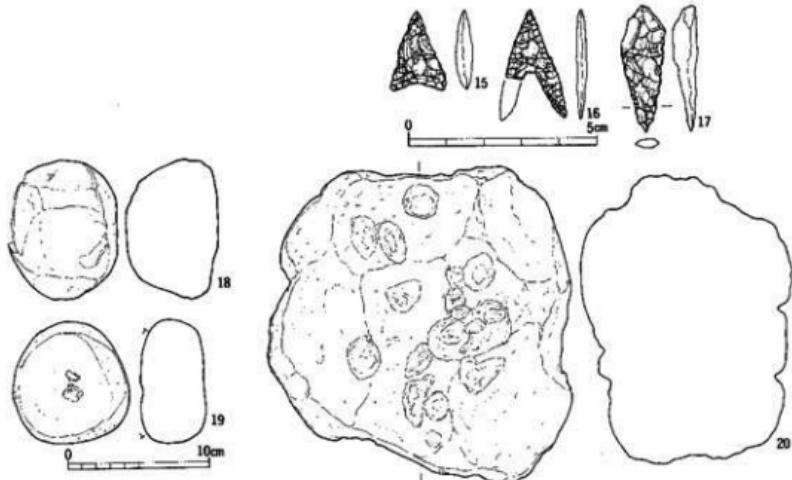
遺構（第33図、図版5） 位置 U 15・16 形態 円形プランの竪穴住居址。経過表土から僅か20cm程下げたところでまとまった土器とともに床面が検出されたため確認できた。西側は農道によって部分的に攪乱されている。覆土 上層は黒褐色土層（耕作土）、下層はロームブロックを多く含んだ黄褐色土層。地山はローム。主軸 S-3°-W 規模 5.3m×5m×0.25m 床面 ほぼ全面的に堅い床面が検出された。また、炉南側の1.2m×0.8mの範囲では、焼成を受けていた。周溝 ほぼ全周する。幅20~25cm、深さ10cm。ピット 約20箇所みられるが、4本柱穴+埋甕両脇の2本が主柱穴であろう。炉 中央やや北寄りに0.7m×0.7m×0.25



第33図 12号住居址 (3)



第34図 12号住居址出土遺物 (1~3は3/6, 4~14は3/4)



第35図 12号住居址出土遺物 (15~17は3%, 18~20は3/4)

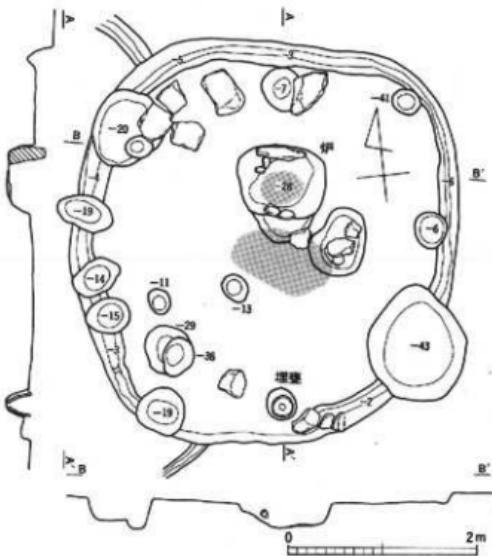
mの副炉を伴った石囲い炉が検出された。炉の石組はおそらく方形石囲いで、それが、抜き取りや崩落によってはつきりしない。副炉は炉北東隅に4個の礫で開口部を炉内へ向けてコの字状に組んでいた。伊那谷方面に類例は多いが、県内では白州町の根占屋遺跡1号住居址にある。埋甕 合計3個検出されたが、そのうち1には上層に厚さ5cmのロームによる貼り床がなされ、貼り床下の土器内には同一個体の口縁部片が落ち込んでいた。埋甕は複数個体埋設される場合、内側から外側へ埋設されるのが一般的であることから、埋設順序は1→2→3と思われる。遺物出土状況 猥んどは炉周辺のほぼ床面から出土した。

遺物 (第34・35図、図版9) 1 埋甕 残存口径33cm、残存高29.5cm。隆帯によって7単位の区画をした後、隆帯両脇のナデ→9本の櫛齒状沈線による矢羽根状文→蛇行沈線文を施す。
2 埋甕 残存口径25cm、残存高26.5cm。底部は内側から打ち抜かれている。胸部には縄文R L→沈線による10単位のX画→沈線間の磨消しを施す。
3 埋甕 口径23cm、残存高24.5cm、底部は打ち欠き。文様の施文順序は、6本の櫛齒状沈線による矢羽根状文→口縁部の横位沈線文(6単位)→縦位沈線文・蛇行沈線文。胎上には雲母、石英、角閃石、長石を含む。
4 口径28cmの深鉢形土器。
5 単位の区画内に連続への字文→蛇行沈線文を施文する。
5 推定口径25cmの深鉢形土器 文様の区画には隆帯による5単位の区画内に連続への字文を施文。5区画のうち1区画内には更に蛇行沈線文を施文する。
8 推定口径29.5cm 隆帯による区画がある。
9 隆帯による区画 胎土には長石、雲母が顕著である。
10 加曾利EIII式土器 縄文はRL。
11 口径16cmの小形深鉢形土器 施文順序は沈線によるX画→縄文R L→蛇行沈線文。
12 推定口径18.5cmの無文深鉢形土器 角閃石、長石を多く含む。
13 推定口径22cm 長石を多量に含む。

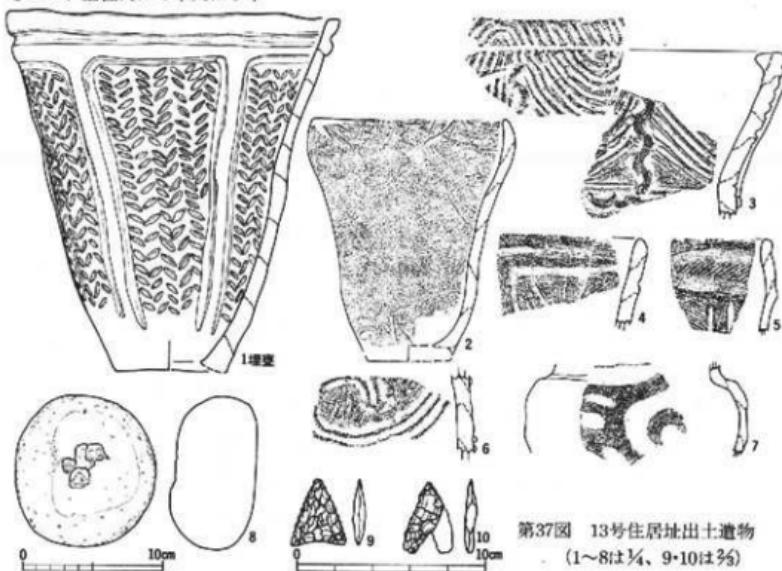
時期 曾利IV式(新)期。

13号住居址

遺構 (第36図、図版5) 位置
T16・17 形態 円形プランの
竪穴住居址。経過 炉と埋甕か
ら住居址と判断し、周溝を追っ
てプランを確認した。覆土 ロ
ームブロックを多く含んだ暗黄
褐色土層。主軸 S-8°-W
規模 4.2m×4.1m×0.2m 床面
西側で14号住居址と重複する。
が南側には1.1m×0.7mの範囲で
焼成を受けた床面があり、その
周辺では良好な床面が検出でき
た。周溝 南側の入口部を除い
て全周する。幅20cm、深さ2～
6cm。ピット 10箇所検出で
きたが、主柱穴は4本又は5本



第36図 13号住居址 (1/6) L=885.91m



第37図 13号住居址出土遺物
(1～8は1/4、9・10は2/3)

であろう。炉 中央やや北寄りに設置され、方形石囲い炉と思われるが、北側の1枚を残して抜き取られていた。炉内には薄い焼土の堆積層がみられ、ローム面も焼成を受けていた。埋甕底部を打ち抜いた深鉢形土器が、南壁から20cm内側へ入ったところに正位で埋設されていた。埋甕覆土はほとんど住居址覆土と同質であった。

遺物（第37図、図版9）1 埋甕。口径23.5cm、底径8cm、高さ25.5cm。隆帯による6単位の区画内に連続ハの字文が施文されている。胎土には雲母、長石を多く含む。2 口径14cm、底径6.5cm、高さ16.5cmの無文深鉢形土器。角閃石、長石を多く含むほか、安山岩片も混入する。

5 繩文L Rが施された加曾利E III式の深鉢形土器。胴部は沈線文→繩文。胎土には長石を多く混入する。6 隆線文→繩文R L。胎土には石英、長石を多量に含む。

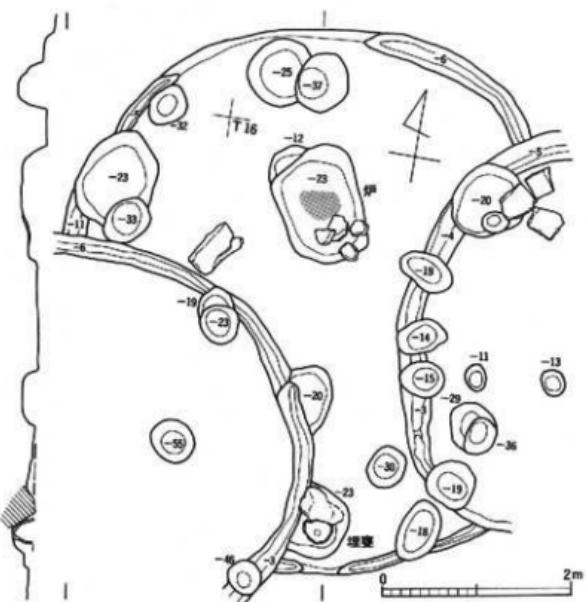
時期 曾利V式期。

14号住居址

遺構（第37図）

位置 S・T15・

16 形態 円形プランの竪穴住居址。経過 埋甕と炉から住居址と判断。周溝を追ってプランを確認した。覆土 黄褐色土層。地山はローム。西側を12号住居



第38図 14号住居址 (36) L = 885.91m

址に、東側を13号住居址に切られている。主軸 S-8°-E 規模 5.6m×5m×0.1m 床面 炉北側では、軟弱ながら床面、壁ともに残存していたが、南側では耕作が床面まで達しており、検出は不可能であった。周溝 幅10~20cm、深さ5~10cmの周溝が、北側と南側の一部を除き検出された。ピット 14号住居址内で8箇所みられるが、重複する12、13号住居址内検出のピットを考慮すれば、主柱穴は炉裏のピットを合わせて5本であろう。炉 中央やや北寄りに設置され、礎4個が検出されたが主要な炉石は撤去されたものと思われる。炉の掘方は1.1m×0.8m×0.25mの長方形プランを呈す。埋甕 壁から30cm内側に正位の埋甕が検出された。遺物出土状況 本住居址に伴う遺物は埋甕だけで、その他の出土遺物は少ない。

遺物（第39図）1 埋甕。推定口径32cm、底径10.5cm、高さ36cm。口縁部には半截竹管文、胴部には2条単位の沈線文（半截竹管を使用した可能性が強い）を施し、粘土紐によって蛇行懸垂文、渦巻文等がおそらく4単位分描出されている。

時期 曽利II式期。

15号住居址

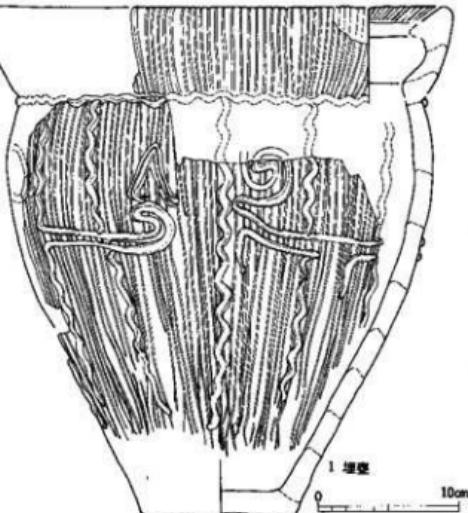
遺構（第40図、図版6）位置 K
13・14、L13 形態 四丸方形プランを呈し、入口部に敷石を有する住居址。経過 炉石と敷石から確認したが、壁がないためピット列を追ってプランを検出した。覆土 6号住居址の覆土上層と同じ黒褐色土層。

西側で6号住居址と重複するが、新旧関係をつかむことはできなかった。主軸 S-33°-W
規模 5.3m×5.1m 床面 入口部分の敷石レベルと、炉石レベルから、床面は掘方（地山）面より10cmほど上に存在していたかと思われるが、はっきりと確認することはできなかった。入口部分の敷石の多くは攪乱され、原位置を保っていたものは僅かである。また、敷石面は緩い傾斜をもって南へ伸び、敷石付近にはややまとまった配石がみられた。なお北西隅は水田に伴う暗渠排水によって破壊されていた。周溝 なし。ピット 北側に8箇所、南側に7箇所、西側に8箇所ほど、それぞれほぼ直線的に並んで検出されたが、6・7・8・9・10号住のように壁を伴って存在したと思われる。また、住居址本体と入口部の間には、他のピットに較べ径、深さともに大きなピットが、住居址の主軸を挟んで2箇所確認された。炉 焼かに窪んだ掘方面から2cmほど浮いて安山岩角礫を半円形に組んだ、というよりは並べた状態の炉石が、住居址の中央よりもやや南側で検出された。炉内の掘方は焼成を受けていたほか、炉周辺には焼上がりが広がっていた。埋甕 なし。遺物出土状況 入口部敷石中央から出土した不定形扁平石のほか、右枕片を利用した多孔石は本址に確実に伴う数少ない出土遺物である。

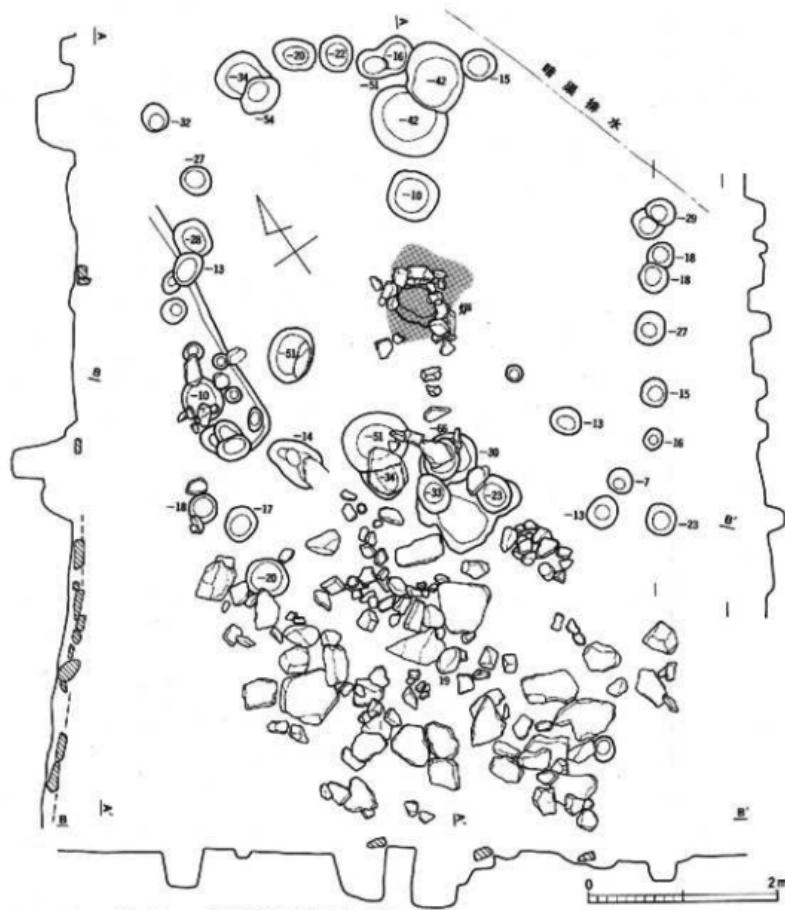
遺物（第41図）1 口唇部に刻み目、外面に4条の横走沈線とそれを縦に区切る蛇行懸垂文、内面には削り出しによる隆線がみられる。胎土には多量の長石と石英、雲母、泥岩を含む。

2 横位沈線間の縄文はRL。4 口唇部の縄文はRL。5 横位沈線間の縄文はLR。7
推定口径13cmの小型深鉢形土器。胎土には長石、角閃石をやや多く含む。内面の調整は荒い。

10 口径6cm、底径6cm、高さ8.5cmの完形のミニチュア土器。外面には6面の渦巻文、菱形文



第39図 14号住居址出土遺物 (3/4)



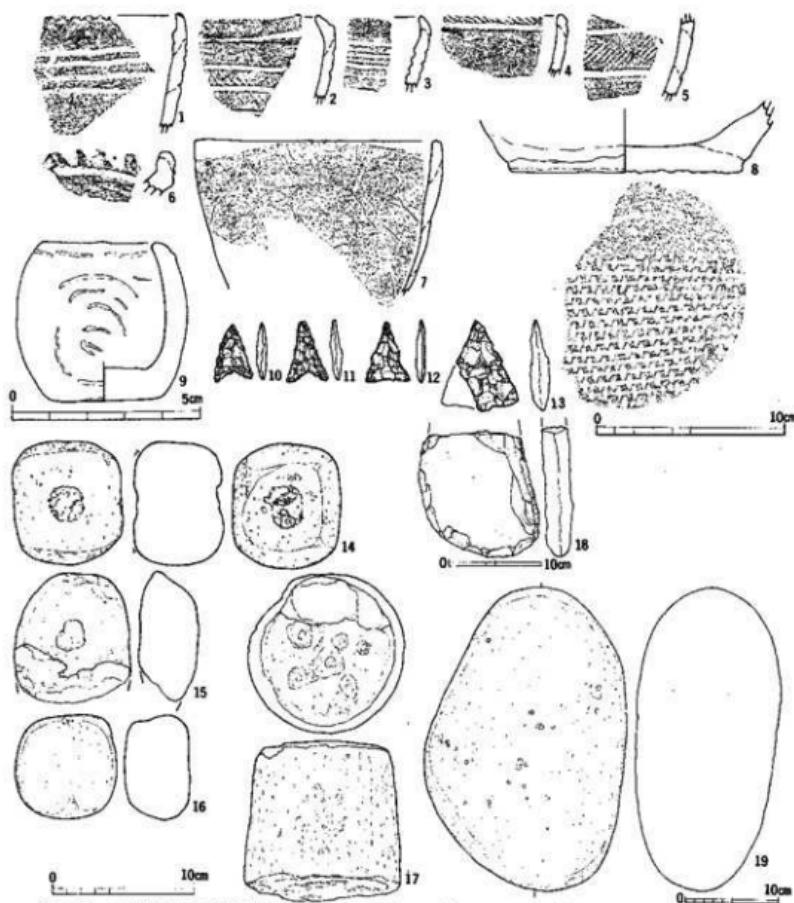
第40図 15号住居址 (15) L=889.64m

等が沈線によって描かれる。雲母を多く含むほか、石英もみられる。17 長さ11cm、直徑約10cmの石棒片の両端を平らにし、溝みを加えた多孔石。19 数石部分から出土した不定形扁平石。

時期 加曾利B 1～2式期。

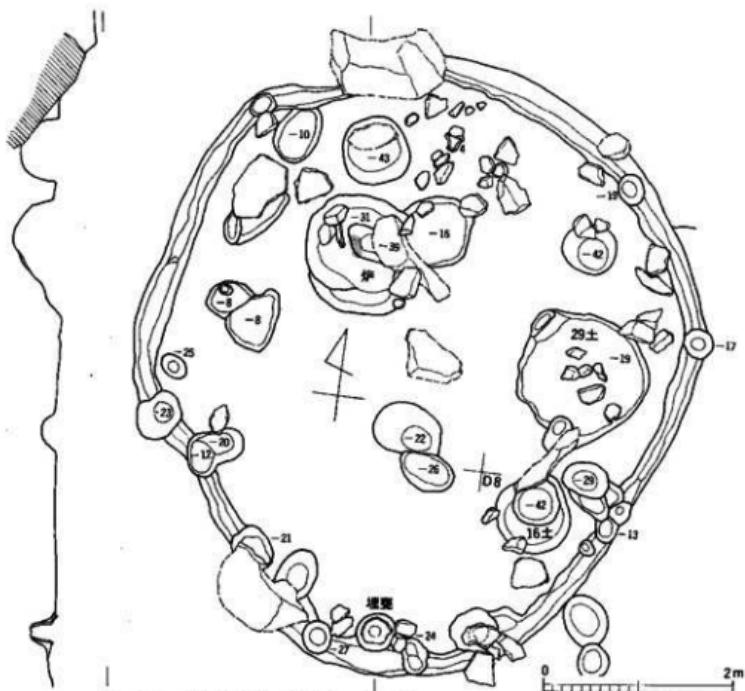
16号住居址

遺構 (第41図、図版 6) 位置 C・D 7・8 形態 指円形プランの堅穴住居址。経過埋甃と堅い床面から住居址と判断し、周溝を追ってプランを確認した。覆土 1層—黒褐色土層。加曾利B式土器を伴う。2層—暗黄褐色土層。3層—黄褐色土層。掘り込み面(地山)一ロ



第41図 15号住居址出土遺物 (1~8・18は3%, 9は3%, 10~13は2%, 14~17は3/4, 19は1%)

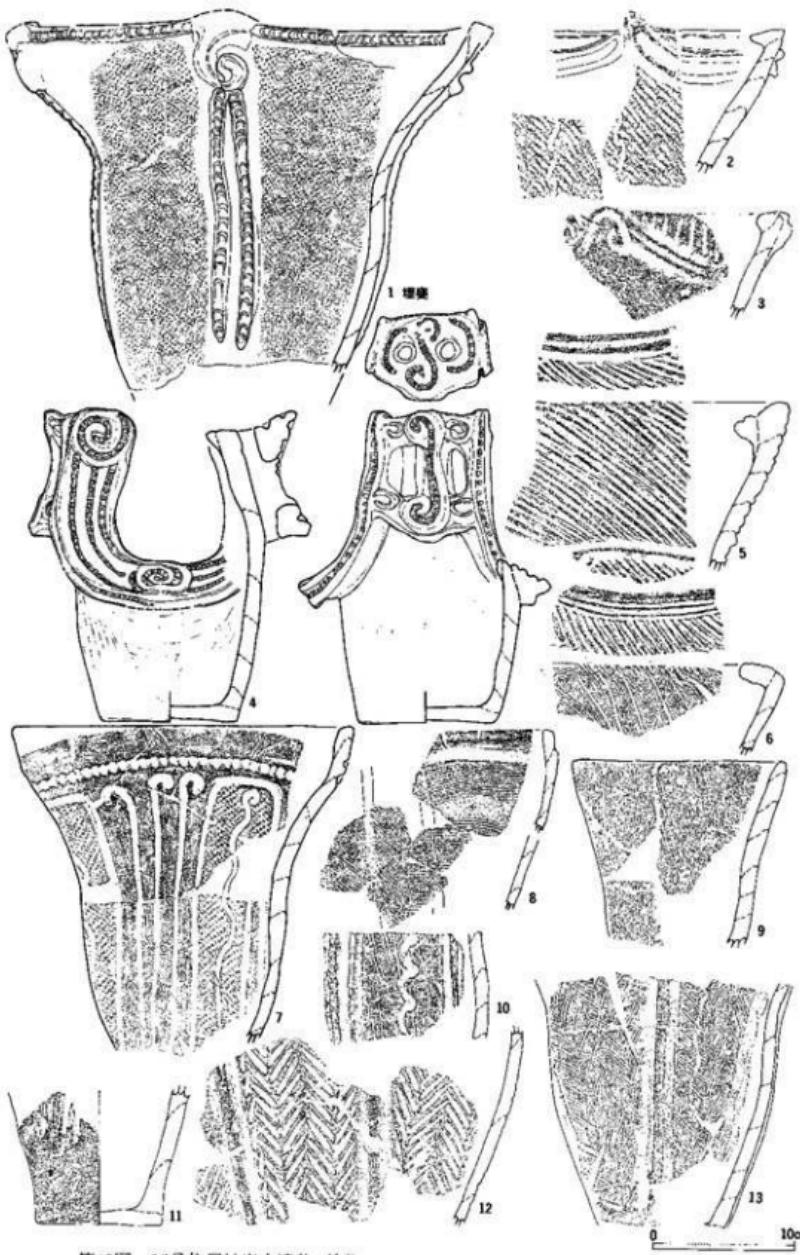
ーム層。東側で17号住居址を切る。主軸 S-10°-E 規模 6.5m×6m×0.4m。床面 全体的に良好。東側で16・29号土壤と重複する。周溝 ほぼ全周する。ピット 周溝内側に10箇所のピットが検出されたが、土柱穴は炉裏の1本、埋甕両脇の2本を含めて計7本であろう。炉 住居址の中央や西北寄りに円形プランの掘り込みをもつ炉址が検出された。炉址内東側には埋没した巨石が露出し、石圓いの石の一郎として利用されたと思われるが、その他には数個の礫が残るのみで炉石の多くは撤去されていた。掘方は1m×1.2m×0.4mで、おそらく方形石圓い炉であったと思われる。炉底には焼土が僅かに堆積していた。埋甕 南側周溝に接して胴下半を欠く正位の埋甕が検出された。中にしまりが弱い茶褐色土が堆積してい



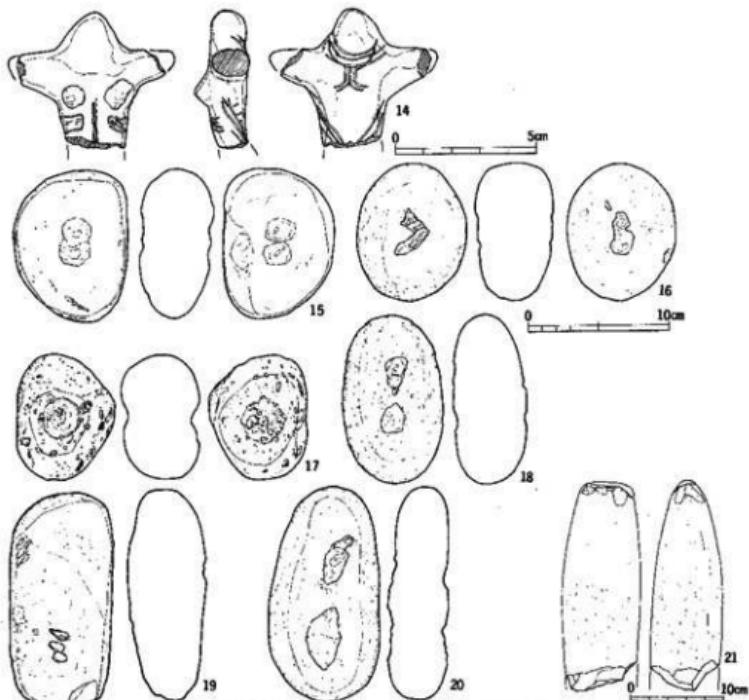
第42図 16号住居址 (36) L = 890.56m

た。遺物出土状況 炉北側の床直面に、片方の把手を欠く鉤手十器が倒れていた。また炉中からは圓石、土偶が出土した。

遺物 (第43・44図、図版9・10) 1 埋甕。推定口径34cm、残存高26.5cm。4単位の緩い波状口縁をなす深鉢形土器で、粘土紐を貼付した上に半截竹管の押し引きを施し、地文としてRLにLを右巻きにした特殊な繩文を施文している。胎土中には多量の石炎、長石と雲母、砂岩、泥岩を含む。2 口縁部に弧状の隆線文をもつ深鉢形土器。腹部にはL R十結節繩文を施す。胎土には雲母、角閃石がみられる。4 釣手土器。口径2.2cm、底径9.6cm、高さ11.2cm(把手まで22cm)。2個の把手がやや内側へ傾いて立つタイプで、把手上面には紐を通すための直径1.3cmの孔が2個あくほか、把手側面にも紐がはずれないとための工夫がしてある。主たる文様は、粘土紐による渦巻き文とそれらを結ぶ沈線文であるが、沈線文中にはベン先状の棒状工具による刺突文が連続する。胎土には安山岩片がみられる。なお使用痕と思われる黒色変化した部分が、内面中央部分から外面にかけて観察される。5 半截竹管使用。6 口縁部の屈曲部上面には半截竹管文、下部は5本単位の櫛齒状沈線が施文される。胎土にはやや多量の雲母のほか、石



第43圖 16号住居址出土遺物 (1/4)



第44図 16号住居址出土遺物 (14は $\frac{1}{2}$ 、15～20は $\frac{1}{4}$ 、21は $\frac{1}{3}$)

英がみられる。7 推定口径24cmの加曾利E IV式土器。口縁部に刺突を伴う沈線文、腹部には推定5単位の沈線による区画の中に、縦位の縄文RL→先端が歯手状の蛇行懸垂沈線文が施文される。胎土には安山岩片や角閃石がみられる。8 胎部に横位、斜位の7本単位の櫛齒状沈線文→縦位沈線が施文される。胎土には角閃石、長石が多い。9 推定口径15cm。外面には約8本単位の櫛齒状沈線が縱走する。胎土には角閃石、長石、スコリアがみられる。12 陸線による縦区画の中に連続ハの字文が施文される。胎土には長石を非常に多く含むほか、石英、角閃石を含む。13 陸線による縦区画内に、連続ハの字文が2本組み沈線によって施文され、その後陸線陶脇にナデを加えている。長石、石英、角閃石を多く含むほか、泥岩がみられる。

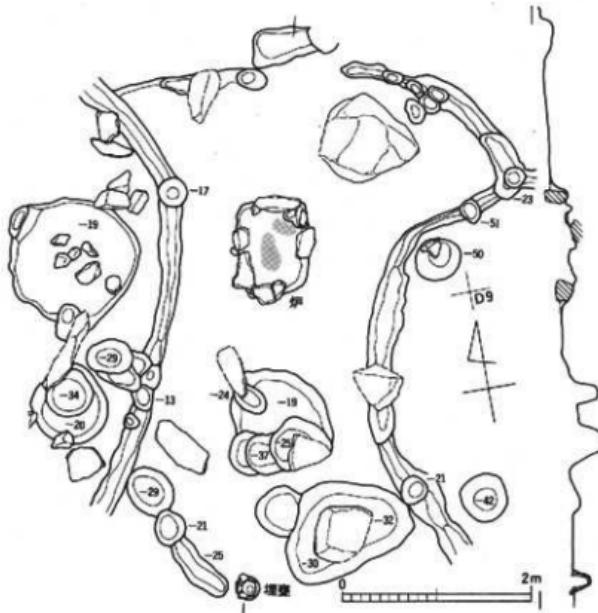
14 土偶。全長4.7cm。顔面は無文。断面に接合帶、棒状圧痕はみられない。

時期 埋甕と釣手土器から住居址の時期は曾利II式であるが、その後曾利IV～V式期に再び土器等の廃棄が行われたと思われる。

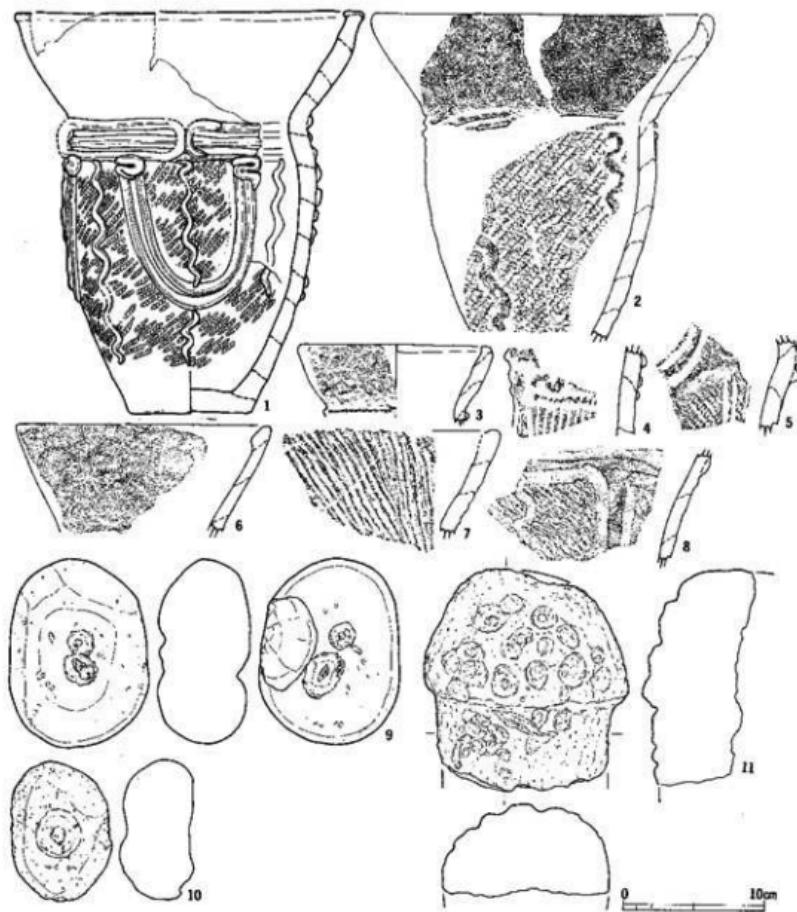
17号住居址

遺構（第45図、図版6）位置 C 8・9 形態 円形プランの竪穴住居址。経過 炉石と埋甕から住居址と判断。北・東・西側をそれぞれ21・18・16号住居址に切られているため壁はなく、周溝によってプランを確認した。覆土 黒褐色土の混合した暗黄褐色土層で厚さは僅か10数cmである。主軸 S-10°-W 規模 南北5.5m 床面 良好でない。周溝 南側の埋甕付近と北壁にない部分がある。ピット 床面上に数箇所みられるが主柱穴は不明。4~6本かと思われる。炉 中央やや北寄りに、1.1m×0.9m×0.1mの長方形石窓い炉が検出された。炉石は東西約3個、南北約1個の安山岩礫で組んだものと思われるが、数個が撤去されていた。焼土は部分的に確認できた。埋甕 正位の埋甕が南側周溝脇で検出された。遺物出土状況 少量の遺物が散在していた。

遺物（第46図） 1 埋甕。外径24.5cm、底径8.5cm、高さ27.5cm。曾利II式期の深鉢形土器である。施文順序は頸部に3本の横位隆線貼付→胴部に横位縄文L R施文→4単位のU字状粘土紐貼付→逆S字状粘土紐、蛇行懸垂粘土紐貼付である。本例は、縄文中期後半の住居址内に埋設された数多くの類例の中でも初期の例として貴重である。2 推定口径24cmの深鉢形土器。施文順序は頸部の2条の横位沈線→縦位の縄文R L→扁平な蛇行懸垂粘土紐貼付であ



第45図 17号住居址 (3)



第46図 17号住居址出土遺物 (34)

る。胎土には角閃石、長石、石英がみられる。5 胸部は縦位の縄文L R→3条の縦位沈線。
8 区画内は縄文R→蛇行懸垂沈線文、骨利IV式併行か。11 縦に割れた有頭石棒頭部の表面
に窪みをつけて多孔石として再利用したもの。埋堀東のピット上層から出土した。

時期 骨利II式(古)。

18号住居址

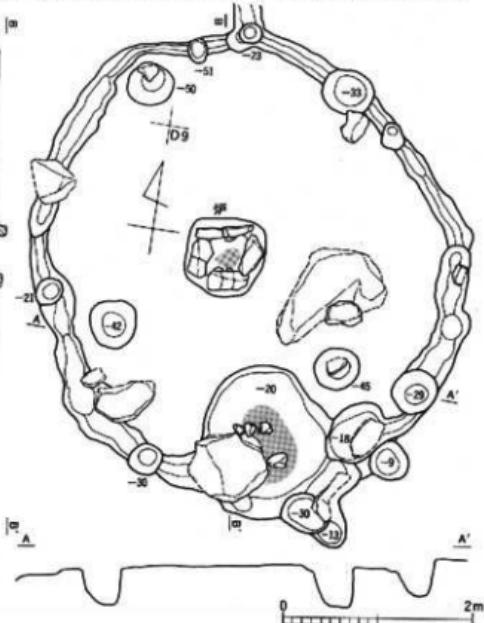
遺構（第47図、図版7）位置 C・D 8・9。形態 円形プランの竪穴住居址。経過かの検出後、周溝を追ってプランを確認した。壁はほとんど存在しなかった。覆土 16・17号住居址とほぼ同じ。主軸 S-11°-E 規模 4.8m×4.6m 床面 全体的に軟弱。南側では焼土を伴う土壤と重複する。周溝 ほぼ全周する。ピット 10箇所余り検出されたが、主柱穴は4本であろう。炉 ほぼ中央に4枚の安山岩を用いた方形石囲いの炉が完存した。大きさは0.7m×0.6m×0.3m。炉底には2cmほど厚さの焼土が堆積していた。

埋甕 通常の埋設位置に土壤が重複しているため、現状では存在しない。遺物出土状況 僅かの小片が散在した。

遺物（第48図）1 推定口径25cm。胴部には縦位の縄文RLを施す。胎土には長石、角閃石がみられる。2 連続ハの字文を底部付近で横位に施した珍しい例。長石、角閃石を多く含む。3 曾利II式深鉢形土器胴部。3条の竹管文→縄文LR→粘土紐貼付。

4 縄文はR。5 LRの結節縄文をもつ。胎土には長石、石英、角閃石がやや多い。

時期 曽利IV式期か。



19号住居址

遺構 (第49図、図版7) 位置 D・E 7・8。形態 円形プランの竪穴住居址。経過 水田の畦に南側半分がかかるて半円形の落ち込みが検出され、住居と確認。南側半分は田普請によって削平され調査不能。覆土 ローム粒子をやや多く含んだ茶褐色土層。主軸 S-2°-E

規模 東西5.7m。深さ0.15m。床面 ほぼ良好。炉北西部分、西南部分で土壤に切られている。

周溝 全周すると思われる。ピット 8箇所検出されたが、主柱穴は炉裏のピットを含めて5

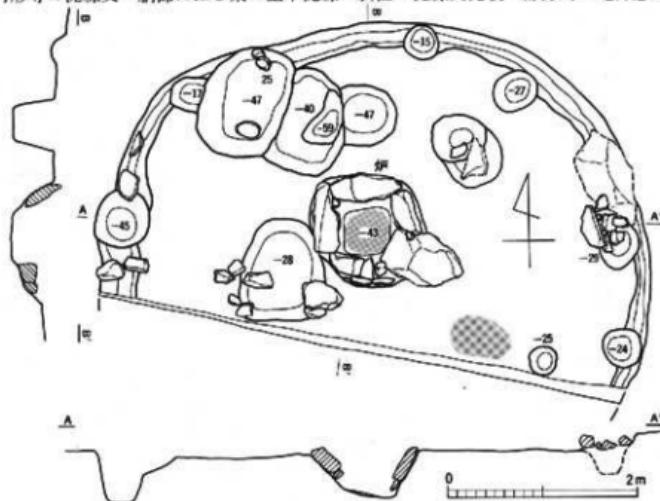
本か7本であろう。炉 おそらく中央やや北寄りに位置すると思われる。埋没した巨石の一部

を利用して4枚の安山岩と小さな礫数個を用いて、1.2m×1m×0.5mの掘炬燵状の大型方形石

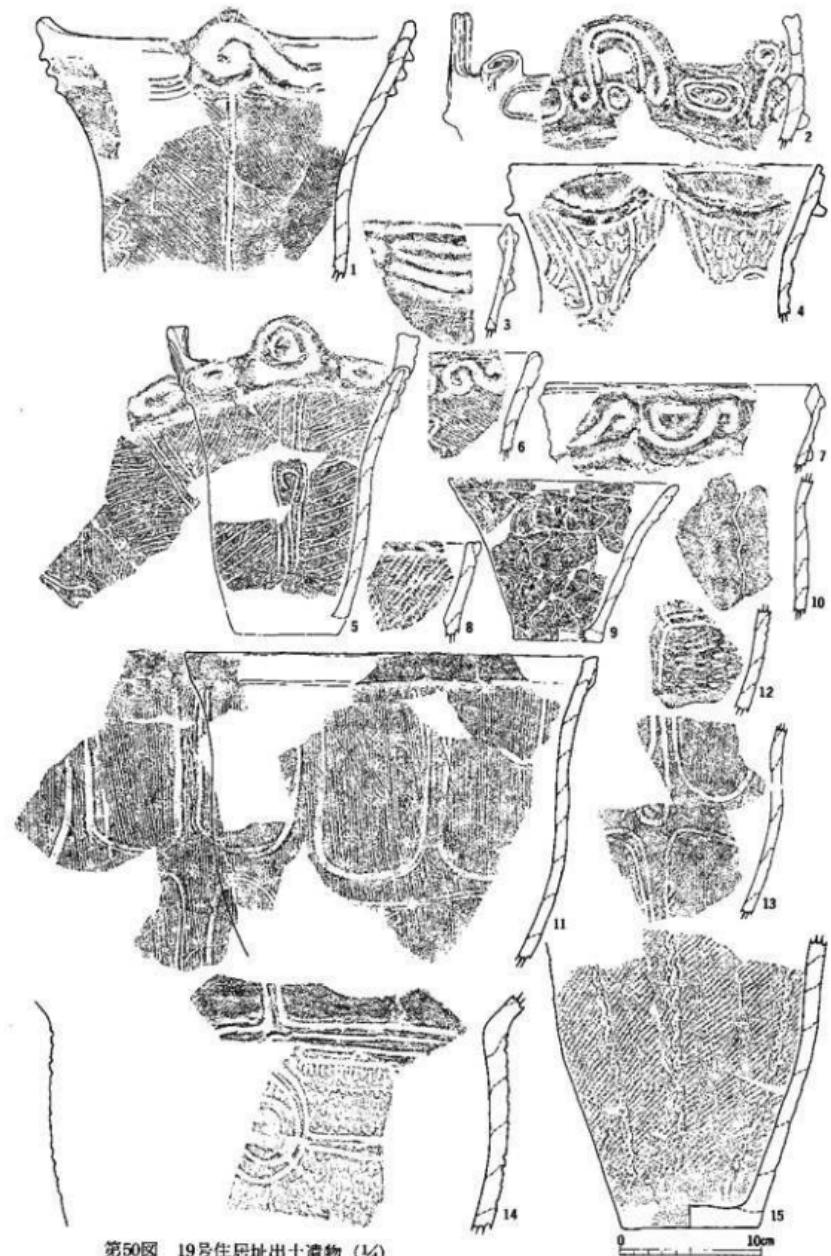
窓いが完存しており、炉底には焼土が薄く堆積していた。埋甕 不明。遺物出土状況 床面

から約10cmほど浮いてやや多くの遺物が検出された。

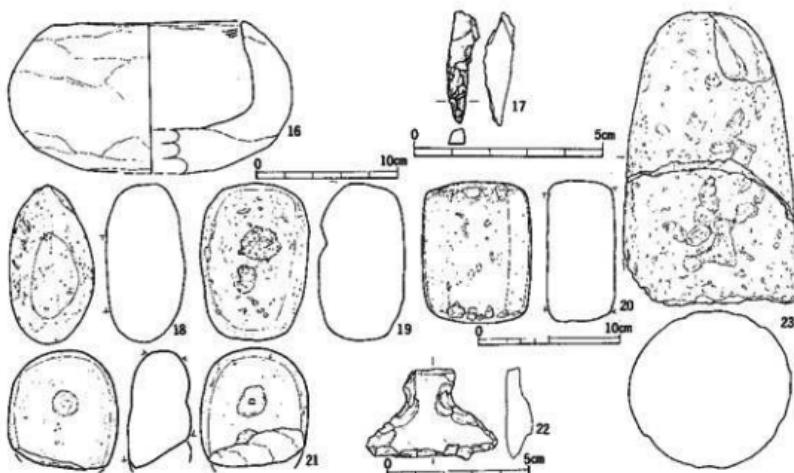
遺物 (第50図) 1 推定口径26cmの4単位と思われる波状口縁をもつ深鉢形土器。施文順序は、口縁部に隆線による渦巻つなぎ文→2~5単位の斜位の櫛齒状沈線文→渦巻下に1条の垂下沈線、その沈線間に蛇行懸垂沈線文。胎土には角閃石が多い。2 推定口径24.5cmの、逆U字状把手をもつ深鉢形土器。胎土には角閃石が多い。3 口縁部には沈線による渦巻つなぎ文、胴部には縦位の櫛齒状沈線文が施文され、胎土には雲母、長石、角閃石、石英を多く含む。4 推定口径22cm。施文順序は、口縁部に連弧状隆線貼付→弧状区画内上端に1条の横位沈線→弧状区画内に縦位沈線充填→胴部に棒状工具による渦巻→列点文充填。胎土には角閃石がやや多い。5 推定口径17cm。4単位と思われる把手をもつ小型深鉢形土器。施文順序は口縁部に隆線+梢円形等の沈線文→胴部には3条の垂下沈線→斜位の沈線文充填→部分的に蛇行懸垂沈線



第49図 19号住居址 (1/6) L = 890.16m



第50図 19号住居址出土遺物 (1/4)



第51図 19号住居址出土遺物
(16-22は1%, 17は3%, 18-21-23は34%,
24-26は1%)

文施文。角閃石をやや多く含む。

7 3とほぼ同じ文様構成を示す。

雲母、長石、石英をやや多く含む

ほか、泥岩もみられる。8 縦位の縄文R L→[2条の垂下沈線、口縁部に1条の隆線貼付]。9

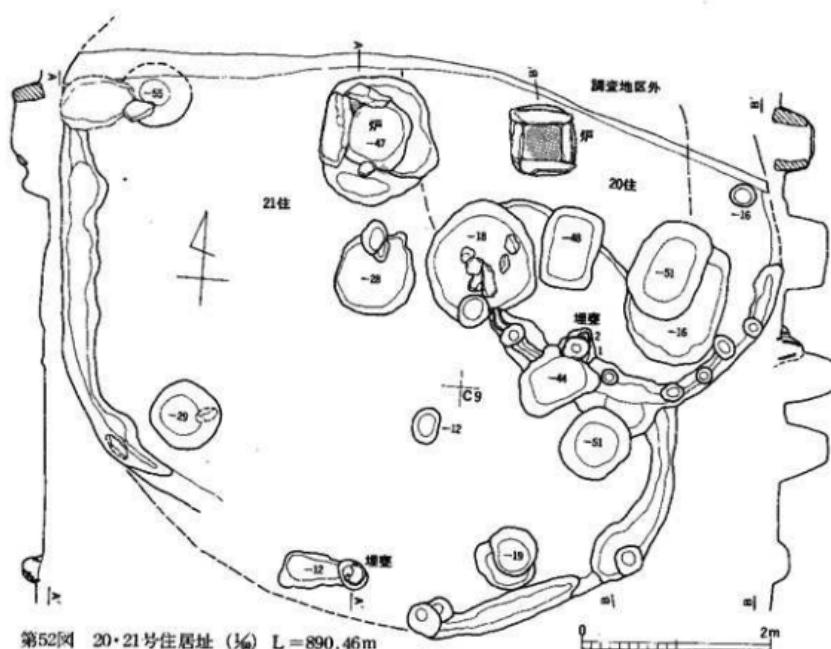
推定口径16cm、底径6.5cm、高さ11cm、文様は、蛇行懸垂沈線文→山縁部に1条の横位沈線文。

10 無文地+蛇行懸垂沈線文。11 推定口径29cmの深鉢形土器。口縁部に隆帶一側部に5本単位の櫛歯状沈線文→2段の連弧状沈線文。13 雲母、長石、石英を多く含む。14 石英、長石、角閃石を多く含む。15 R Lの縄文上に結節を縦位に施文する。16 推定口径6.5cmのミニチュア土器。22 本遺跡から1点だけ出土した石匙。刃部4.6cm、重さ11.9gのチャート製である。21 花崗岩製の磨石。23 無頭石棒。接合資料であり、先端部片は21号住居址覆土中から出土した。

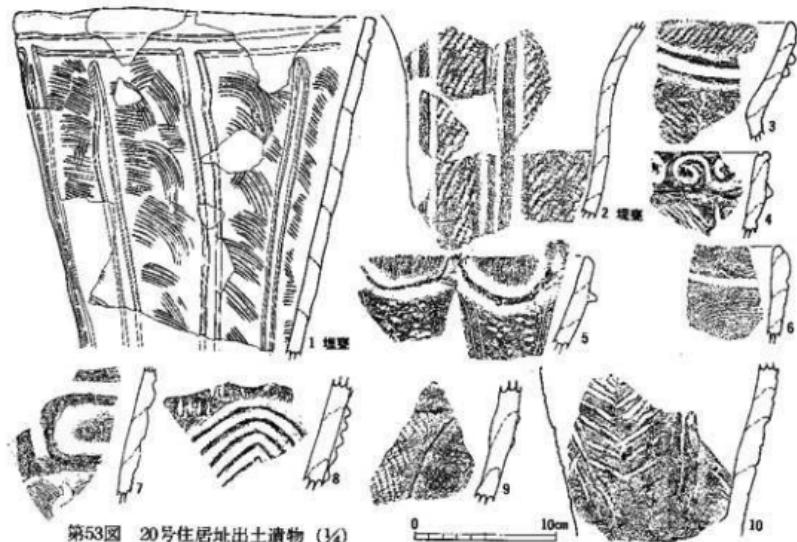
時期 曽利Ⅲ式期。

20号住居址

遺構（第52図、図版7）位置 B 9 形態 円形の堅穴住居址。経過 炉と埋甕から住居址と判断。北側は調査地区外、西側は21号住居址と重複するため、全体を明らかにすることはできなかった。覆土 ローム粒子を多く含んだ黄褐色土層。主軸 S-4°-E 規模 東西は4mほどと思われる。床面 残存した床面は炉周辺だけで、ほかは住居址、土壙の重複によってはっきりしない。周溝 南側に存在するが全局ではない。ピット 周溝中や壁下と思われる位置に小ピットがみられるが、柱穴にふさわしい掘り込みではない。土壙との重複で検出できなかつたと思われる。炉 埋甕から1.6m北に4枚の安山岩を用いた0.7m×0.65m×0.45mの掘削爐



第52図 20・21号住居址 (3/6) L = 890.46m



第53図 20号住居址出土遺物 (3/6)

状の方形石囲いが完存した。炉底には焼土の堆積がみられた。**埋甕** 28号土壇上層に埋設されているが、土器の残存状況から、新旧関係は28号土壇→20号住居址と思われる。埋甕は2個体あり、口縁部と胴下半を欠損した正位の加曾利E III式上器を、胴下半を欠損した正位の曾利V式土器が切っていた。**遺物出土状況** 少量の遺物が散在していた。

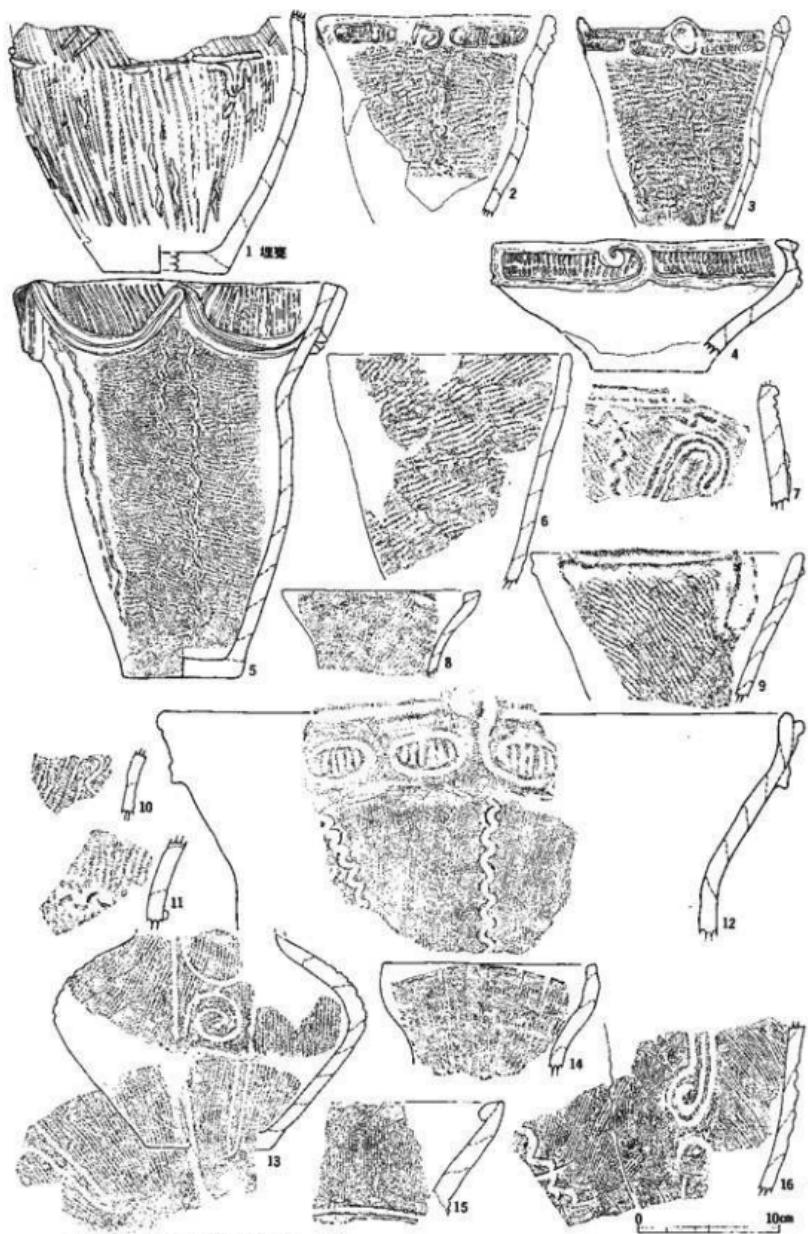
遺物 (第53図、図版10) 1 埋甕(新)。口径25cm、残存高24cm。沈線による縦区画後、10本単位の横齒状沈線を充填する。胎土には角閃石がやや多く含まれる。2 埋甕(IH)。3条の垂下沈線による縦区画内に縄文RLを施文する。3 口縁部には縄文LRを施文した後、2本の粘土紐を連弧状に貼付する。胴部には縄文LR→結節縄文。5 口縁部には連弧状隆線→弧内に縦位沈線文→胴部に4条の底下沈線→区画内に荒い縄文RL。6 胎土には多量の雲母、長石を含む。7 加曾利E IV式の微隆起線文土器。区画内にはRLの縄文を施文する。

時期 曾利V式期。

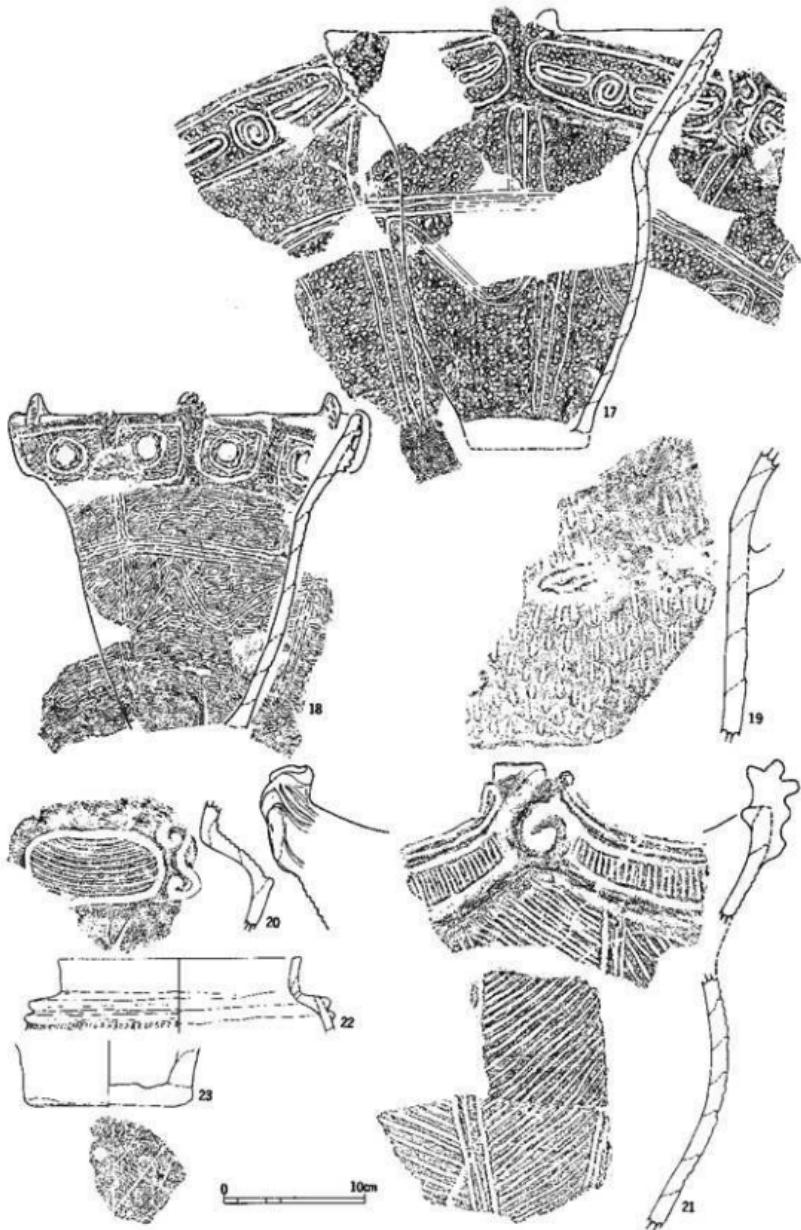
21号住居址

遺構 (第52図、図版7) 位置 B・C 8・9 形態 楕円形プランの堅穴住居址。経過 炉と埋甕から住居址と判断し周溝を追ってプランを確認したが、北側は調査区城外、東側は20号住居址、土壇が重複し、全体を明らかにすることはできなかった。**覆土** 黄褐色土層。主軸 S-1°--E **規模** 東西6.5m、南北6m以上。**床面** 埋焼西付近が攪乱を受け、はっきりしないほかはほぼ良好。**周溝** 埋甕付近以外はほぼ全周する。**ピット** 上柱穴は4本かと思われる。炉 20号住居址によって南東側の炉石が撤去され、北西部分のみの炉石が残存する掘炬燧状の大型方形石囲い炉が、中央やや北寄りに検出された。掘り方から推定すれば、1.1m×1m×0.4mであろう。炉内には完形の上器が原形のまま炉底に横たわっていたほか、上層には数個体分の土器が包含されていた。また炉底に焼土が薄く堆積していた。**埋甕** 口縁部を欠く正位の埋甕が炉の南3.7mの位置に埋設されていた。**遺物出土状況** 残りの遺物は炉内及び炉周辺、炉と埋甕の中間の2箇所にまとまっていた。炉周辺のものはほぼ床面直上、中間のものは床から10~15cmほど浮いていた。

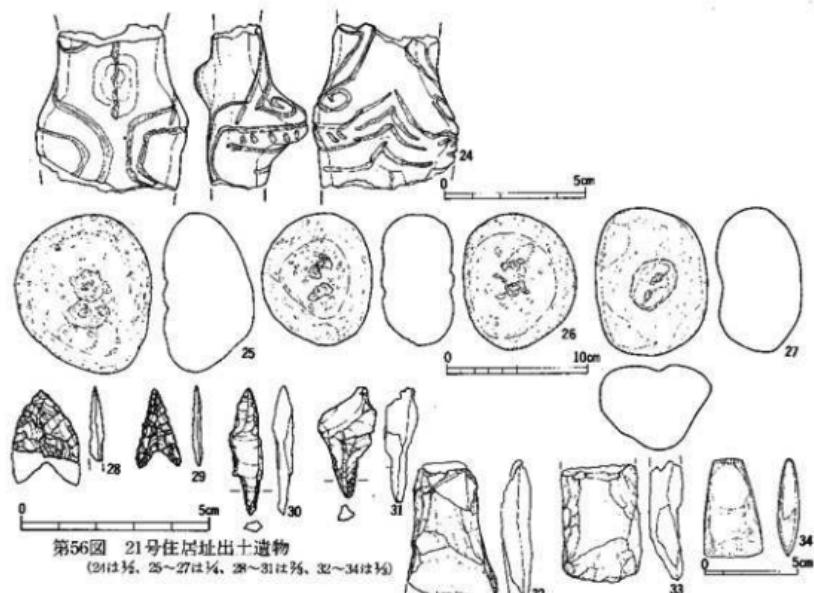
遺物 (第54~56図、図版10) 1 埋甕。残存口径21cm、底径8.5cm、高さ18cm。施文順序は、頸部に斜位の半截竹管文→胴部に縦位の沈線文→粘土紐貼付。胎土には多量の長石、雲母のほか、石英、泥岩がみられる。2 口径16cm。施文順序は口縁部に6単位の沈線による渦巻文、楕円形区画→区画内に2段の列点文→胴部に縄文LR→口縁部の溝文下から結節縄文の垂下。胎土には角閃石を多く含む。3 口径14.5cmの4単位の把手をもつ深鉢形土器。本資料は前記の資料2と施文順序、施文工具(棒状工具、縄文原体)、胎土が同一に近く、同時に製作された可能性が窺われる例であり興味深い。出土地点は炉の上層で、両土器は40cmの近距離で検出された。4~5の上部に重なって検出された口径21cmの浅鉢形土器。隆線による4単位の渦巻つなぎ文の区画内に2段の刺突文が施文される。胎土には多量の長石のほか石英がみられる。5 炉中出土の完形土器。口径23cm、底径8cm、高さ28cm、重量は2279g。文様は口縁部



第54図 21号住居址出土遺物 (3/4)



第55図 21号住居址出土遺物 (34)



に 6 単位の連弧状隆線文→弧内に沈線充填→胴部に縄文 L R→弧端部から垂下する 2 条の結節縄文。土器外面には底部から 12cm 以上の部分にスヌ状、内面の口縁から 14cm 以下にはオコゲ状の炭化物が付着する。胎土には角閃石が多い。6 推定口径 17cm の深鉢形土器で、L R の縄文が全面に施される。炉の上層出土。胎土には長石、角閃石をやや多く含む。7 炉内出土。地文は縄文 R L。胎土には長石、角閃石がやや多い。8 推定口径 14cm。縄文は R L。胎土には角閃石が多い。9 多縄文 L R + 隆線文。角閃石、長石が多い。11 縄文は R L。12 推定口径 44cm の大型深鉢形土器。胴部は 10 本単位の櫛齒状沈線文→蛇行沈線文。胎土には雲母、長石が多い。13 壺形(有孔鉗付の可能性あり)土器。6 本単位の櫛齒状沈線文→4 単位の沈線文。胎土には多量の長石のほか角閃石、安山岩片がみられる。14 推定口径 15cm の深鉢形土器。3 ~ 5 本単位の櫛齒状沈線文が垂下する。角閃石、長石をやや多く含む。15 櫛齒状沈線文→沈線文。16 蛇行、渦巻等の沈線文→8 本単位の櫛齒状沈線文。17 口径 28cm の列点文タイプの深鉢形土器。11 線部には 4 単位の突起をもち、梢円×縁内に渦巻文等を描いた後、刺突文を充填する。胴部も沈線文→刺突文である。胎土には角閃石をやや多く含む。18 17 と同タイプの土器で口径 24.5cm を測る。口縁部には 6 単位の突起をもち、沈線による区画内に 2 重円を描き、内側内を削り取る。空間部には長さ 5mm 程度の横位の列点文で充填する。胴部も同様。胎土には角閃石、長石がやや多い。炉周辺で出土。19 X 字状把手をもつ大型深鉢形土器。20 鉢形土器。角閃石を多く含む。21 推定口径 35cm の大型深鉢形土器。口縁部には 4 単位の突起を

もち、隆線による満巻つなぎ文→縦位沈線施文。胴部には羽状沈線文→3条の垂下沈線文。胎土には多量の長石、雲母のほか石英も多い。**22** 推定口径17cmの有孔鍔付土器。口縁部内外面には赤色塗彩が施される。胎上には長石、雲母がやや多い。**24** 土偶腰部。炉内上層出土。破損面に棒状圧痕、接合面は確認できない。胎土には長石、角閃石を多く含む。

時期 曽利II式期。

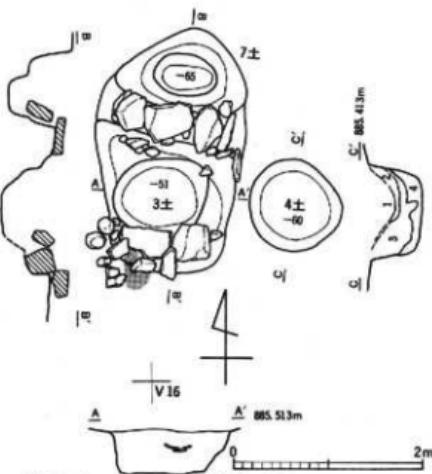
2 土壙とその遺物

本項では確実な土壤のみを土壤番号順に説明する。

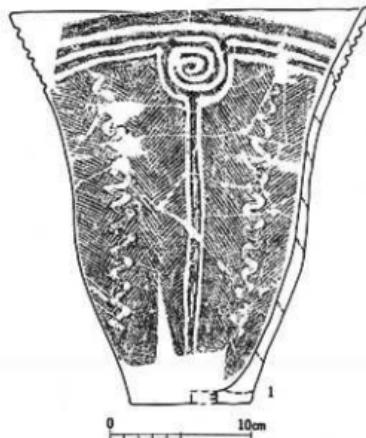
3号土壤

遺構（第57図、図版8）位置 U15-16 形態・規模 1.3m×1.3m×0.5mの不定形。底面は平坦。南北両脇に安山岩礫が並んだ配石をもつ。礫は大半が焼成を受けていたほか、礫と同レベルに焼土ブロックがみられた。覆土 炭化物、ロームブロックを多く含んだ暗黄褐色土層。確認面～25cmぐらいの深さにかけて深鉢形土器2個体のほか多くの小破片が出土した。地山はローム。

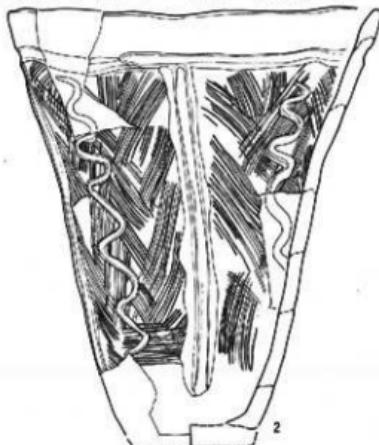
遺物（第58図、図版10）1 推定口径25.5cm、底径8.5cm、高さ28cmの曾利IV式深鉢形土器。



第57図 3・4・7号土壤 (3)



第58図 3号土壤出土土器 (3)



6 単位の沈線による縦区画→7 単位の櫛歯状沈線による矢羽根状文→蛇行懸垂沈線文。胎土にはやや多くの長石、角閃石を含む。確認面出土。2-1よりも約25cm下で出土。口径26.5cmを測る曾利IV式深鉢形土器。垂下隆線と沈線によって5単位に区画し、各区画に8本単位の櫛歯状沈線文→蛇行懸垂沈線文を施文する。胎土には多量の長石、角閃石のほか石英を含む。

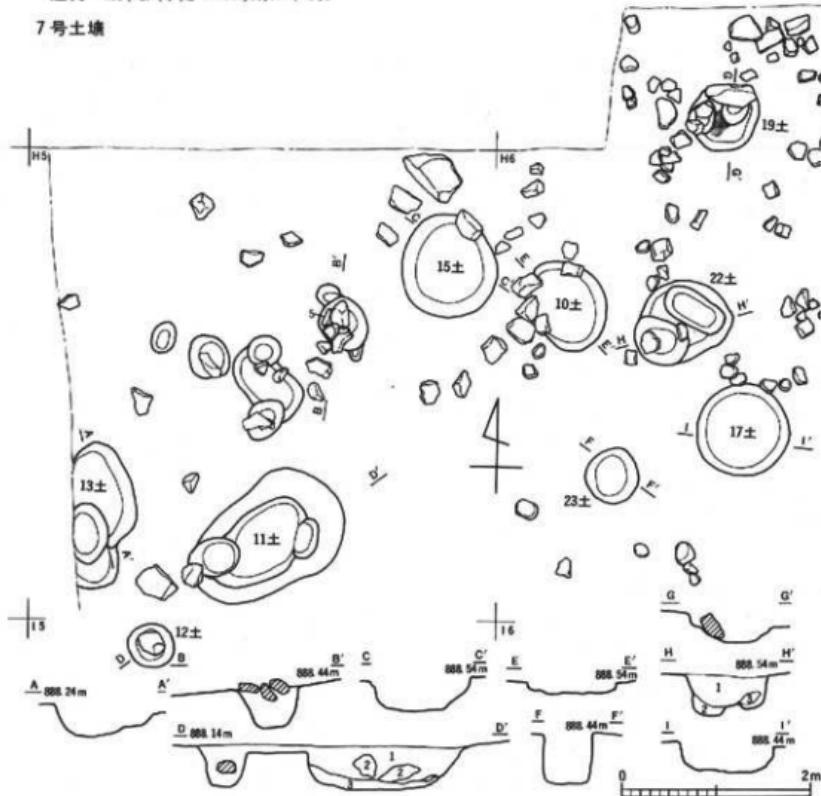
時期 曾利IV式期。

4号土壙

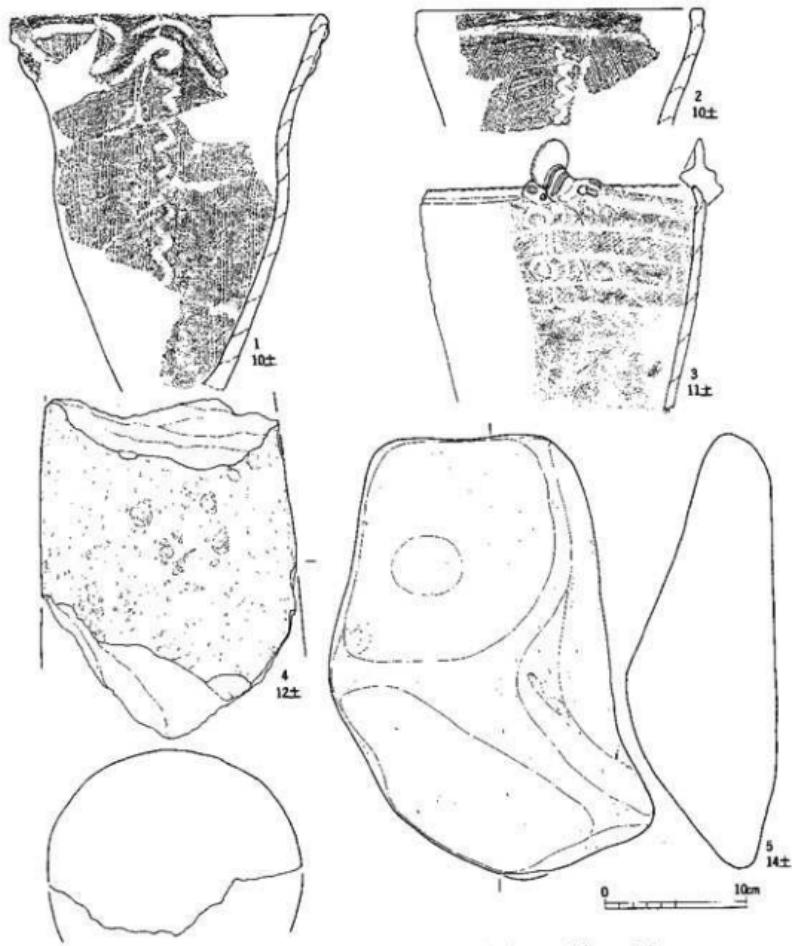
遺構（第57図）位置 U16 形態・規模 1.0m×0.9m×0.6mの円形プラン。覆土 1・3層
一焼土、ロームブロックを多く含んだ茶褐色土層。2層—ロームブロックを主体とし、炭化物、
焼土ブロックもみられる黄褐色土層。4層—焼土ブロックを多く含み非常に堅い暗茶褐色土層。

遺物 全くなく、従って時期は不明。

7号土壙



第59図 H5・H6付近土壙群 (36)



第60図 H5・H6付近上塙群出土土器・石棒・不定形扁平石・石錐 (1~5は1/4、6は2%)

遺構 (第57図、図版8) 位置 U16 形態・規模 1.4m×0.8m

$\times 0.65\text{m}$ 。壁に段をもつ指円形プラン。3号土壙との間には安山岩

礫が並び、その一部が入りこんでいる。覆土 3号土壙と同じ。

遺物 小片4片のみで時期は不明だが、3号土壙とほぼ同時期の所産であろう。

10号土壙

遺構 位置 H6 形態・規模 0.9m×0.8m×0.1mのほぼ円形プラン。覆土 暗黄褐色土層。曾利III式深鉢形土器のほか、多くの上器片が出土した。

遺物（第60図）1 口径22cmの曾利Ⅲ式深鉢形土器。口縁部に隆線による溝巻つなぎ文を施し、区画内と胴部に8本単位の縦位の櫛齒状沈線文→溝巻下に蛇行懸垂沈線文。胎土には極めて多量の輝石安山岩片と角閃石を含む。2 推定口径20cm。7本単位の櫛齒状沈線文→蛇行懸垂沈線文。長石を多く含む。

時期 曽利Ⅲ式期。

11号土壙

遺構 位置 H 5 形態・規模 $1.9m \times 1m \times 0.45m$ の梢円形プラン。覆土 1層一茶褐色土層。多くの遺物を包含する。2層一ロームブロック。3層—1と2の混合した暗黄褐色土。地山はローム。

遺物（第60図）3 耳状把手をもつ推定口径19cmの深鉢形土器。口唇部には刻み目、胴部には「の」の字文とL Rの縄文帯を2本施す。胎土には多量の雲母、長石のほか石英、角閃石を含む。

時期 加曾利B 1式期。

12号土壙

遺構（第59図）位置 H 5 形態・規模 $0.5m \times 0.5m \times 0.45m$ の円形プラン。覆土 茶褐色土中に石棒片が1点含まれる。

遺物（第60図）4 直径18cmの安山岩製石棒片。ほかには加曾利B 1式土器を含む少量の土器片が出土したが、時期を確定するものはない。

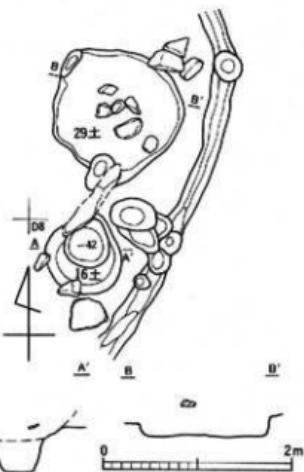
13号土壙

遺構（第59図）位置 H 5 形態・規模 $1.1m \times (0.7m) \times 0.4m$ の梢円形プラン。覆土 ロームブロックを含んだ茶褐色土層。

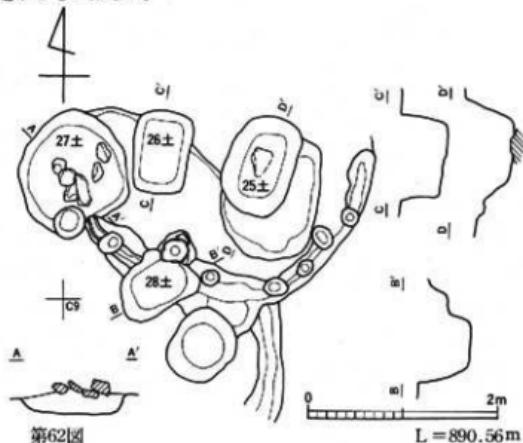
遺物 大型の無文土器片を含む加曾利B 2以降の土器片が少量みられたが、時期は確定できない。

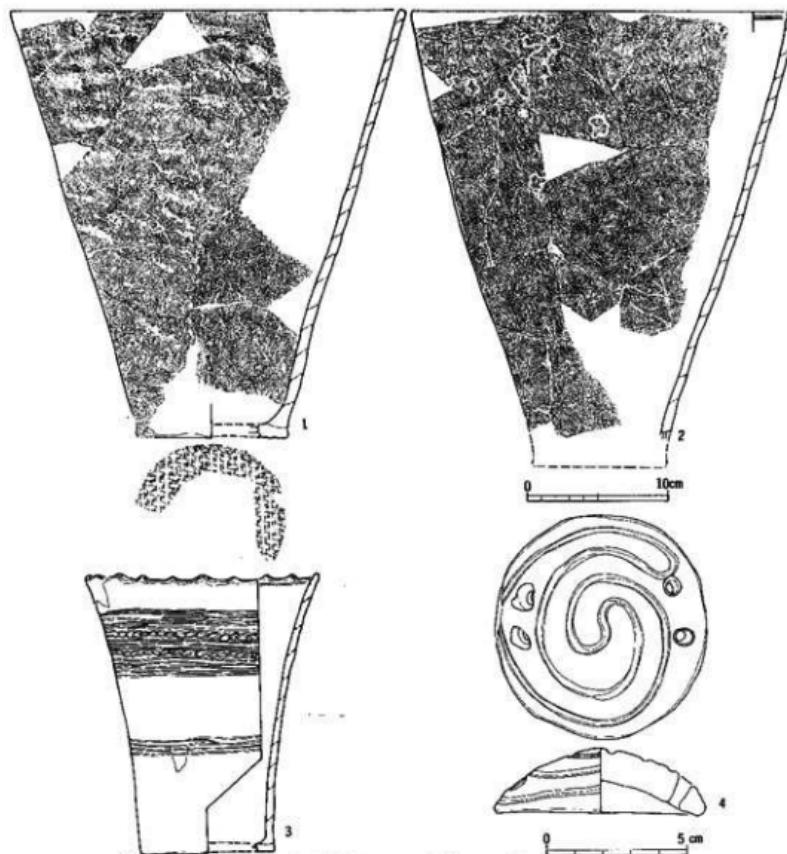
14号土壙

遺構（第59図）位置 H



第61図 16・29号土壙 (1/6) L = 890.56m





第63図 16号土壤出土土器 (1～3は3/4、4は3/2)

5 形態・規模 0.6m×0.5m×0.4mの円形プラン。上層に安山岩礫5個による集石がある。

覆土 黄褐色土層。

遺物 (第60図) 5 長径31cmの安山岩製不定形扁平石。表面は非常に磨かれていて。ほかに4片の無文土器があるが、時期は不明。

15号土壙

遺構 (第59図) 位置 II 5 形態・規模 1.1m×1.0m×0.35mの円形プラン。覆土暗黄褐色土層。

遺物 なし。時期不明。

16号土壙

遺構 (第61図) 位置 D8。16号住居址のピット上層に検出された。形態・規模 0.9m×0.8

m × 0.15m の円形プラン。覆土 暗黄褐色土層。遺物量は豊富である。

遺物（第63図）1 推定口径23cm、底径10.5cm、高さ30cmの深鉢形土器。胎土には長石、角閃石をやや多く含むほか、石英、泥岩もみられる。2 推定口径27cmの深鉢形土器。1と重なって出土した。口縁部内面には1条の沈線をもつ。外面には厚く炭化物が付着する。胎土には長石、角閃石をやや多く含む。3 口径16.5cm、底径9.5cm、高さ19.5cmの深鉢形土器。口縁部は小波状+刺突文、胸部は沈線文、口縁部内面に1条の沈線が施文され、内外面ともによく磨かれている。胎土には砂岩、チャート等の岩片のほか、雲母、角閃石、石英、長石がみられる。

4 口径14.5cmの壺。直径0.8cmの孔が2個

1組で対をなす。長石を多量に含む。

時期 堀之内2式期。

17号土壙

遺構（第59図）位置 H 6 形態・規模

1.0m × 1.0m × 0.3m の円形プラン。覆土 暗黄褐色土層。

遺物 なし。時期不明。

19号土壙

遺構（第59図）位置 G 6 形態・規模

0.7m × 0.7m × 0.3m の円形プランで、底面に焼土、北側に60cm大の礫がみられ、炉址に近い形態であるが、緩い傾斜面に位置し周囲に硬い面はみられなかった。

遺物 なし。時期不明。

22号土壙

遺構（第59図）位置 H 6 形態・規模

1.0m × 0.8m × 0.4m の不定形プラン。覆土
1層—暗黄褐色土層。2層—ローム粒子が多い
黄褐色土層。3層—ローム。

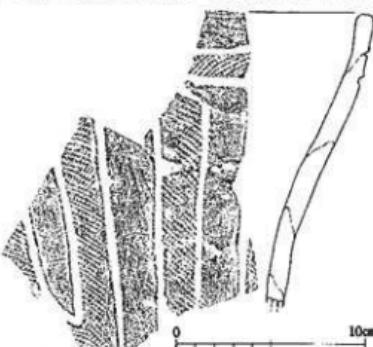
遺物 堀之内2式土器片を含む少量の土器
片が出土したが、時期は不明。

23号土壙

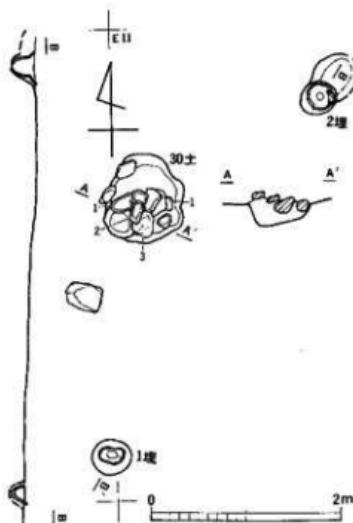
遺構（第59図）位置 H 6 形態・規模

0.6m × 0.55m × 0.55m の円形プラン。覆土
暗黄褐色土層。

遺物（第60図）6 覆土中出土の石錐。ほ



第64図 27号土壙出土土器(1/4)



E11付近 1・2号単独埋甕。
30号土壙 (1/4) L = 890.36m

かではなく時期不明。

25号土壙

遺構 (第62図) 位置 B 9 形態・規模 5.5m×3.5m×0.25mの梢円形プラン。覆土 茶褐色土層。

遺物 中期末の少量の土器片が出土したが、土壙の時期を決定するものはない。

26号土壙

遺構 (第62図) 位置 B 9 形態・規模 0.9m×0.6m×0.5mの隅丸方形プラン。覆土 茶褐色土層。

遺物 後期初頭の土器片を含むが、時期は不明。

27号土壙

遺構 (第62図) 位置 B 8・9 形態・規模 1.3m×1.2m×0.2mの円形プラン。確認面に6個の礫による集石をもつ。覆土 茶褐色土層。

遺物 (第64図) 沈線文→縄文L.R. 称名寺式土器。長石、石英を含む。

時期 称名寺式期。

28号土壙

遺構 (第62図) 位置 B・C 9 形態・規模 0.8m×0.6m×0.55mの隅丸方形プラン。覆土 茶褐色土層。

遺物 曾利II～III式土器片を3片含む。

時期 20分住の埋甕から、28号土壙の方が古い。従って曾利V式以前である。

29号土壙

遺構 (第61図) 位置 C 8 形態・規模 確認面に6個の礫による集石をもつ1.3m×1.3m×0.2mの円形プラン。覆土 茶褐色土層。

遺物 曾利II式の土器片が数片検出されたが、時期を確定するほどのものではない。

30号土壙

遺構 (第65図) 位置 E 11 形態・規模 0.9m×0.8m×0.3mの円形プラン。上層に石皿片、多孔石、石棒を含む集石がみられる。

遺物 (第66図) 1 55cm×16cmの閃綠岩製無頭石棒。焼成を受けて全体的に赤変し脆くなっている。集石中では2つに折れて検出された。2 石皿片。3 多孔石。1面のみに孔がみられる。その他に堀之内式土器片を少量含むが時期決定は難しい。

3 単独埋甕

1号単独埋甕

遺構 (第65図) 位置 E 10・11 形態 脇部上半を欠損する深鉢形土器が正位に埋設されていた。覆土 黒褐色土層。

遺物 5 現存径26cm、底径8cm、残存高16cm。胴部外面には左上→右下へのナデによる調整痕がみられる。胎土には極めて多量の石英、長石、安山岩片を含む。後期の粗製土器。

2号単独埋蔵

遺構 (第65図) 位置 E11 形態 口縁の一部と底部を打ち欠く深鉢形土器が正位に埋設されていた。覆土 黄褐色土層。

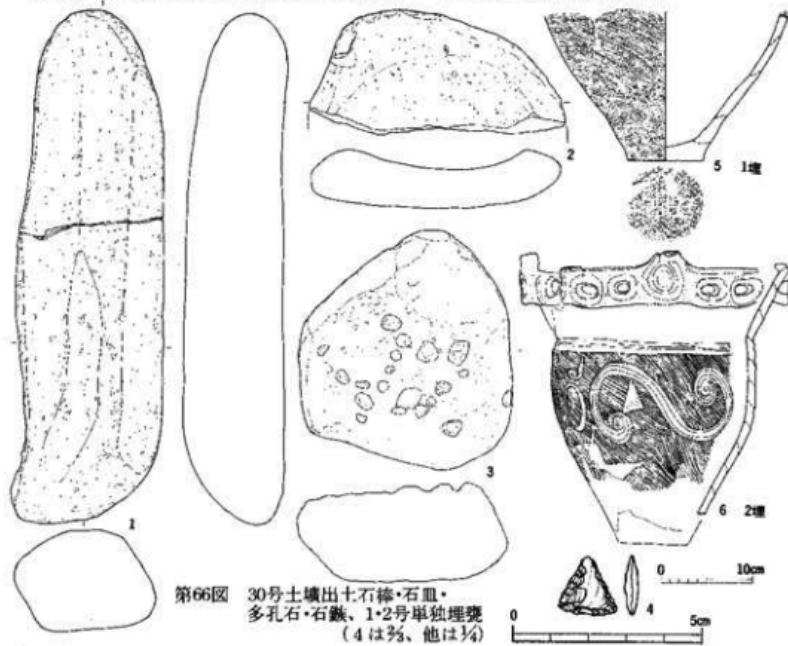
遺物 6 口径29.5cm、残存高30cmの骨利II式深鉢形土器。口縁部には4単位の突起をもち、突起間には3個の楕円連続文を施す。胴部は、沈線によって3単位の横S字状文、満巻文、蛇行沈線文を施した後、右下りの斜行沈線文を半截竹管によって充填している。胎土には、多量の長石、角閃石を含む。

4 集 石

本項では規模が明確で土壤を伴わない集石のみを扱う。

1号集石

遺構(第67図、図版8) 位置L13.15号住居址の入口部敷石東側。形態・規模 0.8m×0.4m。石皿片、多孔石を含む安山岩礫13個を用いる。礫を組んだような形跡はないが、ほぼ長方形に並んでいた。集石は黒褐色土中に検出され、地山のローム面に掘り込みはなかった。

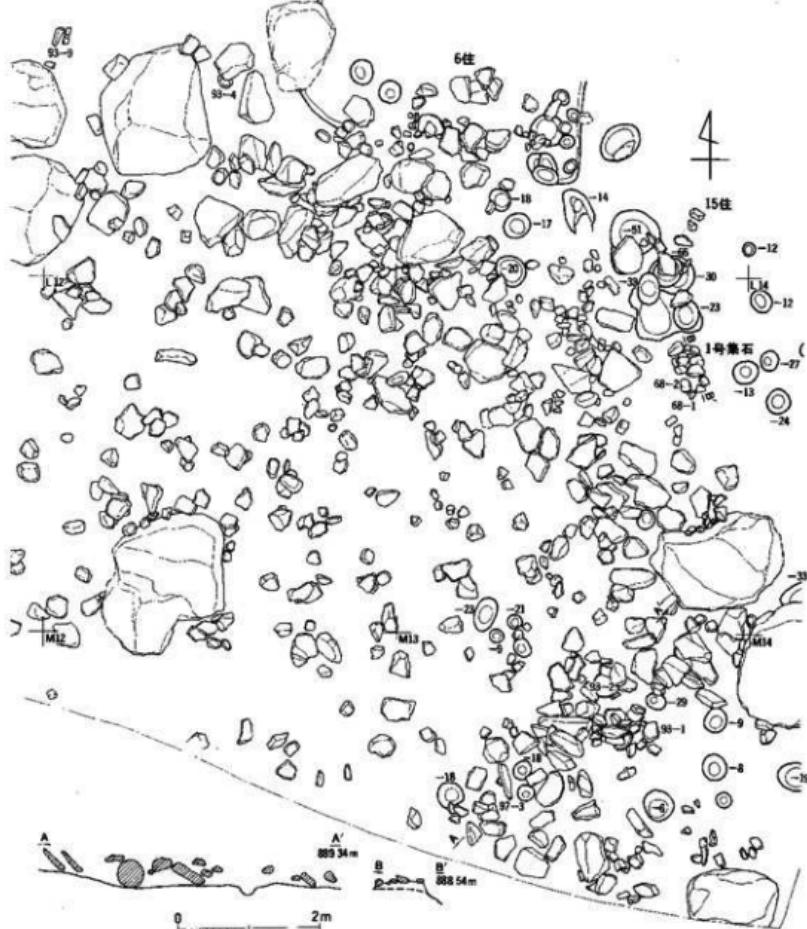


遺物（第68図）1 石皿。約 $\frac{1}{4}$ の破片。2 多孔石。多孔面は3面。土器片はない。

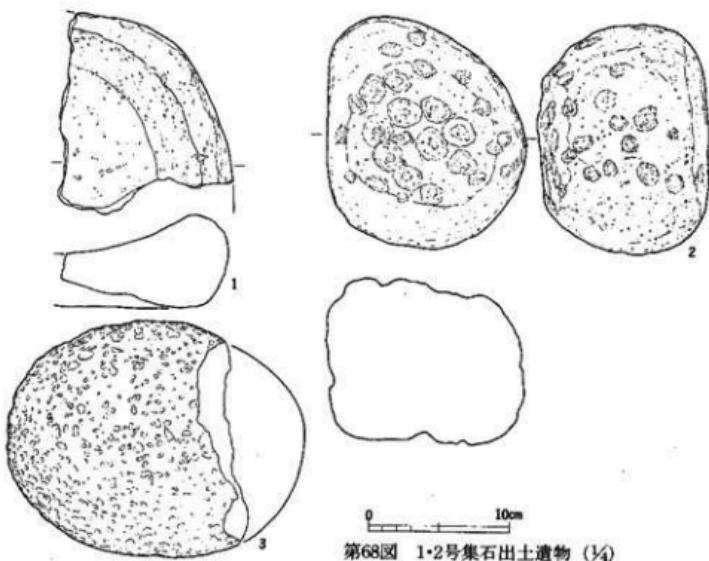
2号集石

遺構(第69図、図版8)位置 L8 形態・規模 1.5m×2.5m以上の長方形プラン。南側は調査区外のため、全容は明らかではない。60個以上の安山岩礫によって、中央部がやや座む長方形面を構築し、北端部に長径約40cmの安山岩の角礫による立石をもつ。また東端には丸石が検出された。検出面は黒褐色土中であり、ローム中への掘り込みは認められなかった。

遺物（第68図）3 丸石。多孔質安山岩製で、ややつぶれた球状を呈す。ほかに無文の後期



第67図 K12~M13付近配石、1号集石(16)



第68図 1・2号集石出土遺物 (1/4)

土器片が出土したが時期ははっきりしない。

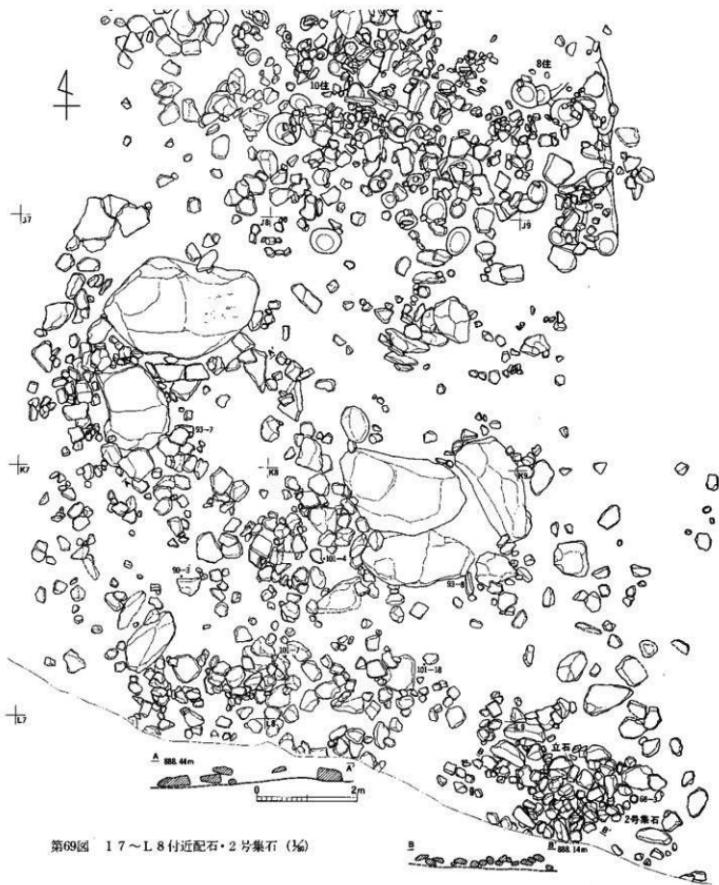
5 配 石

遺構（第67・69図）東西方向の4～14グリッドからはほぼ全面に安山岩礫が検出された。そのうち南北方向B～Eグリッド中の礫は耕作等によって擾乱されたものが多く、人為的な集石、配石等を認めるることはできなかった。H5～L13の礫は遺存状況が良好で、礫群中に前記の集石を含んだ多量の礫の広がりが検出された。このうちI7～L8と、K12～M13の2箇所にはより濃密な礫の分布があり、丸石、石棒等の遺物を多く含んでいた。ただしこの両者は2箇の配石として扱うほど明確に分離したものではなく、不連続的につながるひとつの大型配石と考えるのがふさわしく思われる。即ちJ・K7～L・M13にかけての長径約40mの配石で、L10付近を中心に半径約20mの環、或いは高根町石塙遺跡例のように方形をなす可能性がある。この付近にもともと地山面に、人力では到底動かし難い長径2～3mの巨石が数多く埋没、露出しており、わざわざこの地を選んで配石を構築した可能性が強い。配石中の礫の状況を丹念にみていくと、巨石に接して礫を配した部分や、明らかに配石中に巨石を組み込んだ構造のものが多く、人工遺物が巨石の脇から、或いは巨石下、巨石間から出土した例も少くない。出土遺物にいわゆる祭祀遺物が多いことから、巨石を伴う祭式を想定したい。

またこの配石中には、見方によれば小規模の環状配石とも思われる箇所がK8杭を中心に1箇所検出された。これは径3mの円周上に安山岩礫、鉄平石を無雜作に並べ、部分的に積み上

げたもので、環内の巨石墓に石碑1本（第93図7）が埋め込まれた。またM13では葬葬中に巨大な丸石（直径41~35cm、第93図2）を中心とした一つの集石状遺構がみられた。付近には石碑（第93図3）、不定形扁平石（第93図1）があり、祭祀遺構としての条件を満たしている。

遺物 丸石、石棒、不定形扁平石、土偶、ミニチュア土器等の非实用品のほか、多孔石、磨石、同石、石皿等の石器、土器片が出土した。土器は1個体にまとまるものは全くない。遺構外遺物と一括して第IV章で説明する。時期的には加曾利B式期のものが多く、この配石の構築時期を示している。



第69图 1.7~1.8附近配石·2岁磨石(%)

VI 其の他の遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器

第1群土器（中期後葉の土器）

第1類土器（曾利式土器）（1～23、28～32、34～36） 2 縄文RL→竹管文をもつ隆線。
3 縄文RL→隆線。4 縄文RL→蛇行沈線。5 縄文L→隆線文。8 縄文RL→隆線。
10 縄文L→竹管文。11 縄文RL。12 縄文LR→竹管文。16 縄文RL。17 縄文RL。
19 口径26cm。口縁部の環状把手は4単位。胴部は沈線による区画（8単位）→沈線充填。21
推定口径32cm。22 口径21cm、残存高23cm。6本単位の隆線文→沈線による区画→刺突文。28
11径21.5cm、底径9cm、高さ25cm。隆線による6単位の区画→沈線充填→蛇行沈線。29 蛇行
沈線→沈線充填。30 推定口径24cm。竹管文による連続への字文。32 沈線充填→蛇行沈線。
34 沈線→蛇行沈線。35 推定口径22cm。隆線による区画→沈線充填→蛇行沈線。36 口径
12.5～18cm、底径6.5cm、高さ6.5cmの釣手土器。

第2類土器（加曾利E式土器・唐草文土器）（24～27、33）24 推定口径16cm。縄文RL。
胎土には花崗岩、泥岩、砂岩、長石、雲母、石英を多量に含む。25 推定口径11cmの唐草文土
器。隆線→交互刺突文→沈線。胎土には泥岩、長石とともに片岩を含むことから、搬入品の可
能性が高い。26 胎土には多量の雲母のほか、石英、長石を含む。

第2群土器（後期前葉の土器）

第1類土器（沈線間に縄文充填）（37～43）37 沈線→縄文L。38 縄文LR。39 縄文R
L。40 縄文LR。41 縄文L。42 縄文RL。43 縄文LR。

第2類土器（沈線文のみ）44 推定口径32cm、残存高49cm。多量の輝石を含む。

第3類土器（竹管文による平行線）45 口唇部に刻み目、内面には3条の横位沈線。第3群
上器に含めた方がよいかもしれない。

第3群土器（後期中葉の土器）

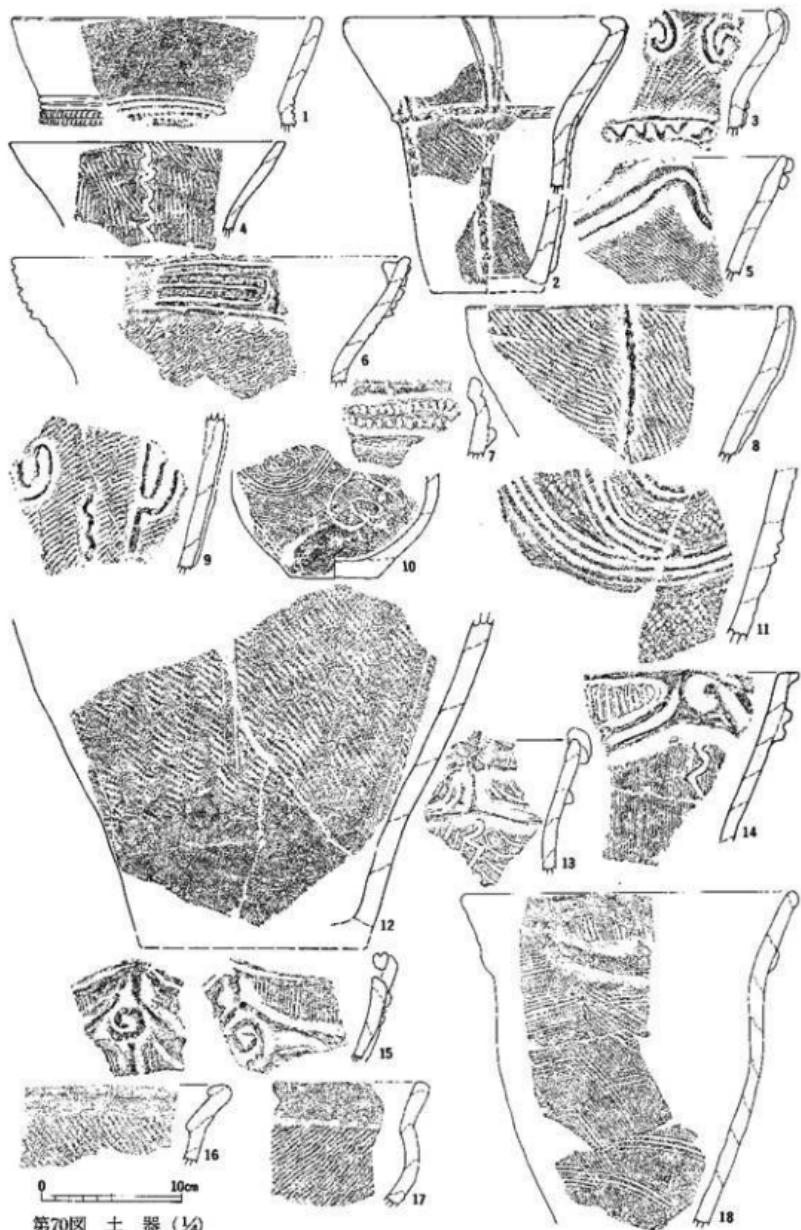
第1類土器（内外面に数条の沈線文をもつ深鉢形土器）（46～61）

a種（口唇部、肩部に刻み目をもつ）（46～49）46 縄文LR。内面に炭化物が厚く付着す
る。47 口唇部は小波状に近い。縄文LR。雲母がやや多い。48 縄文LR。49 口唇部は小
波状。外面沈線間は無文。内面に連続刺突。

b種（口唇部に刻み目をもつ）（50～58）50 内面に連続刺突。雲母をやや多く含む。51
縄文LR。52 縄文L。53 縄文LR。内面の沈線間に刻み目。口唇部内側に連続刺突。54
縄文LR。56 縄文L。57 縄文LR。角閃石がやや多い。58 縄文L。

c種（刻み目をもたない）（59、60）59 縄文L。60 縄文RL。輝石がやや多い。

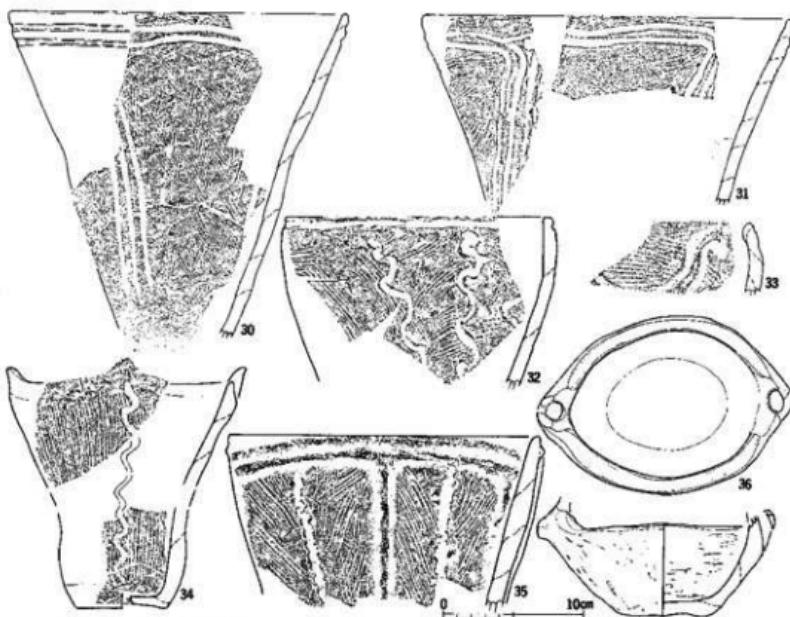
第2類土器（外面に数条の沈線文をもつ鉢形土器）（62～74）



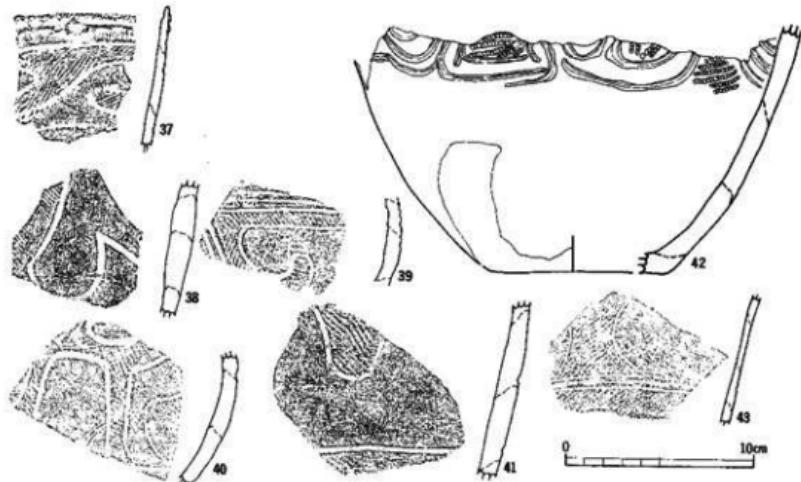
第70図 土器 (1/4)



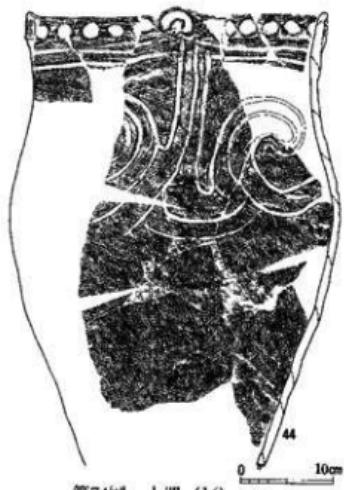
第71図 土器(3)



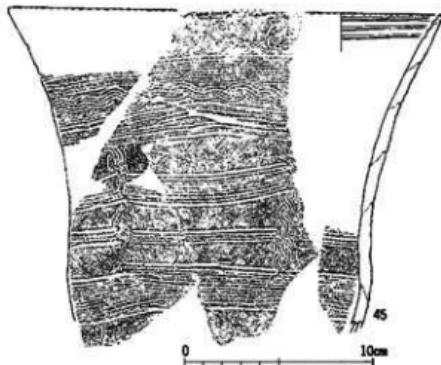
第72図 上 器 (34)



第73図 土 器 (1/3)



第74図 土器 (36)



第75図 土 器 (35)

a種（口唇部、肩部に刻み目をもつ）(62~64)

62 縄文RL。縦連対弧文を3連以上施文する。63

縄文LR。雲母を含む。64 縄文L。雲母を含む。

b種（肩部に刻み目をもつ）(65~70) 65 雲母を多く含む。66 縄文RL。68 縄文LR。

雲母を多く含む。69 縄文LR。70 縄文LR。多量の長石と雲母を含む。

c種（口唇部に刻み目をもつ）(71) 71 角閃石を含む。

d種（刻み目をもたない）(72~74) 72 推定口径11cm、底径3.5cm、高さ6.3cm。角閃石を含む。73 縄文L。

第3類土器（外面に數条の沈線文をもつ深鉢形土器）(75) 75 雲母を多量に含む。

第4類土器（口唇部に刻み目、小波状をもつ浅鉢形土器）(76~78) 76 肩部、内面にも刻み目をもつ。77 肩部にも刻み目をもつ。角閃石、雲母を含む。78 多量の長石と雲母を含む。

第5類土器（肩部に縄文帯をもち、内面に段をもつ深鉢形土器）(79、81、86、87) 79 縄文LR。口唇部に刻み目をもつ。突起下に縦連対弧文、それをつなぐように弧線文を施文する。多量の雲母と石英、泥岩を含む。81 口縁部が波状を呈し括れをもつ器形で、縦連対弧文をもつ。86 縄文LR。87 縄文LR。

第6類土器（口縁部に無文帯をもつ鉢形土器）(82~85、88~92) 82 縄文LR。83 縄文LR。84 縄文LR。85 縄文LR。角閃石、雲母を含む。88 縄文Rを縦位に施文する。89 縄文RL。90 波状口縁を呈し、内面には1条の沈線を施文する。縄文RL。91 縄文LR。92 縄文LR。泥岩、石英、長石を含む。

第7類土器（口縁部に縄文帯をもつ鉢形土器）(93) 93 縄文LR。

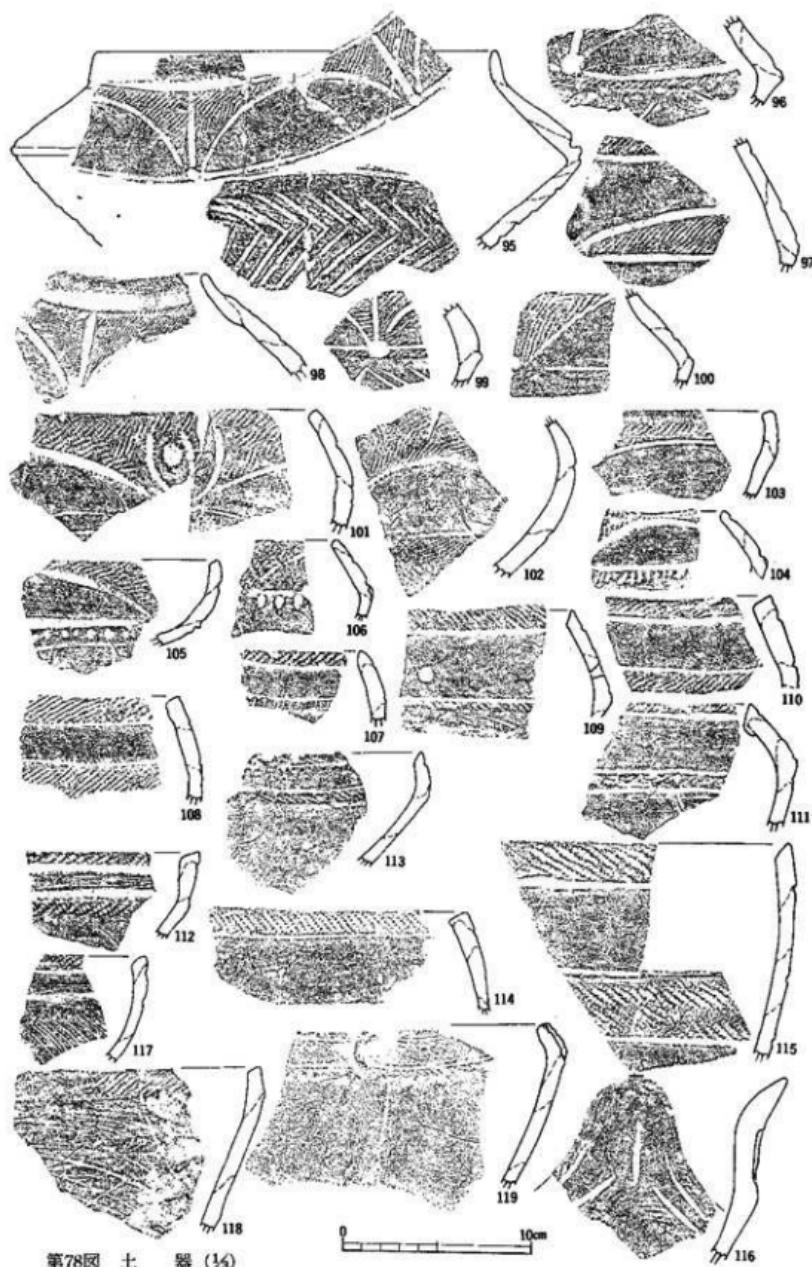
第8類土器（連弧文をもつそろばん玉状の鉢形土器）(95~100) 95 口縁部が立ち上り、胴下半部には羽状沈線文を施文する。縄文L。雲母を含む。96 縄文L。肩部にも施文する。



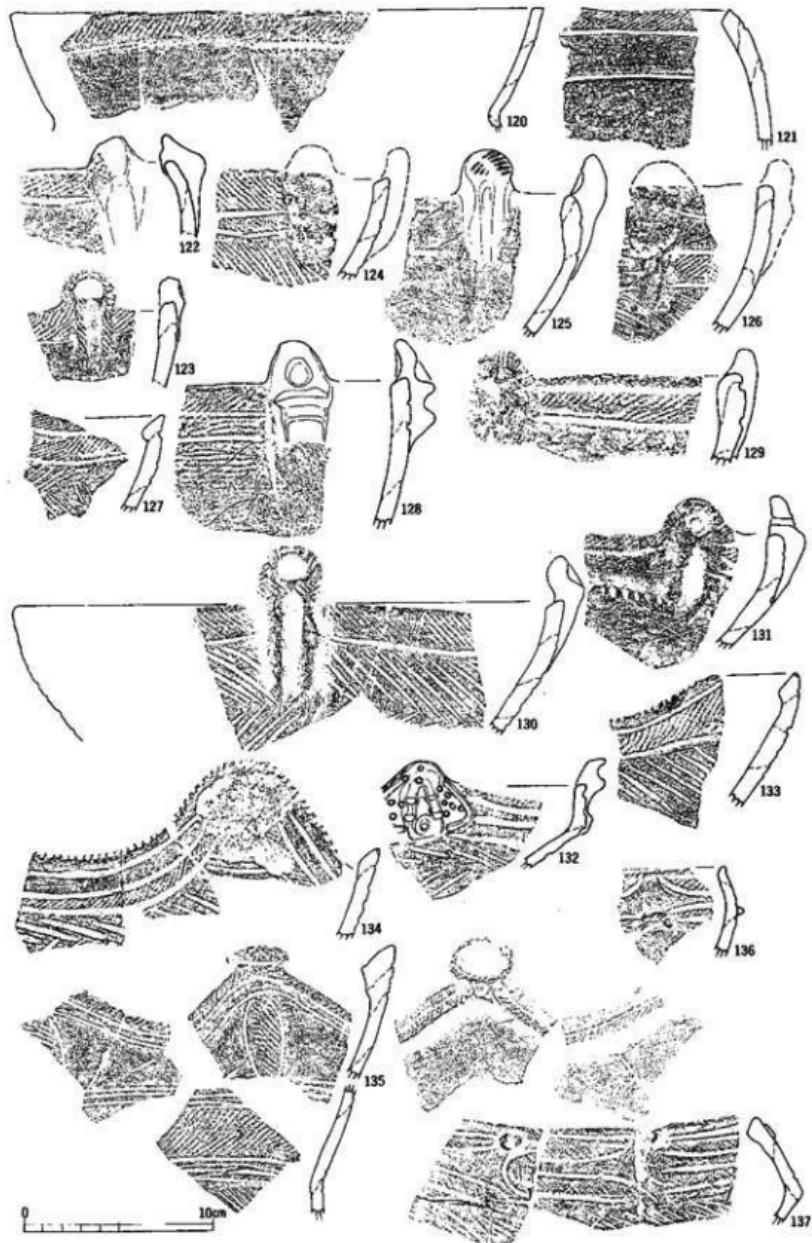
第76図 土 器 (1 / 3)



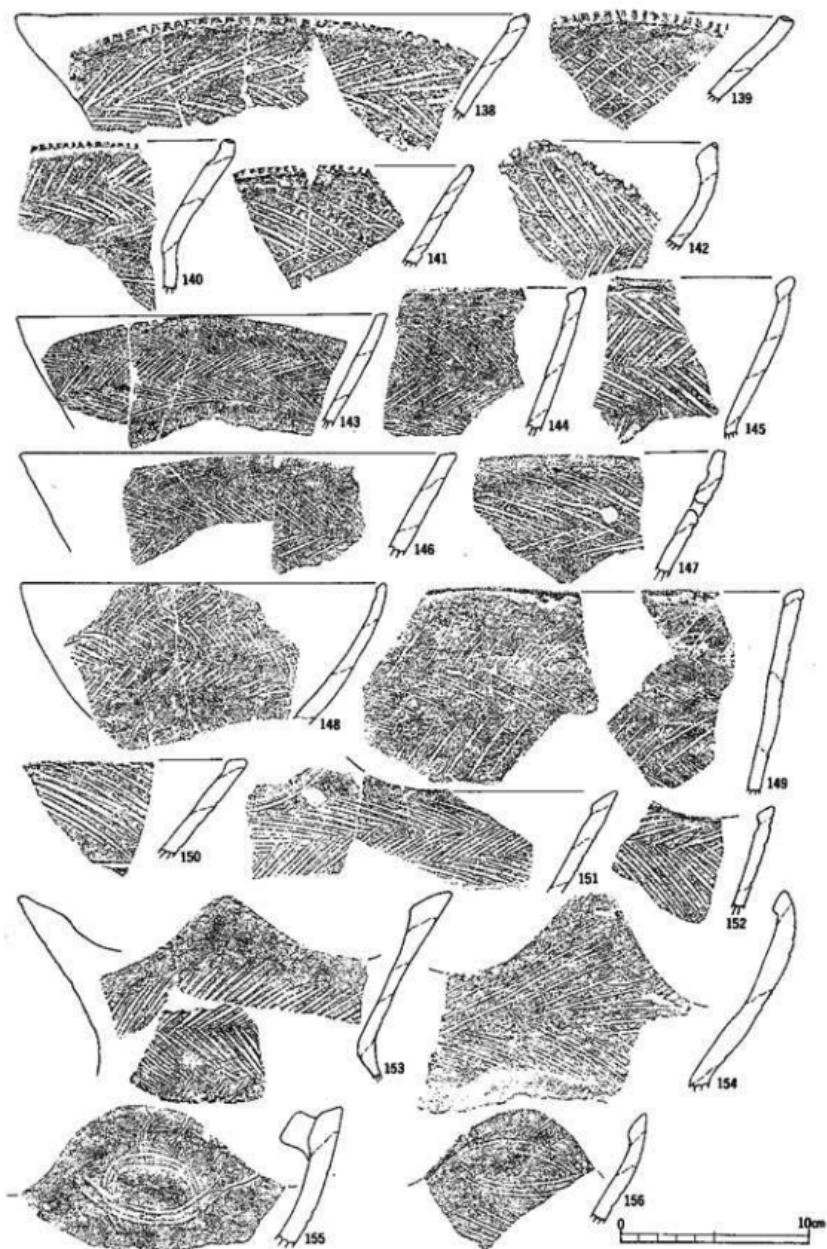
第77図 土器 (3)



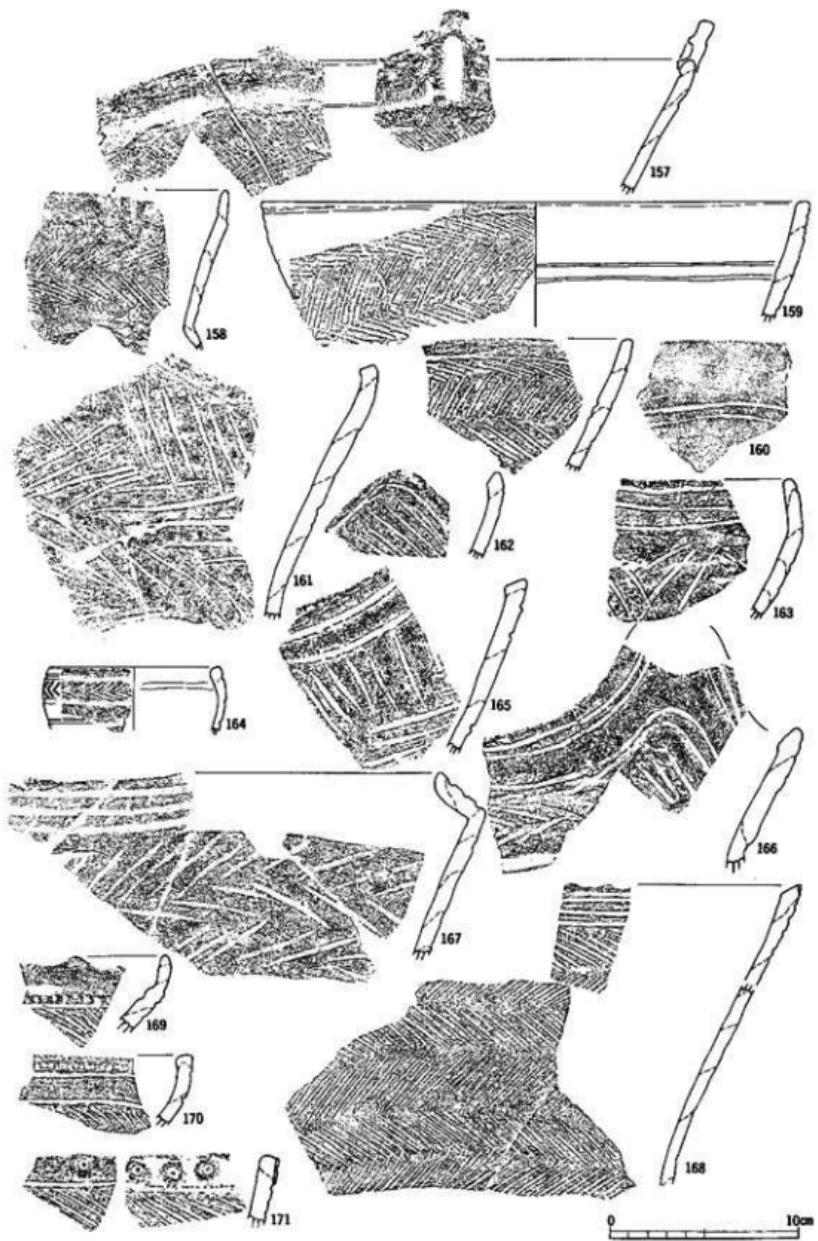
第78図 土器 (1)



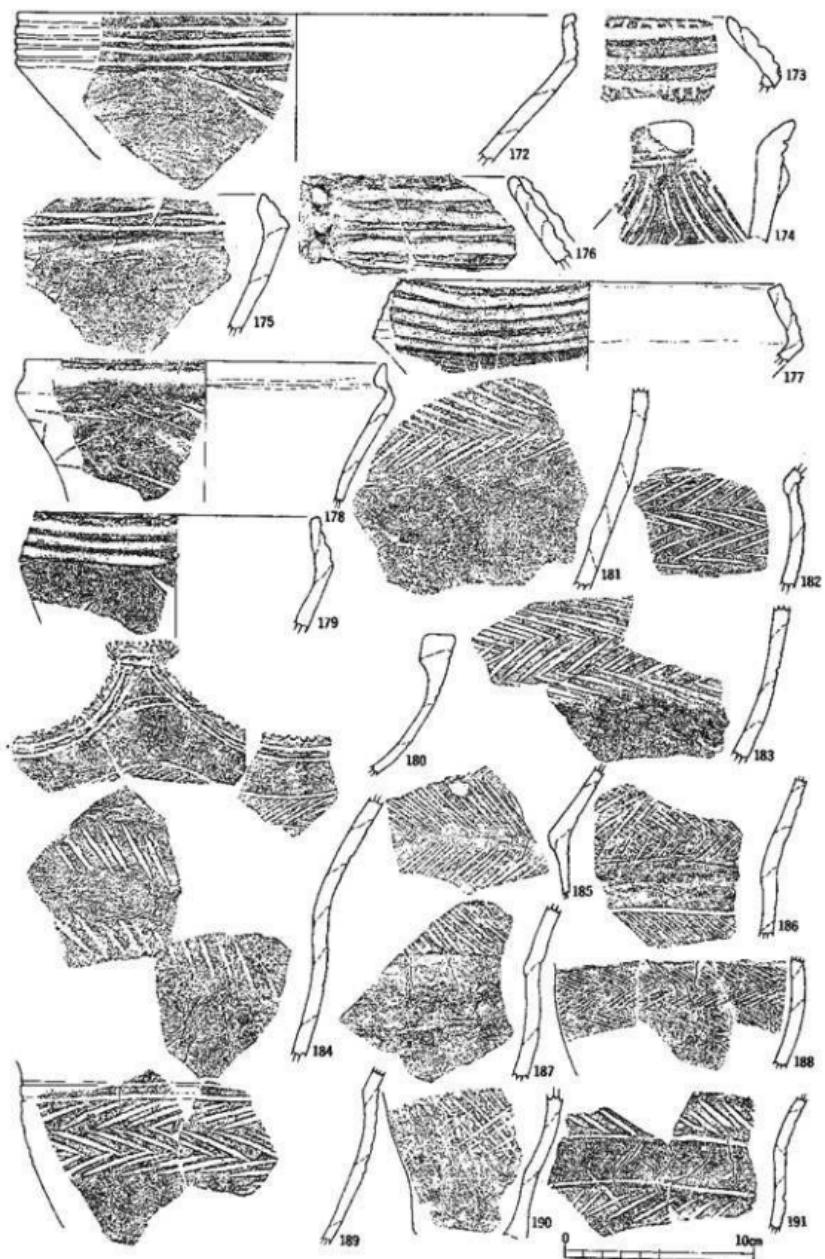
第79図 土器 (3)



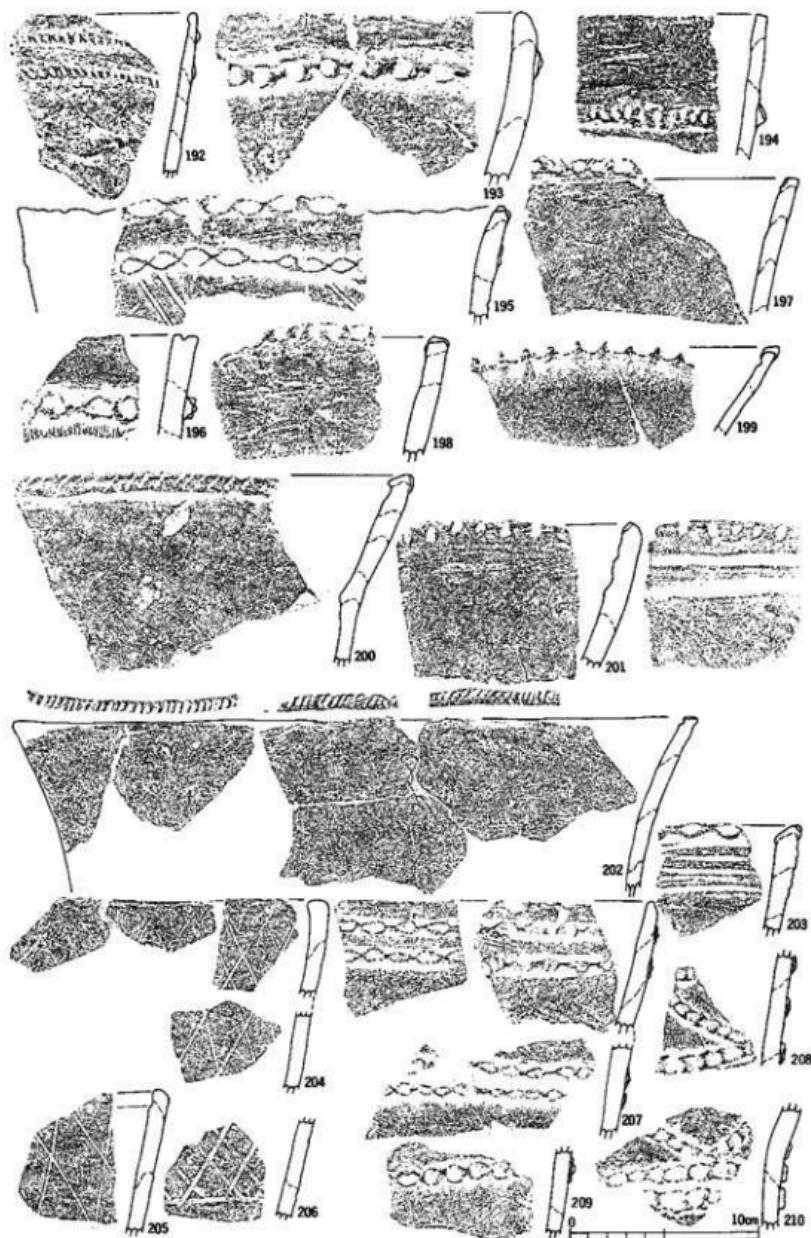
第80図 土 器 (36)



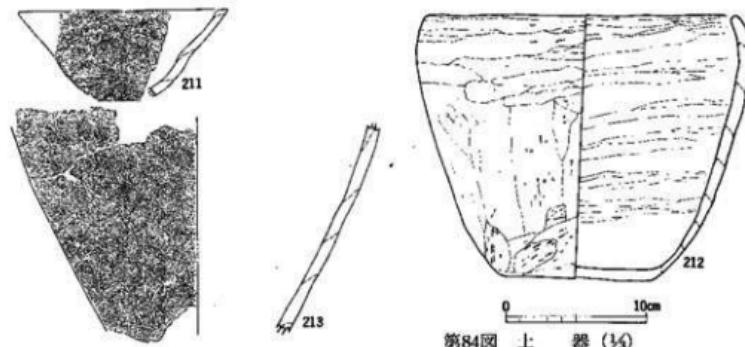
第81図 土器(3)



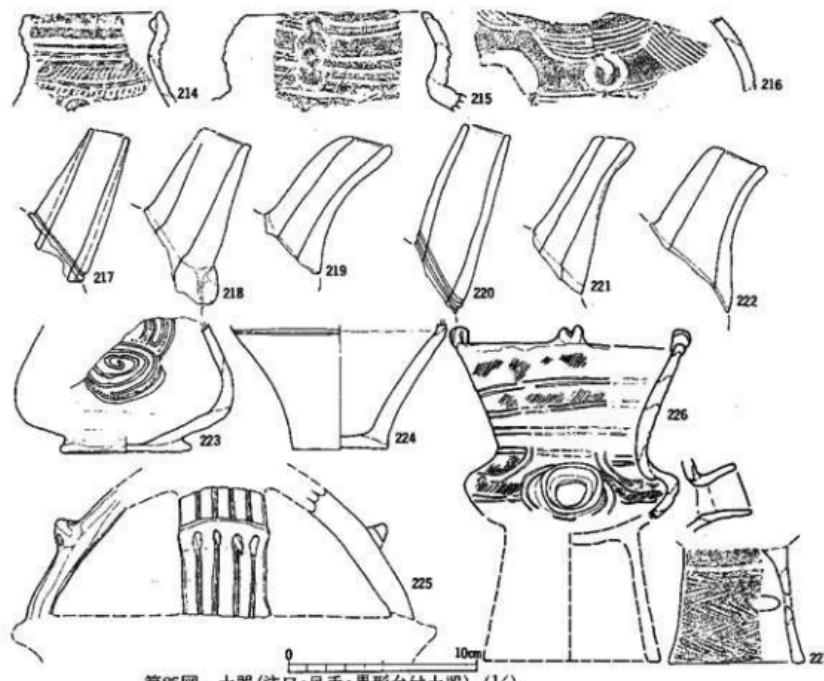
第82図 土器(16)



第83図 土器(粗製) (1/2)



第84図 土器(34)



第85図 土器(注口・吊手・異形台付土器)(34)

97 繩文LR。多量の長石、雲母、花崗岩を含む。98 繩文LR。99 繩文LR。肩部にも施文する。安山岩を含む。100 繩文LR。

第9類土器(連弧文をもつ鉢形上器) (101~106)

a種(列点、刻み目をもたない) (101~103) 101 繩文LR。102 繩文LR。103 繩文LR。

b 種 (列点、刻み目をもつ) (104~106) 104 縄文 L。105 縄文 L R。106 縄文 R L。

第10類土器 (口縁部に縄文帯をもつ平縁の深鉢形、鉢形土器) (107~117・119~126・128~132)

a 種 (無文帯をはさんで縄文帯と刻み目帯、拇指状突起をもつ) (107, 131) 107 縄文 L R。

131 縄文 L R。胴部には羽状(?)沈線を施す。安山岩を含む。

b 種 (無文帯をはさんで 2 条の縄文帯、拇指状突起、又は扇状突起をもつ) (108~116, 123, 125, 126, 132) 108 123 と同一個体。縄文 L R。安山岩を多く含む。109 縄文 R L。胴部は羽状沈線文。雲母を含む。110 縄文 L。111 縄文 L R。112 縄文 L R。113 縄文 R L。114 縄文 R L。115 縄文 R L。116 扇状突起。縄文 L R。125 縄文 L R。126 縄文 L。胴部は羽状沈線文。132 縄文 L R。胴部は羽状沈線文。突起は刻み目をもつ陰線と円形竹管文を施す。

c 種 (縄文帯と無文帯をもつ) (117, 120, 121) 117 縄文 L R。胴部は羽状沈線文。120 縄文 L。121 縄文 L。

d 種 (接続した 2 条 ~ 3 条の縄文帯、拇指状突起をもつ) (124, 128, 129) 124 縄文 R L。胴部は羽状沈線文。128 縄文 L R。129 縄文 L R。安山岩を多く含む。

e 種 (縄文帯のみ) (118, 130) 118 縄文 L。胴部は羽状沈線文。130 縄文 R L。縄文帯直下に羽状沈線文を施文する。

第11類土器 (無文帯をはさんで 2 条の刻み目帯をもつ平縁の鉢形土器) (119) 119 雲母、石英等を多量に含む。

第12類土器 (波状口縁部に縄文帯をもつ深鉢形土器で、口縁部の断面は三角形を呈し胴部には羽状沈線文をもつ) (127, 133~135) 127 2 条の縄文帯直下に羽状沈線文をもつ。縄文 L R。口縁部内側にも縄文を施文する。雲母、長石、石英を多量に含む。133 口唇部に刻み目、胴部羽状沈線文を施文する。縄文 L R。134 口唇部に刻み目、胴部には羽状沈線文を施文する。縄文 L R。135 波頂部に円板状の突起をもつ。口縁部内側には 1 条の沈線と縄文帯を施文する。縄文 L R。雲母を含む。

第13類土器 (弧線文と瘤状の貼付をもつ深鉢形、又は鉢形土器) (136, 137) 136 縦位、横位の弧線文の組み合せにより入組文を構成する。縄文 R L。瘤上に縦位沈線を施す。胴部は羽状沈線文。137 縄文 L R。

第14類土器 (羽状沈線文、格子目文をもつ深鉢形、鉢形土器) (138~173, 180~191)

a 種 (平縁の口唇部に刻み目をもつ) (138~141) 138 口縁部断面は三角形。石英安山岩等を多量に含む。139 左上りの斜線→右上りの斜線による格子目文をもつ。141 口縁部内側に段をもつ。長石を多量に含む。

b 種 (波状口縁の口唇部に刻み目をもつ) (142) 142 口縁部断面は三角形。雲母を含む。

c 種 (平縁) (143~150) 144 口縁部断面は三角形を呈し、口唇部には約1.5cm幅の押圧が連続する。雲母を含む。145 口縁部断面は三角形。波状の可能性もある。147 内面に沈線を施す。胎土には多量の長石、雲母を含む。外面には炭化物が付着する。148 鉢形土器。150 口縁

部に斜行沈線を施す。

d種（口縁部の断面が三角形を呈す波状口縁）（151～156） 151 波頂部下に二重の対弧文を施す。154 多量の長石、石英を含む。155 波頂部下に二重の対弧文を施し、内側には円筒状の突起を貼付する。雲母を含む。

e種（無文帯と羽状沈線文間に段をもち、口縁部には山状突起をもつ）（157、158） 157 突起裏面には円形の凹みをもつ。158 泥岩、長石、角閃石をやや多く含む。

f種（平縁の口縁部に1条の沈線、内面に2条の沈線を施す）（159、160） 159 波状の可能性もある。

g種（口縁部に1条の沈線を施し波状口縁を呈す）（161、162） 161 長石を多量に含む。

h種（口縁部に数条の沈線を施し平縁を呈す）（163、167、168） 163 波状の可能性もある。

167 口縁部は「く」の字状に屈折する。168 口唇部に横長の削りが連続する。石英、雲母を含む。

i種（口縁部に数条の沈線を施し波状を呈す）（165、166）

j種（列点をもつ）（169、170、180） 169 口縁部は小波状を呈す。170 円形刺突が連続する。

180 波状を呈し、口唇部には刻み目を施す。平行沈線間に破線状の沈線、突起面に刺突状の列点をもつ。

k種（口縁部に1条の沈線と、円形竹管文を施す円板状貼付文をもつ）（171）

第15類土器（その他の沈線文手法をもつ深鉢形、鉢形土器）（172～175） 172 沈線間の無文帶にかすかな繩文しが施され、胴部は無文となる。173 沈線文の上部と下部に刻み目をもつ。

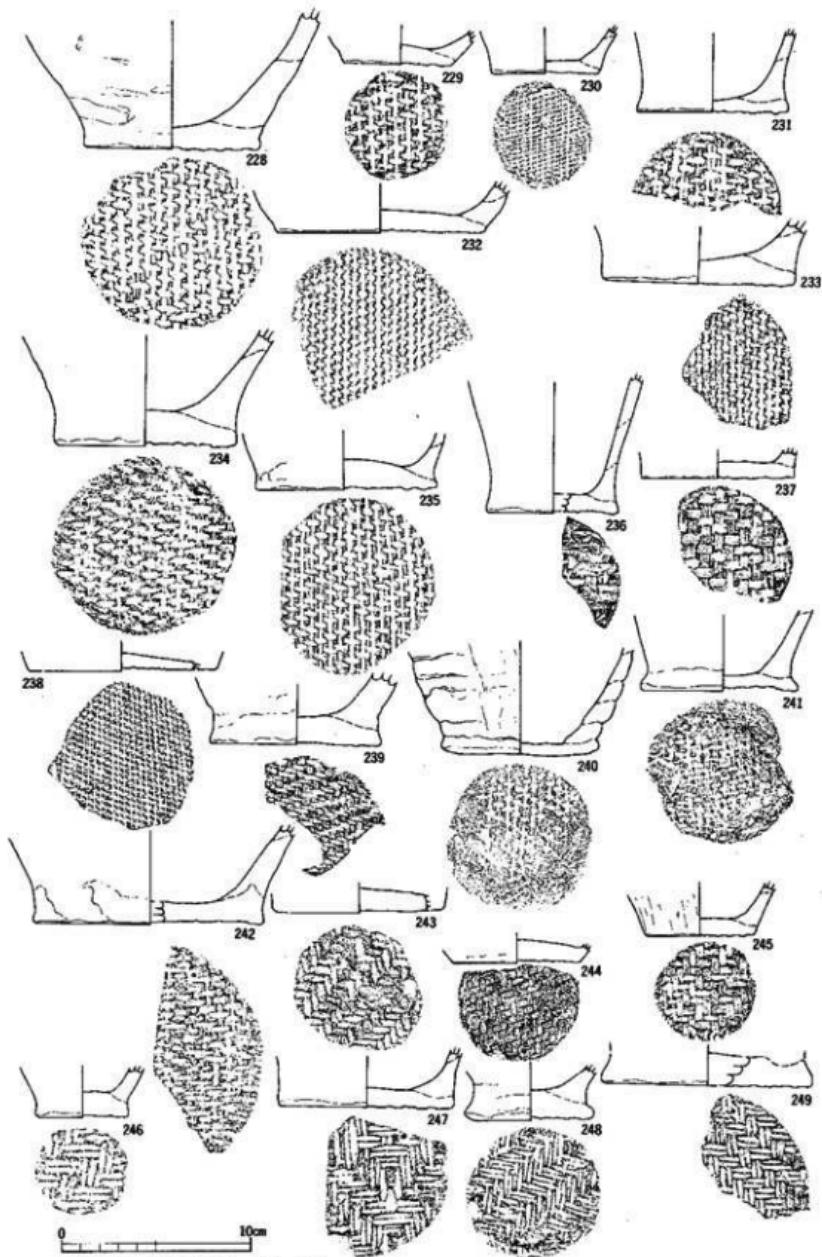
174 山状突起をもつ波状口縁を呈し、その直下から蛇行沈線が垂下する。175 沈線のみ。

第16類土器（やや幅広のナデを加えたような沈線を1～数条施す深鉢形、鉢形土器）（176～179） 176 垂下降線上に押圧を加える。雲母、石英等を含む。177 安山岩、長石を多量に含む。178 脇部にはかすかな羽状沈線文を施す。179 脇部は無文。雲母を含む。

第17類土器（口縁部に1～2条の刻み目、押圧文が施された紐線文をもつ深鉢形土器）（192～196、207～210） 192 鋼石、角閃石を多量に含み、整形が粗雑。193 多量の石英を含む。194 内面の調整は荒い。195 口唇部に押圧文、脇部には斜行沈線を施す。196 口唇部に沈線、脇部には櫛状沈線を施す。207 紐線文上に指頭圧痕をもつ。長石を多量に含む。なお192～196は第2群土器に伴う上器群の可能性がある。

第18類土器（外面無文の深鉢形土器）（197～202、211、212） 197 口縁部内側に連続押圧文を施す。198 極めて多量の長石、石英、安山岩を含みヘラ削り痕を残す。199 粘土総の貼付により無骨状の小波状を呈す。口縁部が無文で、脇部が羽状沈線文の深鉢形土器であろう。201 内面に2条の沈線を施す。212 I 5 グリッドの礎上に逆位で密着して出土した完形土器。 口径21.5cm、底径10.5cm、高さ18.5cm。1622g。外面には黒色の付着物がみられる。

第19類土器（格子目文をもつ深鉢形土器で口縁部がきつく立ち上り、格子は縦長の菱形を呈す）（204～206） 206 第14類土器に含まれるかもしれない。



第86図 土器(底部) (1 / 3)

第20類土器（注口土器）(214～224) 215 沈線間に刺突文を施す。217 注口部は2重構造を呈す。

第21類土器（釣手土器）(225)

第22類土器（異形台付土器）(226,227) 226 縄文L。瘤を貼付する。227 羽状沈線文を施す台部で、梢円形の透かし彫りをもつ。雲母、長石を多量に含む。

第23類土器（ザル、又は網代編みの圧痕をもつ底部）(228～249)

a種（2本超え1本潜り1本送り）(228～235,237,238,240～242) 228～233,235は左送り。他は右送り。

b種（2本超え2本潜り1本送り）(239,244,245) 239,245は左送り。244は右送り。

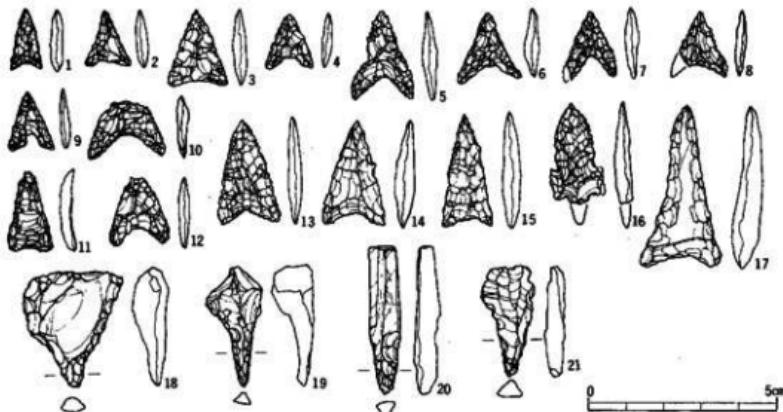
c種（3本超え3本潜り1本送り）(243) 左送り。

d種（2本組2組超え2組潜り1組送り）(246,249) 右送り。

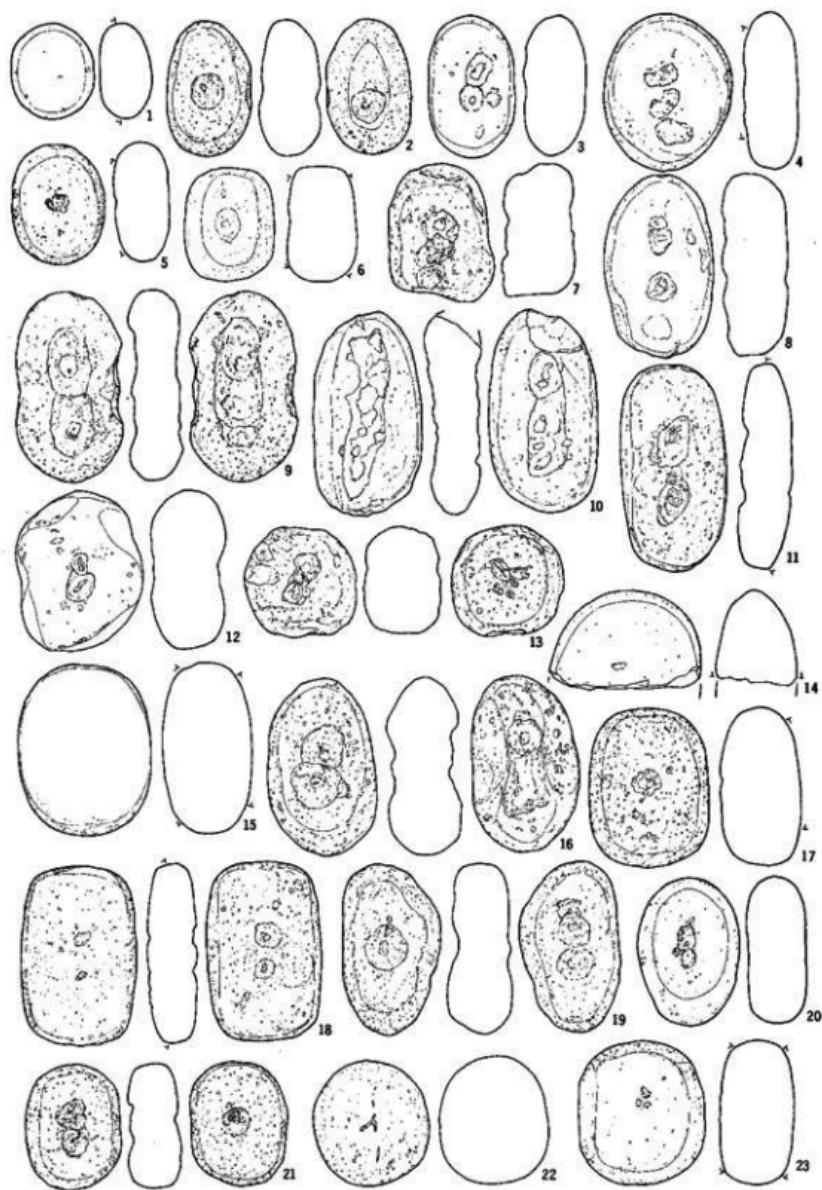
e種（2本組3組超え3組潜り1組送り）(247,248) 247は左右送り。248は左送り。

(2) 石錐（第87図1～17、第96図）

遺構外から88点出土し、遺構内のものと合わせて125点を数える。このうち有茎錐は凹基有茎で側縁に突起がつく、いわゆる飛行機錐が1点(16)出土したが、それ以外は全て無茎錐である。その中で平基無茎錐（いわゆる三角錐を含む）は6点で、他は凹基無線錐である。この凹基無茎錐の中でも基部の挿入が極く浅く平基に近い、長軸長>短軸長のタイプが非常に多く約40点を数えるほか、凹基無茎で、長軸長<短軸長のタイプ、長軸長≈短軸長のタイプが数点みられる。大きさは短軸長が0.8～2.2cm、長軸長が1.2～4.4cmを測るが、短軸長1.2cm、長軸長1.6cm付近と、短軸長1.6cm、長軸長2.7cm付近の大小2種類に分けられるほか、特大種ともいえる17がある（第96図）。重量は0.2～0.39gが20点を数え最も多い。16の飛行機錐は縄文時代晩期の可能性が強いが、他のものに関しては中・後期の所産と考えてよいと思われる。そうすると姥神

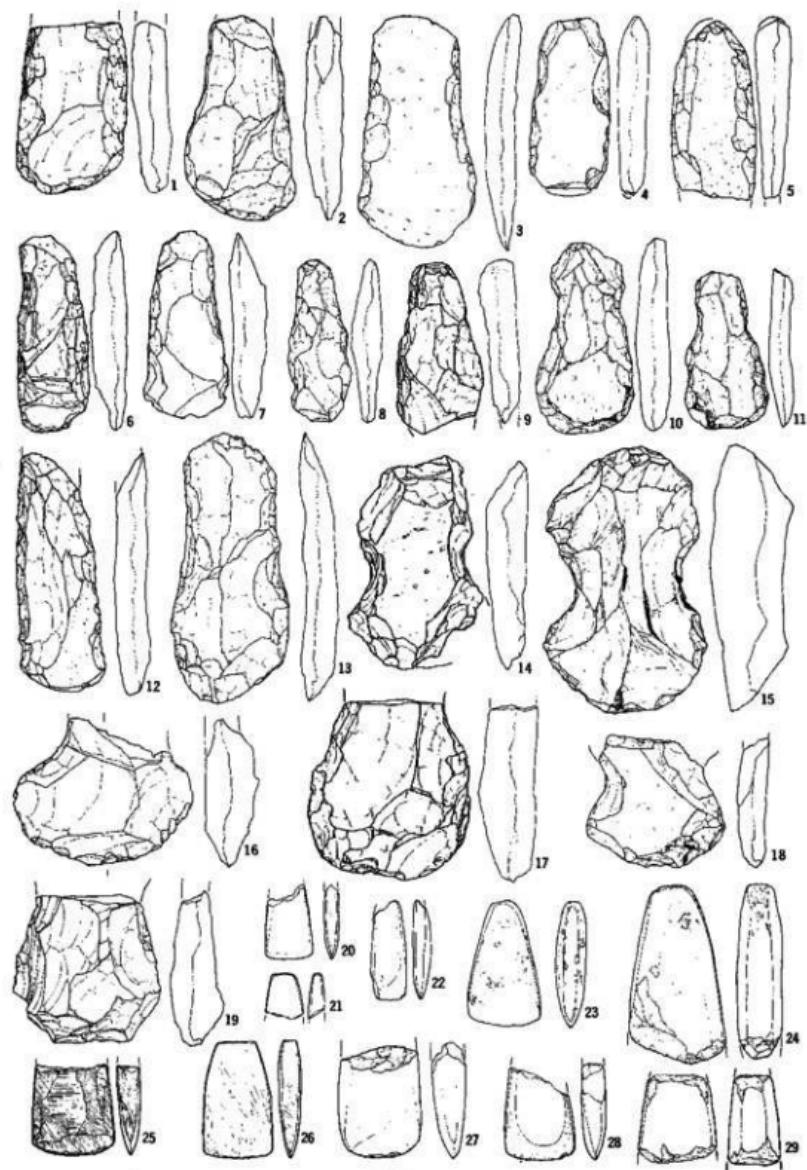


第87図 石錐・石錐(36)



第88図 磨石・圓石 (34)

0 10cm



第89圖 打製石斧・磨製石斧 (3)

遺跡では、後期中葉の段階に依然として無茎株が主体を占め、東北地方から西方へ波及したといわれる有茎株は殆んど普及していなかったと推測される。なお後、晩期に散見される局部磨製石籠は1点もなかった。

(3) 磨石・凹石 (第88図1～23、第97、98図)

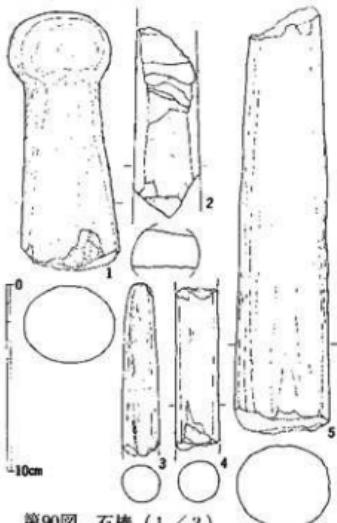
磨石と凹石は主に窪みの有無によって区別されるが、形態的にも、機能的にも類似するためここではあえて一括した。遺構外から58点出土し、遺構内のものと合わせて115点を数える。このうち破損資料は13点のみで、正倒的に完存資料が多いのが特色である。大きさは長軸長が6.6cm～16cm、短軸長が5.3cm～10.3cmで短軸長に規制された大きさであるといえるが、これは手に持つて使用するという機能面の反映であろう。重量は160g～1320gのうちで、400g～600gのものが主体を占める。115点の資料のうち、窪みが全くないわゆる磨石は11点あるが、これらは大きさ、重量ともに分布の位置が主体部から外れたものが多く、磨石の機能をも兼ね備えた例が多い凹石とは從来通り区別すべきであろう(第97、98図)。石質については第VI章1で詳しく述べるが、遺跡周辺で採取が容易な安山岩を主体とするほか、約1割は八ヶ岳南麓の台地面以外から持ち込まれた石材を利用している。形態は、側面部等に自然面を顕著に残し河川の転石をそのまま利用したと思われる例が85個、74%を占める。周縁部に敲打、研磨痕をもち、転石を予め整形したと思われる例は20個で、これらは更に数種類の形態に分類することが可能である。特に後期には独特の形態が存在すると思われる。

(4) 打製石斧 (第89図1～19)

遺構外からは42点出土し、計59点を数える。このうち分銅形石斧(14～19)は8点、柄がやや強い撥形石斧(10・11)は4点で、それ以外は短冊形、或いは短冊形とも撥形とも区別できないものが多い。完存するのは僅か9点である。

(5) 石棒 (第90図1～5、93図3・6～9)

第90図1～5は緑泥片岩を主とした縄文時代後期の所産と思われる小型石棒。完存品ではなく、先端、或いは後部を欠損する。焼成を受けたもの、赤色塗装が施されたものはない。93図3・6～9は安山岩製の石棒。3・8は自然石の形を生かして仕上げられた石棒で、頭部の作り出しそうなく断面は扁平に近い。6・7・9は断面が丸い円柱形に加工され、頭部が作り出された例(9)がみられる。3 M13の配石内の第98図2の丸石付近から、1の不定形扁平石とともに出土した。表面は焼成を受たように部分的に赤色変化し、剥離した面もみられる。



第90図 石棒 (1/3)

(6) 磨製石斧 (第89図20~29)

遺構外からは15点出土し総計23点を数えるが、そのうち定角式は21点、乳棒状は2点である。乳棒状の2点はともに大型の部類に属す。完存するのは3点のみで、他は基端部のみが6点、基部のみが2点、基端部を欠くのが9点、刃部を欠くのが3点である。縄文時代後期になると磨製石斧は定角式が一般化するが、この現象はやはり後期になって増加する砥石と関連づけることが可能かもしれない。



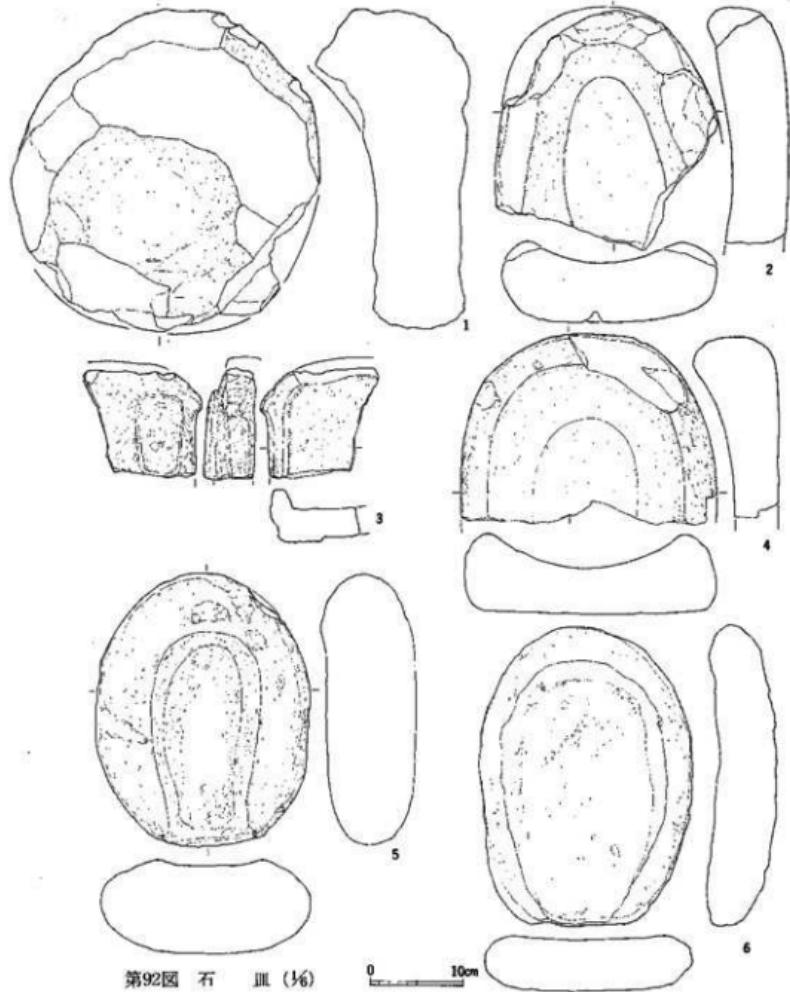
第91図 砥石 (1~14は $\frac{1}{2}$ 、15は $\frac{1}{4}$)

(7) 石錐 (第87図18～21)

遺構外から9点出土し、総計は16点を数える。長軸は1.4cm～3.8cmのうち3cm程度のものが最も多く。基部(つまみ)の有無によって2種類に分けられるが、基部を有す類はその形状によって更に数種類に分類することが可能である。

(8) 砧石 (第91図1～15)

9号住居址出土1点を含め計16点出土した。そのうち極粗粒～粗粒(粒子径2～3mm)の荒砥



第92図 石 皿 (16)

0 10cm

的な例が6・7・8・10、粗粒～細粒(1～3mm)の中砥的な例が1・2・4・11・13・14、細粒～極細粒(1/4～1/8mm)の仕上げ砥的な例が9・12である。また有溝砥石は3・5・11・12・13・15、扁平砥石は1・2・4である。有溝砥石のうち円礫を用いた15に9本の直線的な溝がみられるほかは、1本の長軸方向の溝をもつ。なお1～14は手持ち砥石、15は置砥石であろう。

(9) 石皿 (第92図1～6)

3 明瞭な縁部と脚(推定4箇所)が作り出された多孔質安山岩製の石皿で、隅丸長方形を呈すと思われる。遺構外出土の石皿は11点あるが、有脚石皿はこの1点のみである。石皿は遺構内出土の4点と合わせて計15点の出土をみたが、完存したのは5・6の2点だけで、他は残り4点の破損資料が多い。

(10) 多孔石 (第93図10、11)

遺構内外合せて14点出土した。これらは多孔質安山岩の自然礫を用い、自然面に対して蝶の巣状の彫みをもつ使用面を形成したものであるが、この他に石棒片を多孔石として再利用したものが15・17住居址から出土している。

(11) 磨き石

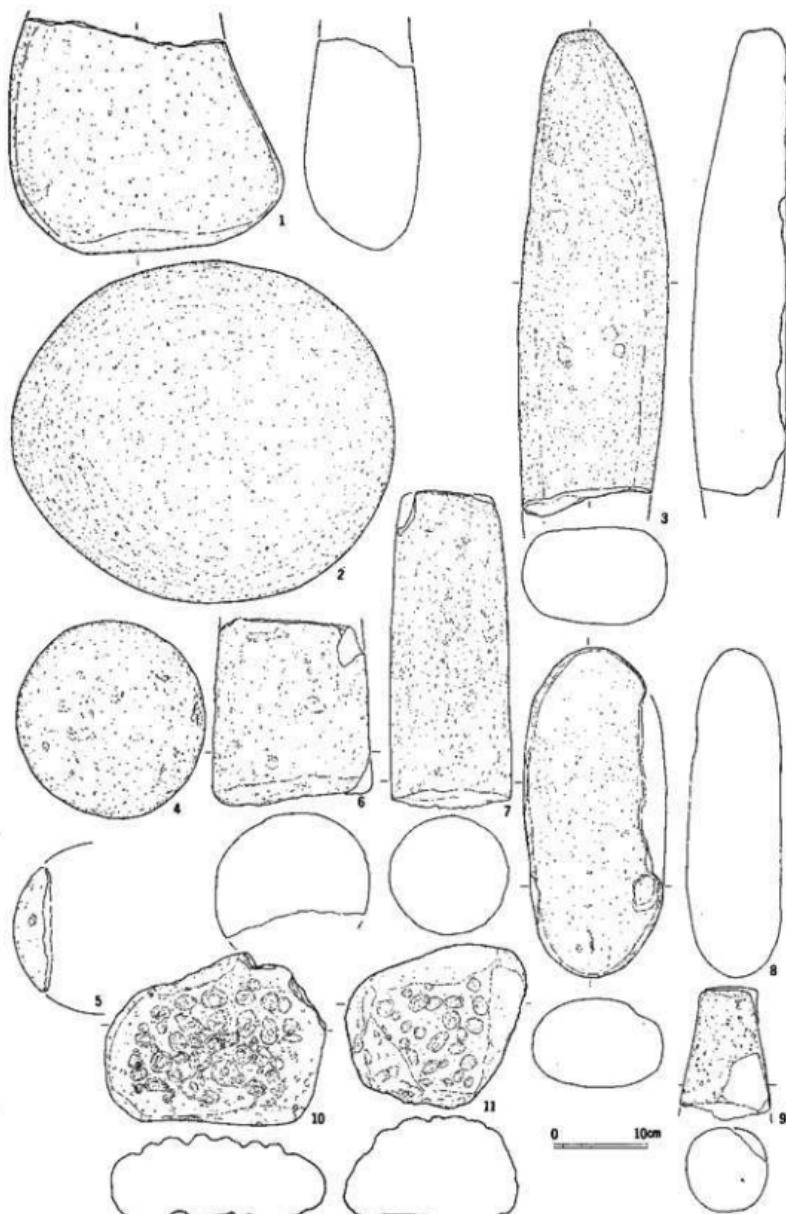
従来は「擦痕を有する礫」として報告されていた類であるが、磨くことを目的とした礫という意味で「磨き石」と仮称したい。遺構外からは5点出土したほか、住居内からは岡を掲載した資料以外に8号住から安山岩例が1点、10号住から砂岩例が1点出土し、総計11点を数える。縄文時代後期に出現する石器で、硬質・細砂粒の円磨度の大きい扁平な自然礫を用いる。擦痕は主に短軸方向の周縁部にみられることから、扁平面をつまんで上器の内外面を研磨するのに用いたのではないだろうか。

(12) 丸石 (第93図2・4・5)

2 M13グリッドの配石中から出土した丸石で最大径41cm、重量73.9kgを計り、遺跡内出土例としては丸石が多い山梨県内でも最大級のものである。表面には敲打痕状のものが全面にみられるが、河川中の転石にも同じような状況の礫は多く、人為的な加工痕ではなかろう。配石自体の時期がはっきりしないため所属時期は不明である。ただ白州町根古屋遺跡1号住居址例、須玉町郷藏地遺跡1号住居址例等のように中期後半期には住居内に配置されていた丸石が、後、晩期になると大泉村金生遺跡、高根町石堂遺跡のように屋外配石、石棺墓等に伴って検出される例が多く、中期から後期になると丸石に關わる祭式が屋内から屋外へ、つまり個々の家々による単独祭式から集落における共同祭式へと変化したのではないかと推測できる。從って本資料も後期の所産である可能性が強い。4 2から約10m離れて位置し、2と同じく配石中の礫下から出土した。このほか遺構内例も含めて計5点出土し、そのうち完存するのは前記の2例のみで、他は破損品である。

(13) 不定期扁平石 (第93図1)

河川等でみられるやや扁平な転石をそのまま利用したものが多く、形は不定形であるところ

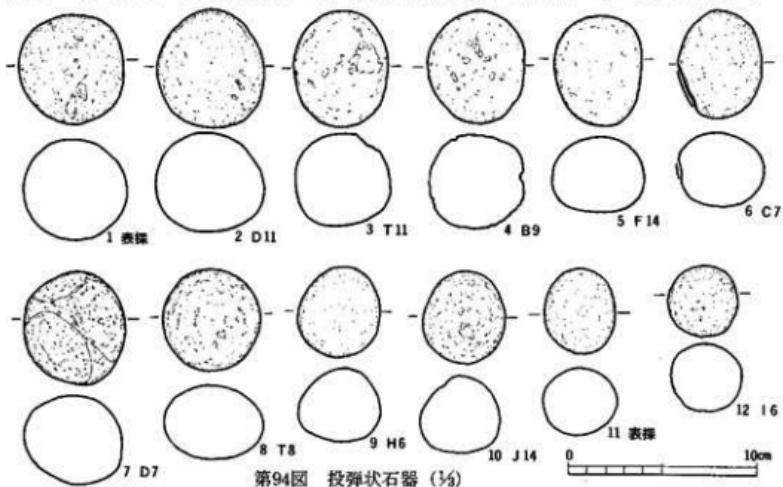


第93図 不定期扁平石・石棒・丸石・多孔石(36)

から「不定形扁平石」と仮称する。15号住居址から出土していることから後期の所産であり、その性格は丸石や石棒に近いと推測できる。1はM13グリッドの丸石周辺に配置されていたものであるが、これ以外に遺構外から2点、遺構内の2点（15号住居址、14号土壙）の計5点が出土した。全て安山岩製である。

（14）投弾状石器（第94図1～12、99図）

球状を呈し大きさ、磨面の有無によって磨石、丸石とは区別できる。明らかな加工痕を残す例が少ないと加えて、自然円錐をそのまま利用した例が非常に多いことから従来は見過されがちな石器であった。従って縄文時代の投弾状石器という呼称自体、一般の研究者にはなじみが薄い。今回、計62点の安山岩製の投弾状石器を検出したが、これらはおそらく姥神遺跡付近では自然の状態で存在し得ない礫であり、何らかの要因によって河川等から集落内へ持ち込まれたものであることは明らかである。ただ石器と認めるのには不安要素もあることから、遺構内出土例が数例あるにもかかわらず全て割愛させていただいた。第94図は遺構外出土の典型例のみ図示したが、このほかに住居址出土例として、1点のみの出土は1・5・9・10号住居址、2点出土は15号住居址、3点出土は7・8号住居址があり、壠之内～加曾利B式期の所産であろう。大きさは最大径が3～7cmまでの間のうち5～6cmのものが最も多い（第99図）。重量は21g～220gまでの間のうち40～50gが最も多いが、径6.5cm付近を境に75g未満のものと、100g以上の



第94図 投弾状石器 (36)

ものに2分される傾向をもつ。つまりこの石器には大小の2種がありそうである。この石器の石器の使用法は判然としないが、今後破損部分における加壓方向の網織等によって推定は可能であろう。

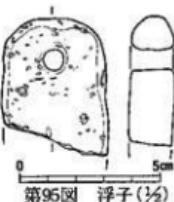
（15）浮子（第95図）

I 5 グリッド出土。石英を含む軟質の軽石製で、幅3.8cm、厚さ1.6cm、9.2g。径1.7cmの孔

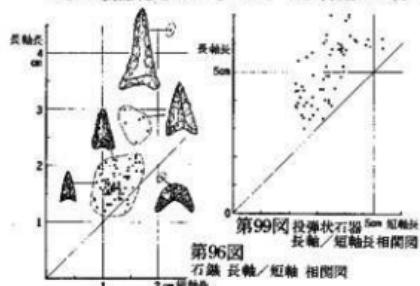
が貫通する。このほかに殆んど形をとどめない資料が1点ある。

(16) 使用痕のある剥片

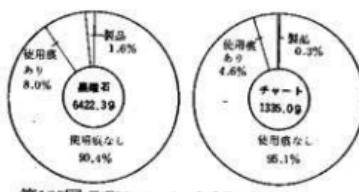
図示していないが遺跡全体からは2411点、6322.1gもの多量の黒曜石の剥片類が検出された。このうち使用痕が認められるもの、石核状を呈すものは127点、515.3gである。これに定形化された製品(石錐、石錐)133点、80.2gを加えてそれぞれの重量の割合を表したのが第100図である。同様にチャートは剥片類が90点、1331.3gで、そのうち使用痕のある剥片・石核状を呈すもの7点、61.9g、製品(石錐)6点、3.7gの割合も示した。この両者は、剥片類と製品を合せた全重量で比較してみると黒曜石が6422.3g、チャートが1335.0gで黒曜石は83%を占め圧倒的に多いが、そのうちで使用痕をもつもの、製品の割合はそれぞれ大よそ似たような比率を示す。つまり、集落内に持ち込まれて遺存した多量の石材の剥片のうち、何らかの用途に供されたのは10%未満に過ぎないが、そのうち製品に限定すると僅か2%にも満たない。つまり製品化されたものは、全石材量の50分の1程度しか遺跡内に遺存していないという結果



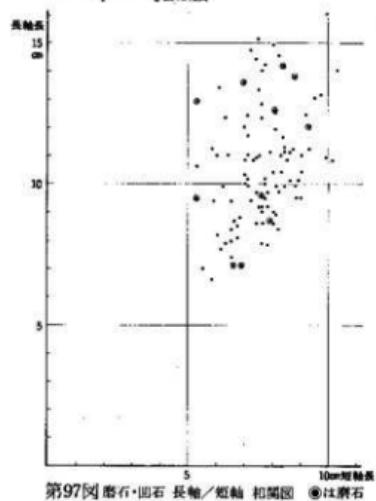
第95図 浮子(?)



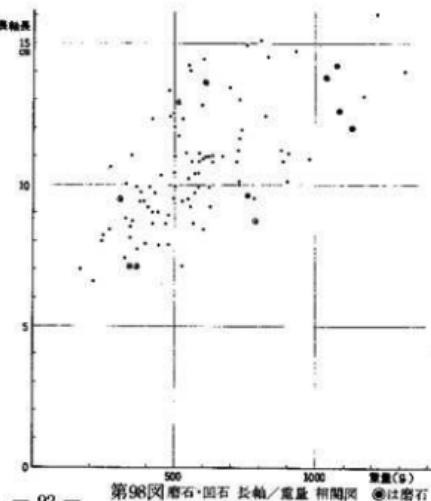
第96図 石錐 長軸/短軸 相関図



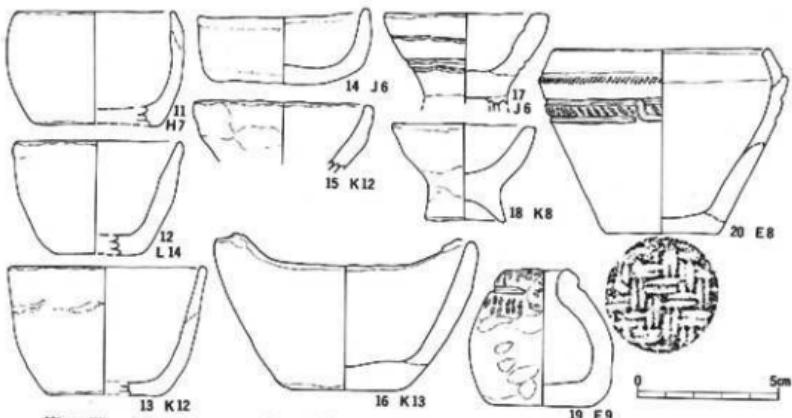
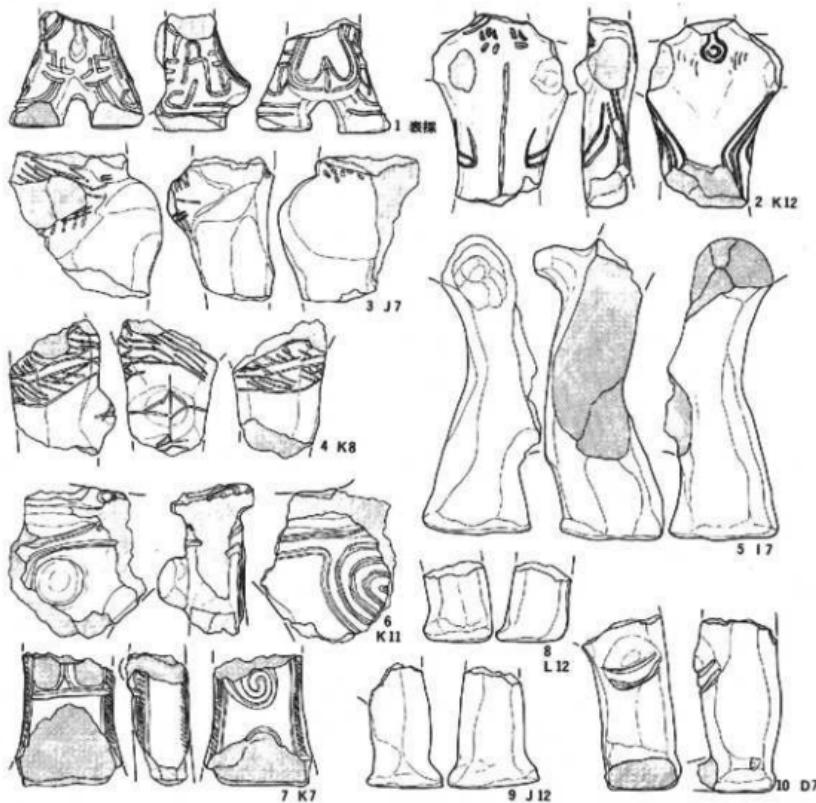
第100図 黒曜石、チャートの全重量に対する
使用痕のある剥片・製品の割合



第97図 黒曜石・チャート 長軸/重量 相関図 ④は磨石



第98図 黒曜石・チャート 長軸/重量 相関図 ④は磨石



第101図 土偶・ミニチュア土器 (3)

になる。従っていかに遺跡外で消耗された石器が多かったかが理解できよう。

(17) 土偶 (第101図1~10)

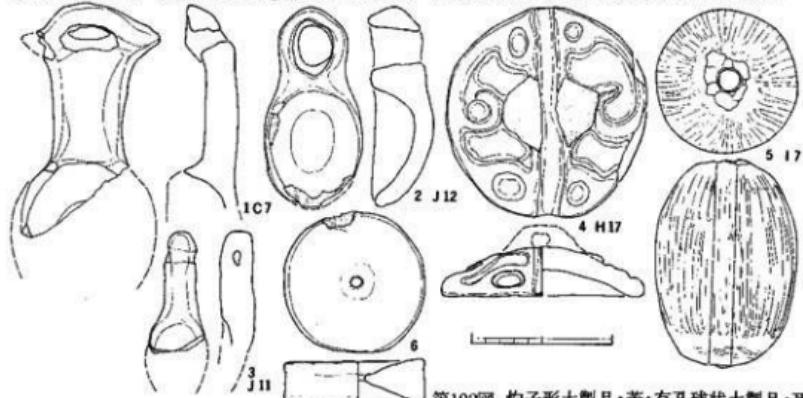
遺構外からは10点出土したが、そのうち1~4は縄文中期後半(曾利式期)、5~10は後期の所産であろう。1 下半身。2 胸~腹部。腹部破損面に縦方向の接合面が観察できる。3 腰部左半分。4 と同一個体の可能性がある。胎土には角閃石、長石、石英、石英安山岩を多量に含む。5 右脚部。6 左胸部以下。接合面に沿って破損したらしい。輝石、安山岩、長石をやや多く含む。7 堀之内式期かと思われる左胸部。胎土には長石、角閃石のほか、石英安山岩を含む。8 加曾利B1式期の胸~腹部。腹部破損部には分割塊製作法を示す良好な接合面がみられ、胸~腹部にひとつの方形粘土塊を用いた状況を伺うことができる。9 左足か。9左足。10 左足。膝頭の表現が愉快である。胎土には石英安山岩、長石、石英を含む。以上、安山岩を含む5はハケ岳南麓の典型的な胎土組成を示す一方、3、4、6、10は石英安山岩片、石英を含み、黒富士火山麓的な胎土構成を示す。なお破損面に木芯痕を有する例、赤色塗彩が施された例は共に全くなかった。

(18) ミニチュア土器 (第101図11~19)

13 推定口径6.8cm、底径4cm、高さ4.5cm。14 口径6cm、底径5.3cm、高さ2.4cm。16 推定口径9.3cm×6cm、底径4cm、高さ5.5cmの口縁部が横に広がった土器。17、18 壱形土器。17は或いは土器の脚部かもしれない。19 口径2.3cm、底径3.7cm、高さ4.8cmの壺形土器。胎土には角閃石、石英が含まれる。完存。20 加曾利B1式。ミニチュア土器というよりも、土器組成中の1器種であろうか。口径7.5cm、底径4cm、高さ6.5cm。沈線→縄文R L。

(19) 土製品 (第102図)

1~3 焼子形土製品。いずれも頭部が匙状に窪み、ほぼ水平に柄がつく。柄部には孔が貫通するが、1~2は柄に対して垂直方向、3は水平方向である。1 柄部長5.5cm。匙部には赤色塗彩がみられる。2 長軸7.2cm。匙部は4.2×3.5cm。柄部長は3cm。匙部内面及び裏面には爪先压

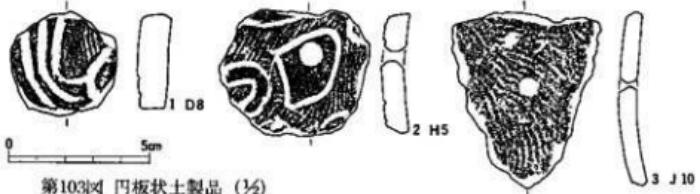


第102図 焼子形土製品・蓋・有孔球状土製品・耳栓

痕が観察できる。25.3g。3 柄部長3.2cm。4 蓋。直徑7.3cm。5 有孔球状土製品。県内では初の出土である。胴径5cm、長軸7.3cmの紡錘形を呈し、長軸方向に径8mmの孔が真直ぐに貫通する。169.3g。表面は長軸方向に細かい磨きが無数に加えられる。孔の周囲には孔側からの剥離が連続しており、棒状具を通して何らかの回転運動をした使用痕であると思われる。小島俊彰氏の紡錘車説、穿孔具の弾み車説の両説を支持したい。なお胎土中には輝石、安山岩片が含まれる。6 耳栓。形態としては最も耳栓に近いが、側面には溝みがなく耳栓でない可能性がある。径5cm、厚さ1.5cm。中央に径3mmの孔があく。表面の調整は悪く磨きが殆んどないが、ほぼ全面に赤色塗彩の痕跡が観察できる。35.1g。なお、本遺跡からはこのほかに耳栓は検出されていない。神奈川県下北原遺跡、東京都平尾遺跡、山梨県清水端遺跡(明野村)等に共通することであるが、堀之内～加賀利B式段階(後期前半)では土製の耳栓、耳飾りは殆んどなく、金生遺跡、石堂遺跡のように多量の耳栓が伴うのは安行式期以降、後期後半から晩期にかけてだろうと思われる。

(20) 円板状土製品 (第103図 1～3)

1・2は円板状であるが、3は三角形を呈す。いずれも縄文時代後期(1・2は堀之内式期)の土器片を再利用しており、周縁部には打撃による調整が加えられるが、研磨された形跡はない。2・3には両面からの穿孔がみられるが、これが土器の補修孔なのか、円板状土製品の機能に関わるものなのかは不明である。1 径3.7cm。18.9g。2 径4.8cm。23.5g。3 長軸6



第103図 円板状土製品 (3)

cm、短軸5.2cm。20.9g。

2 弥生時代の遺物

(1) 条痕文土器 (第104図 1)

条痕文を横位に施文す

る壺形土器胴部片。貝殻

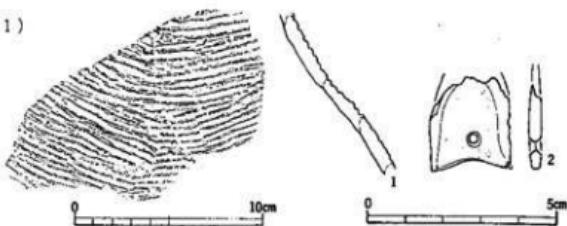
条痕文かと思われる。胎

土には1～3mmの粗粒の

石英を極めて多量に含む

ほか、藍母、長石がみら

れ特徴的な胎土組成を示



第104図 条痕文土器・磨製石鎌

す。条痕文土器は姥神遺跡ではこの1片のみである。

(2) 磨製石鏡 (第104図2)

残存長軸2.5cm、短軸2.1cmを測り、両面からの穿孔による径2mmの孔が貫通する。2.2g。
粘板岩製。

VII まとめ

1 姥神遺跡出土の石器について

姥神遺跡からは遺構内、遺構外合わせて435点の石器類が検出されたが、住居址に伴う石器はそのうち149点で全体の34%を占める。この中で1点しか出土しなかった石匙と玉類を除く432点の石器を器種ごとに見ていくと、住居址ととりわけ結びつきが深いと思われるものが磨石・凹石で、114点中57点を数え、50%を占めている。このほかの石器では、種別ごとの数量が全体的に少ないため必ずしも良好な結果が得られたとは思わないが、50点以上の出土をみた石器の中で、石鏡では125点中34点(27%)、打製石斧では59点中17点(28%)とほぼ石器全体の傾向に近い。ただ他遺跡との比較なしでは、この結果だけから石器の廃棄パターンを読みとることはいさか困難である。

また時期ごとの石器量の変化をみるために、住居址内出土石器を住居址の時期ごとに分けて1軒当りの出土量をみると(105図)、打製石斧、磨製石斧、磨石・凹石、多孔石、石鏡、砥石、石

第1表 石器の住居別、器種別数量

曾利式期		堀之内式期										加曾利B式期															
器種	住居址	2	4	11	12	13	14	16	17	18	19	20	21	小計	平均	1	5	7	10	15	小計	平均					
1 石鏡		2	1	2	2									2	9	0.8	1	3	5	7	16	4	3.2				
2 磨石・凹石		1	3			11	3	4		3	25	2		2	4	5	6	17	4.3	2	4	5	3	14	3.5		
3 打製石斧					1	1			3	2	7	0.6		3	4	7	1.8			1	1	1	3	0.8			
4 石棒			1				1				1	3	0.3		5	5	1.3			1	1	2	0.5				
5 磨製石斧								1		1	1	3	0.3		1	3	1	5	1.3		1		1	0.3			
6 石鏡		1	1						1	2	5	0.4						0		1	1	2	0.5				
7 砥石											0	0				3	3	0.8					1	0.3			
8 石皿											0	0				1	1	0.3		1		1	0.3				
9 多孔石				1	1						2	0.2			1	1	2	0.5			1		0				
10 磨き石											0	0				1	1	0.3		1	1	2	0.5				
11 丸石											0	0				1	1	0.3					0				
12 不定形扁平石											0	0						0				1	1	0.3			
小計		0	4	2	7	4	0	13	4	0	9	0	11	54	4.5	3	12	26	17	58	14.5	7	10	10	10	37	9.25

棒のピークは堀之内式期にみられる。この結果が石器保有量の変化をそのまま反映したとは到底思われない。従ってこれだけをもって生業形態の変遷にまで言及することはできないが、縄文時代後期になると中期後半期に較べて磨石・凹石・石錐の量が断然増加する点は興味深いものがある。また本遺跡の石器類の消長についていえるのは、砥石・磨き石が堀之内式期から出現することと、19号住居址で1点のみみられた石匙は曾利Ⅲ式期以降消滅することである。

次に石器に用いられた石材を器種ごとに見ていくと(106図)、石錐は圧倒的に黒曜石が多く95%を占める。磨石・凹石は約9割が安山岩であるが、ほかに砂岩1、ホルンフェルス2、片岩1、凝灰岩3、スコリア1、花崗閃緑岩3、石英安山岩1がみられる。打製石斧は頁岩・粘板岩が7割近くを占めるほか、細粒の硬砂岩・珪質砂岩等がみられる。石棒は後期の小型のものに関しては8点中、5点の縫泥片岩を含む7点が片岩、1点が粘板岩である。大型のものは18点中安山岩17、花崗閃緑岩1と安山岩が圧倒的に多い。磨製石斧は塩基性岩が5割近くを占めるほか、砂岩・珪質頁岩・ホルンフェルス・縫泥片岩がみられる。石錐は9割以上が黒曜石である。砥石は8割が砂岩で比較的粗粒の例が多いほか、仕上げ砥ともいうべき堅緻な安山岩例も1点含まれる。他には花崗閃緑岩1、石英斑岩2がみられる。石皿は全て安山岩である。多孔石は安山岩が9割を占め、大半は多孔質のやや軟質のものである。他に石英安山岩が1点みられる。磨き石は細粒砂岩・硬質泥岩・チャートなど構成粒子が細かく硬質なものが多い。丸石は7点中安山岩5、花崗閃緑岩2である。不定形扁平石は全て安山岩である。

更に石材別に器種をみていくと(107図)、安山岩は磨石・凹石が約6割のほか、石棒・石皿・多孔石・丸石・不定形扁平石に多用される。黒曜石は石錐と石錐のみである。砂岩は打製石斧と砥石に多いが、両者の性質は前記のとおり異なったものである。頁岩は殆んどが打製石斧である。粘板岩はやはり打製石斧が殆んどで95%を占める。ホルンフェルスは打製石斧と磨製石斧に多くみられる。塩基性岩は全てが磨製石斧である。片岩は石棒が7割を占める。チャートは石錐に多い。泥岩は磨き石が7割近くを占める。花崗閃緑岩は磨石・凹石と丸石にそれぞれ2点、石棒・砥石に1点づつみられる。その他の石材に関しては殆どが磨石・凹石に含まれる。以上を整理すると、石材と器種に強い相関関係がみられるものは、安山岩—磨石・凹石・石棒・石皿・多孔石・丸石・不定形扁平石。黒曜石—石錐・石錐。砂岩—砥石。頁岩・粘板岩—打製石斧。塩基性岩—磨製石斧。片岩—石棒(小型)・チャート—石錐。泥岩—磨き石。

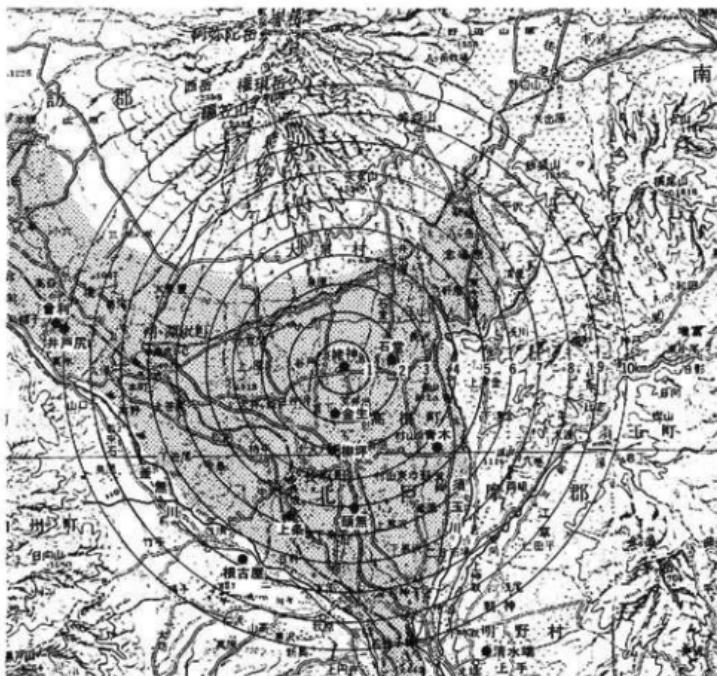
以上の結果を踏まえて姥神遺跡出土の石器の材質とその産地の可能性について述べたいと思う(108図)。まず安山岩は大半が輝石の斑晶が目立つ灰～灰褐色の輝石安山岩で、多孔質のものが多い。この輝石安山岩は、本遺跡の所在する八ヶ岳山麓及び苗崎台地には、火山放出物、熔岩及び岩屑堆積物として広域にわたり普遍的に分布している。また八ヶ岳以外にも横尾山、茅ヶ岳、水ヶ森の各火山からも入手は容易である。石英安山岩(凡例e)は、主に黒富士火山噴出物に多い。

砂岩、泥岩、チャート、頁岩、粘板岩、ホルンフェルスは主に四万十帯(凡例 i)、秩父帯(凡例 j)に産するが、本遺跡からは白州町北西部の釜無川上流域と、須玉町斑山周辺の塩川上流域が近く、釜無川、塩川、須玉川の河床礫として、或いはその沿岸の段丘礫として存在する。

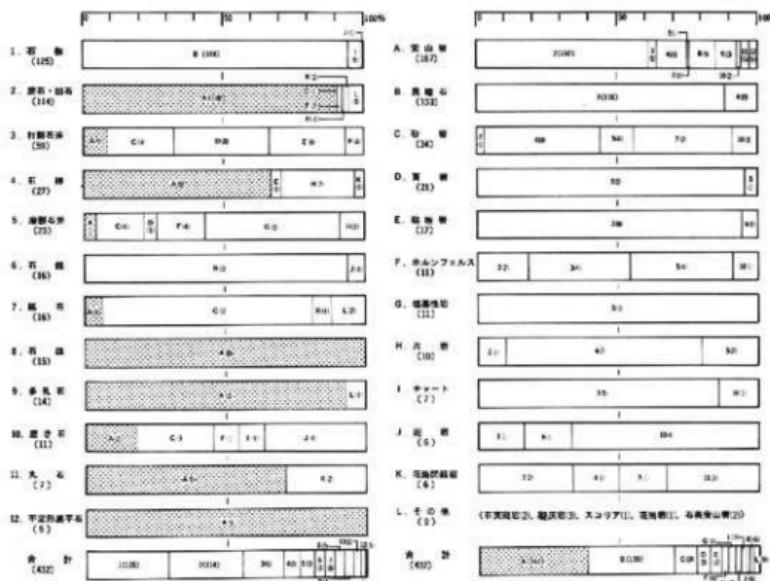
塩基性岩は、今回分析した石材中最も硬質で磨製石斧に適した石質といえる。これは三波川帯(凡例 l)中に産するほか、超苦鉄質岩類(凡例 m)産地の大半にも産すると思われる。また片岩は曹長石の斑晶が目立つ綠泥片岩と雲母片岩がみられ、産地は同じく三波川帯(凡例 l)で、茅野市南方と高崎市南方に帶状に分布するが、本遺跡からは茅野市南方の釜無川上流域、入笠山周辺が最も近い。

花崗閃綠岩は角閃石、雲母等を含むが、中でも角閃石の含有量が多量であることから花崗岩とは区別できる。この特徴は、遺跡周辺では主に駒ヶ岳東方に分布する花崗閃綠岩(凡例 f)にみられるもので、入手地は釜無川流域であった可能性が強い。

姥神遺跡は八ヶ岳南麓の輝石安山岩を主体とした地域に所在するために、各種岩石がそれぞれの石質に応じ、各種石器との強い相関関係のもとで遺跡内に搬入された経緯を理解できたと



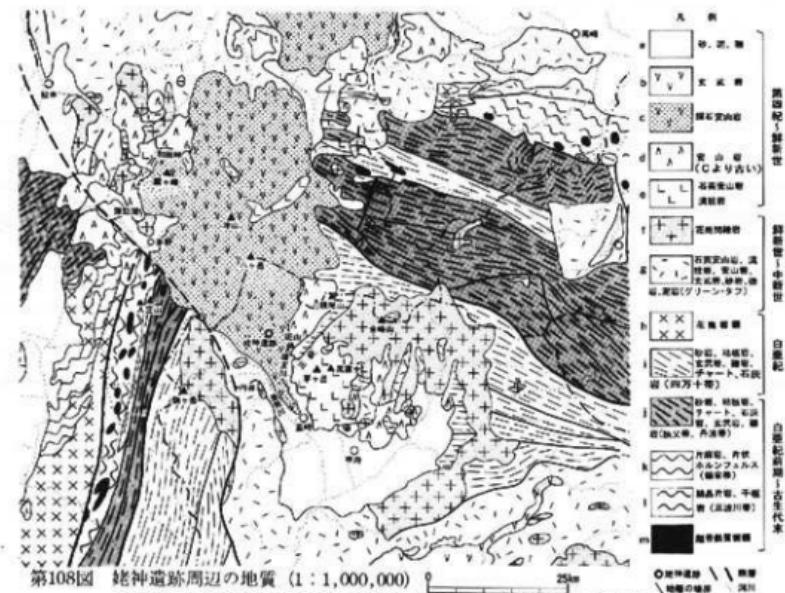
第105図 姥神遺跡からの距離(スクリーントーン部は八ヶ岳南麓台地) (1/200,000)



第106図 器種別石材の割合 ()内は個数



第107図 石材別器種の割合 ()内は個数



第108図 姥神遺跡周辺の地質 (1:1,000,000)
広川浩ほか編地質調査所発行1978(第2版)日本地質図を一部改図

思う。そこで更に考えなくてはならないのがそれらの入手経路である。各種石材の中でも交換財としての価値が高い黒曜石は、長崎元広氏の研究成果によると、産地周辺にあたる八ヶ岳南麓から松本盆地にかけて住居内に原石が貯蔵された例が集中するが、中でも産地に最も近い諏訪湖盆地では屋内貯蔵例が4件に対し、屋外貯蔵例は14件を数える。屋外貯蔵例は、共同体として保有していた交換財と推定されることから、屋外貯蔵を有する集落は原石の採取集団であったと考えられる。それに対して屋内貯蔵例のみの集落はその外郭部に位置することから、山梨や関東地方等への消費集団へ供給する役割を果した仲介集団といえよう。従って共同体間に高度に確立された黒曜石搬出経路が存在していたと解釈できるが、屋内貯蔵集団から搬出された後、どういうルートを経て、またどういう交易形態によって遠距離まで運搬されたのは明らかではない。その他の石材となると、仮りに住居内外に貯蔵例をもつものが搬出経路の確立した交換財であるとするならば、現段階では姥神遺跡周辺には例を知らないことから、かなり自由に直接的な採取活動が認められていたといえる。そうすると姥神遺跡の集団は八ヶ岳の台地上に限らず、比高差約450mの釜無川や須玉川、塩川周辺を含めた、少なくとも半径7km以上の広範な活動圏を保有していたと考えられる(第105図)。これが石材採取活動以外の生業活動についてもいえることならば、今日の領域論に一石を投すことになろうが、大半の石器類は集団、又は個人の移動(集落の移動、婚姻に伴う女性の移動等)に伴うことを考慮すべきであるから、簡単には結論づけることはできそうもない。中でも、多量かつ容易に採取が可能な安山岩等と異なり、河川で良材を見つけだすことが困難な塩基性岩と緑色片岩は、遺跡内に未製品、剝片、チップを全く遺存しないことから製品の形で搬入されたと思われるが、黒曜石のように確立された搬出経路を経て入手したのか、或いは産地の露頭周辺へわざわざ山向いて製作・入手したものなのか、それとも全く別の形態によって運ばれたものなのかは不明といわざるを得ない。

今後は遺構内外から出土する石材の剝片、チップ等にも十分分配慮しながら調査を進めたうえで、製品との量的比較等を行うことによって搬入形態、或いは製品化への過程を具体化できると思われる。

2 第3群土器の編年的位置づけについて(予察)

第VI章の1項で、縄文時代後期中葉の土器群を第3群土器群第1類~23類土器に分類したが、これらの編年的位置づけについて述べてみたい。

この第3群土器は、おおよそ加曾利B1式~曾谷式(高井東式、以下同じ)に相当する。殆どの資料は関東西部地域の土器群と大差がないため、安孫子氏編年によってその変遷をほぼ把握することができるが、地域色が濃く表われるといわれる加曾利B3~曾谷式期に関しては関東西部の編年をそのまま援用するわけにはいかない。そこで安孫子氏をはじめとする各氏の編年観を理解したうえで、安孫子氏のいう「加曾利B式を通して変遷系統の標識となる……3單

器 形	突 起 形 態	突起下の文様	口縁部文様帯	脇部文様帯	良 好 な 資 料
加曾利B1式	括れなし	立体耳状	逆「の」字文 三角文 ↓ 蛙頭文	肩部縄文帯	横 帯 文
加曾利B2式	脇部括れ● 口縁開化●	立体対称 凸 状 平板凸状	川、川状文 ↓ 肩部列点文●	弧線文・入組文● ↓ 縄文消失●	清水端遺跡2号住 寿能遺跡第6地区の一部 高井東遺跡6・14・22号住の一部 寿能遺跡第10・12地区の一部 高井東遺跡7・22号住の一部 寿能遺跡第5地区の一部
加曾利B3式		推 指 状	↓ ↓	縄文帯 ↓ 羽状沈線文●	高井東遺跡27号住の一部 高井東遺跡15、16号住の一部
曾谷式	口縁内折●	(+)		縄文帯、数条の沈線、人頭文等 状點付文	なすな原156住 等

第109図 突起をもつ平口縁の深鉢形土器の変遷 ●は指標とする特徴

位の把手を有する精製深鉢の系統について、主に関東西部各地の住居址等の資料をもとに曾谷式を含めてまとめてみたのが第109図である。

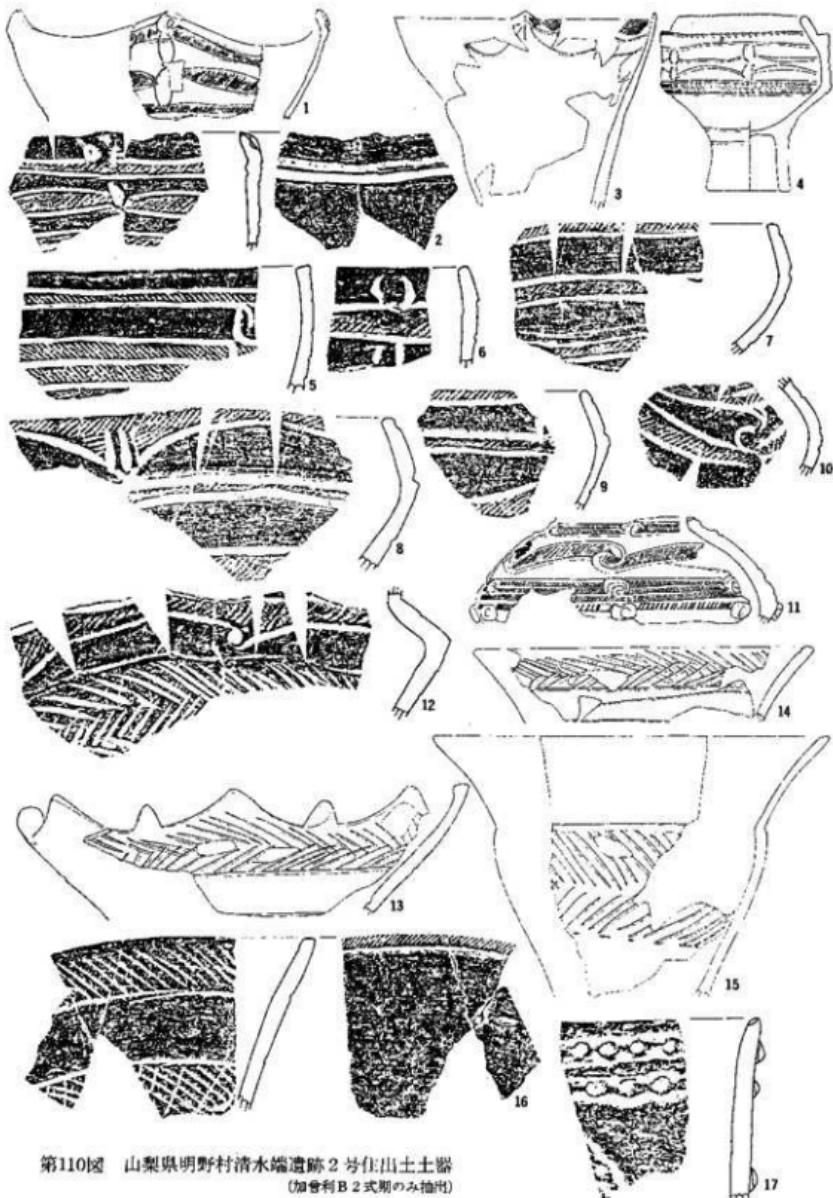
まず加曾利B1式期は、脇部に括れがなくほぼ直立する器形で、主に縄文を充填した横帶文をもつことによって特徴づけられる。安孫子氏はこれを2段階に分け、前段階を逆「の」の字や三角形が描かれ、内面の沈線文帯が発達するもの。後段階を頬部（本文では肩部とした）に縄文帯が発生、内面装飾帯が1段の段差に変化、逆「の」の字が川の字形になるものとしている。本段階以降についてもいえることであるが、安孫子氏は典型資料を1例あげてその特徴を多方面から説明しているため、なにをもってその段階とするのかが不明確な場合がある。ここでも確かに各細部は明らかに変化を遂げるか、後段階の3つの条件を全て備えた例は少ないとえ、内面が無文の例、2条の沈線をもつ例が少なからず存在すること、川の字形の文様をもつ例は殆んどなく、むしろ加曾利B2式期にかけて普遍化する対弧文(I)、垂線抱き対弧文(II)がみられること（川の字に近いのは加曾利B2～B3式に見られる）から1段階を区分することは難しいのではないだろうか。ただ肩部縄文帯の発生をもって新段階を設定することは可能かもしれない。なお本遺跡6号住例は該期の良好な資料である。

次に加曾利B2式期は脇部の括れと、弧線文の発生を見る時期といえる。安孫子氏は更に3細分し、前段階は弧線文、(I)状の区切り(対弧文)、入組文の発生、中段階は頬部の刻み目帯(肩部列点文)の発生、後段階は口縁形態、底径の変化との内面装飾の復活、区画内の素文化を

挙げた。このうち前段階の対弧文の発生については先に述べたとおりであるが、ほかの点についてはほぼ容認できる。ここでは前段階を胴部括れと弧線文の発生（両者はほぼ同時期に発生する）、中段階を肩部列点文の発生、後段階を口縁開化と胴部縄文の消滅にあるとして、安孫子氏と同じく3細分を試みた。またこのほかにも突起等に明らかな変化がみられるが、その変化が各段階にうまく合致するとはいえないため特に取り上げないことにする。前段階に清水端遺跡2号住(110)[図]寿能遺跡第6地区の一部中段階に高井東遺跡6・14・22号住の一部、寿能10・12地区の一部、後段階に高井東遺跡7・22号住の一部、寿能遺跡第5地区の一部が該当する。

加曾利B3式期は胴部（体部）全体に羽状沈線文を施す時期である。安孫子氏はこの時期を3細分し、前段階は矢羽根状文（羽状縄文）の発生、把手の平板化、内面の平行沈線化、単位数の変化、中段階は把手（突起）の消失、内面沈線の消失、縄文帯の発生、後段階は刻み目帯（列点文）消失を挙げている。この時期は資料が少ないうえ、良好な一括資料に恵まれていないため漠然と捉えるほかはないが、加曾利B2式期中段階以来の肩部列点文の残存→消滅、口縁部における縄文帯の発生（浅鉢、鉢からの影響と思われる）の2つの大きな変化を認めることができそうである。この過程を、刻み目帯（肩部列点文）残存段階→縄文帯と刻み目帯併用段階→縄文帯のみの段階と捉えて安孫子氏は3細分したと思われるが、口縁部縄文帯の発生期をいつにおくかが現段階では明確でないことと、中段階に相当する資料が極めて少ないうえ、類似資料の多くは口縁部のみの破片ばかりで全体形をつかめるものはないことから、段階設定するのには慎重を期した方がよいと思われる。本遺跡では縄文帯と列点文を併用する深鉢形土器が検出されていないため、ここでは肩部列点文が消失する時期をもって前段階と後段階の細分に留めた。前段階に高井東遺跡27号住の一部、後段階に高井東遺跡15・16住の一部をあげておく。なお、本遺跡の縄文帯をもつ土器群（第10類b、d種）は、8の字状突起が変化したと思われる拇指状突起（先端に円形の窪み、その下に縫のナデをもつ拇指状の突起）を有する。この類例は茅野市判ノ木山西遺跡にみられるが、現段階では数少ない。安孫子氏が加曾利B3式期の中段階の特徴として述べているように関東西部地域では把手を消失する傾向にあるため、この突起をもつ深鉢形土器群を中部高地の独自性として捉えることも可能であろう。

続く曾谷式期は、安孫子氏によれば口縁内折、2条の沈線文とボタン状貼付けが特徴とされる。そして加曾利B3式以降の地域差をほぼ継承するといわれるが、本遺跡では口縁部沈線の多角化傾向（2～5本）と、沈線の変質（ナデを加えたもの、沈線幅の広いもの）を認めることができた（第15・16類）。ただ地域差を色濃く反映した例は、平口縁の深鉢形土器群よりも波状口縁の深鉢形土器群に顕著に表われるようである。なお突起の退化、貼付文の発生に伴い、平行沈線の弧線化、隆線文の発生等がみられる過程については、既に先学によって数段階の細分が試みられているが、ここでは細分の可能性を指摘するに留める。本遺跡からは隆起帶縄文をもつ安行式期の土器片は皆無であることから、口縁が内折した土器群はおおよそ安行式期直前の時期と考えてよいのではないだろうか。



第110図 山梨県明野村清水端遺跡 2号住出土土器
(加曾利B2式期のみ抽出)

ここまで平口縁の深鉢形土器について流れを追ったが、他の器種についても同様な視点から段階設定が可能である。まず鉢形土器は1式期一深鉢形上器と同じ、2式期前段階一連弧文の発生（深鉢形土器の弧線文の発生と関係が深い）中段階一肩部列点文発生、後段階一肩部繩文消失、3式期前段階一肩部文様消失、後段階一列点文消失。この中で、口縁部繩文帯は深鉢形土器の場合より古く発生するらしく、2式期前段階に既に見い出しができる。そろばん玉状肩部の鉢形土器は、2式期前段階より出現するが、くの字に屈折した部分は深鉢形、鉢形土器肩部の繩文帯→列点文→消失という過程をほぼ踏襲すると思われるところから、2式期前段階一肩部繩文（又は無文）帯、2式期中段階～3式期前段階一肩部列点文、3式期後段階一列点文消失と考えられる。なお2式期中段階～3式期前段階間の細分については、指標とすべき特徴を見いだすことはできなかった。波状、平口縁の羽状沈線文土器は、清水端遺跡2号住例から2式期前段階より出現するが、その後の変遷については判然としない。ただ、3式期前段階から口縁部に数条の沈線を施し、その部分を繩文帯とする傾向がみられる。曾谷式期になると波状口縁の波頂部が扁状把手へと変化する。

以上から本遺跡の類型化した第3群土器の時期比定をしておく。加曾利B1式期一第1類、2類、3類、4類、加曾利B2式期前段階一第5類、6類、7類、8類（100は3式期か）、9類9種（後段階を含む可能性がある）、中段階一第9類b種、後段階一なし、加曾利B3式期前段階一第10類a種、14類j種、後段階一第10類b～e種（112、116は曾谷式）、14類e種、曾谷式期一第10類b種（112、116）、13類、15類、14類h種、16類、22類。そのほか第12類は加曾利B3式期と思われる。

本稿は、加曾利B式期の住居址資料から段階設定の指標を想定し編年を予察したものであるが、終始、安孫子氏編年に追随、或いは批判する結果となったことを反省したい。現段階では住居址の良好な一括資料の提示が極めて少ないが、今後の資料増加に伴って説得力ある編年の構築が可能となろう。

■引用・参考文献■

- (1) 山内清男 1939『日本先史土器図譜』先史考古学会
- (2) 安孫子昭二ほか 1971『平尾遺跡調査報告I』東京都住宅供給公社・南多摩郡平尾遺跡調査会
- (3) 永峯光一ほか 1972『M地点』鶴川遺跡群
- (4) 市川修ほか 1974『高井東遺跡』埼玉県教育委員会
- (5) 百瀬兵秀ほか 1975『十二ノ后遺跡』長野県中央道理歴史文化財包蔵地発掘調査報告書一諏訪市その4-1』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
- (6) 鈴木保彦ほか 1977『下北原遺跡』神奈川県教育委員会
- (7) 新津健ほか 1978『八租遺跡』八租遺跡調査団
- (8) 新津健 1980『山梨県金生遺跡』『日本考古学年報』33 日本考古学協会
- (9) 鈴木正博 1980『曾谷式研究序説』『古代探査』早稲田大学出版部
- (10) 安孫子昭二 1981『関東・中部地方』『縄文土器大成3-後期』講談社
- (11) 奈良泰史 1981『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会

- (2) 小島俊彰 1983 「有孔球状土製品」「縄文文化の研究9 縄文人の精神文化」 雄山閣出版
- (3) 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器研究(1)——最近の成果の検討と新たなる分析一」 東京大学文学部考古学研究室研究紀要2 東京大学
- (4) 宮下健司 1983 「有溝砥石」「縄文文化の研究7 備具と技術」 雄山閣出版
- (5) 成田勝範ほか 1984 「なすな原遺跡」 なすな原遺跡調査会
- (6) 長崎元広 1984 「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学III』 長野県考古学会
- (7) 大塚達朗ほか 1984 「赤龍泥炭層遺跡発掘調査報告書——人工遺物・総括編—」 埼玉県教育委員会
- (8) 百瀬長秀 1984 「羽状の沈没文をもつ土器の系統と振幅」 長野県考古学会誌 44 長野県考古学会
- (9) 渡辺誠 1985 「約子形土製品の研究」 日高見国一葉池脇治郎学連成記念論集 北上市
- (10) 摂稿 1985 「東雄神B遺跡」 山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会
- (11) " 1986 「豆生田第3遺跡」 山梨県大泉村教育委員会・岐北土地改良事務所
- (12) " 1986 「大泉村蛭神遺跡出土の唐草文土器について」 丘陵 第12号 千葉丘陵考古学研究会
- (13) 平野修 1986 「根吉屋遺跡」 白州町教育委員会
- (14) 南宮正樹 1986 「西ノ原遺跡・石堂遺跡」 高根町教育委員会・岐北土地改良事務所
- (15) 宮沢公雄 1986 「清水塩遺跡」 明野村教育委員会・岐北土地改良事務所
- (16) 米田明訓 1986 「柳坪遺跡」 山梨県教育委員会・日本道路公团
- (17) 安孫子昭二 1986 「余山貝塚の土器」『余山貝塚資料図鑑』國學院大學考古学資料館
- (18) 木木謙 1987 「縄文時代集落の複雑性(II) — 縄文中期八ヶ岳山麓の石器集成より—」 山梨県考古学協会誌 別刊号 山梨県考古学協会

【付】 炭化材同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は1点で、縄文時代後期のものとされる7号住居址から検出されたものである。出土状況などの詳細は不明である。

2 方法

試料を乾燥させたのち、木口・征目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版14)も作成した。

3 結果

試料はクリ(*Castanea crenata*)と同定された。主な解剖学的特徴は次のようなものである。

環孔材で孔圈部は3~4列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では梢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った梢円形~多角形、ともに管壁は薄い。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状~網目状となる。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリはブナ科の落葉高木で、北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また各地で植栽される。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、橋木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタシニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

第2表

石器一覧表

長軸は最大長軸。短軸は最大短軸。厚さは最大短軸部での厚さ。

単位は cm および g。() 内は現存値。

石材の略は次のとおり。

ob-obidian 黒曜岩 di-diorite 四輝岩 br-basic rocks 基性岩類

ch-chert チート tf-tuff 鹿灰岩 qp-quartz porphyry 石英斑岩

ms-mudstone 泥灰岩 dn-dacite 石英安山岩 ad-andesite 安山岩

gr-granite rocks 花崗岩類 ss-sedatoes 砂岩

gt-green-tuff 特色斑岩 lf-hornfels ホルンフェルス sl-slates 板岩

sc-schist 片岩 sh-shale 真岩 sr-scoris スコリア

2 磨石・磨石 (114)

No.	長 軸	短 軸	厚 さ	石材	重 量	調 考	同番号
1	住	16.1	8.6	5.6	ad	732	7-4
2	"	6.7	6.6	4.0	ad	361	7-5
3	4 住	11.0	7.1	4.1	ad	502	11-13
4	5 住	11.1	7.9	6.0	ad	500	14-24
5	"	11.2	8.7	7.5	ad	725	-25
6	"	15.1	7.5	5.5	ad	(808)	-26
7	"	9.7	7.4	4.9	ad	431	-27
8	6 住	8.4	8.15	5.7	ad	601	17-23
9	"	9.9	8.4	5.3	ad	583	-24
10	7 住	9.4	5.5	4.2	ad	389	22-84
11	"	9.5	5.8	5.4	ad	783	-65
12	"	8.1	6.7	4.9	ad	539	-66
13	"	8.9	8.1	4.3	ad	477	-67
14	8 住	7.1	6.6	4.6	ad	342	25-25
15	"	9.2	7.5	5.8	ad	626	-26
16	"	9.5	5.5	3.9	ad	303	-27
17	"	9.6	7.6	5.5	ad	420	-28
18	9 住	10.8	7.3	5.4	ad	586	29-28
19	"	12.3	6.3	5.1	ad	532	-29
20	10 住	14.0	10.3	6.5	ad	1320	31-33
21	"	10.8	7.0	4.3	di	559	-34
22	"	7.8	7.7	5.4	ad	442	-35
23	"	10.4	9.0	4.8	ad	587	-36
24	12 住	9.6	7.6	6.6	ad	762	35-16
25	"	8.6	8.0	4.1	ad	469	-19
26	13 住	10.8	10.1	5.8	ad	886	37-8
27	15 住	8.6	7.6	6.3	ad	567	多孔質 41-14
28	"	(9.0)	8.0	4.0	gt	(440)	-15
29	"	7.1	6.9	4.7	ad	366	-16
30	16 住	10.4	8.0	4.8	tf	497	44-15
31	"	9.5	7.7	5.2	ad	548	-16
32	"	8.5	6.7	5.3	ad	339	-17
33	"	11.7	7.1	5.2	ad	517	-18
34	"	14.7	7.2	5.2	ad	931	-19
35	"	14.9	8.0	4.1	ad	763	20
36	17 住	13.1	9.7	6.5	ad	1168	46-9
37	"	9.9	7.1	5.5	ad	499	-16
38	19 住	11.0	6.0	5.4	ad	516	-18
39	"	11.0	7.5	5.7	ad	519	-19
40	"	10.0	7.7	4.8	ad	730	-20
41	"	(8.5)	7.5	4.5	gr	(445)	-21
42	21 住	11.2	9.3	6.5	ad	882	56-25
43	"	9.2	7.8	5.3	ad	555	-26
44	"	10.2	7.7	5.5	ad	548	-27
45	E 9	6.5	5.8	3.6	di	206	無孔
46	G 17	9.4	5.9	5.0	ad	374	-2
47	H 5	9.9	6.2	4.5	ad	411	-3
48	K 7	11.0	9.0	3.8	ad	622	-4
49	H 5	8.4	6.5	4.0	ad	270	-5
50	J 11	7.9	6.3	5.0	ad	385	-6
51	K 11	9.4	7.2	4.9	ad	527	-7
52	K 11	12.8	7.6	4.2	ad	800	-8
53	J 6	13.3	7.5	4.0	ad	483	多孔質 9
54	J 13	14.0	7.5	3.1	ad	556	-10
55	H 6	14.4	7.4	3.7	ad	604	-11
56	K 7	11.1	8.6	5.4	ad	542	-12
57	K 11	7.9	7.6	5.5	ad	477	-13
58	K 9	(7.0)	10.5	5.8	mm	(605)	-14
59	K 11	12.0	9.3	6.0	ad	1130	無孔
60	L 8	12.3	7.6	5.2	ad	423	-16
61	M 14	11.1	8.4	6.1	ad	905	-17
62	K 12	12.5	8.1	3.1	ad	497	-18
63	L 12	12.0	7.0	4.4	ad	500	-19
64	表 摺	10.3	7.0	4.0	ad	450	-20
65	表 摺	8.8	6.8	3.5	ad	324	-21
66	表 摺	8.7	7.9	8.0	ad	790	無孔
67	表 摺	10.1	8.9	5.4	ad	902	-22

3. 打削石斧 (59)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 5 住	9.9	3.0	2.0	sh	(94)	14-18		
2 -	(11.0)	7.0	2.9	sc	(384)	硬砂	-19	
3 7 住	15.3	6.0	2.0	ss	256	硬砂	22-53	
4 -	(10.6)	6.7	1.6	ss	(168)	-54		
5 8 住	(8.6)	4.6	1.8	sh	(114)	25-29		
6 9 住	(5.9)	2.9	1.3	sh	(33)	29-35		
7 15 住	(6.7)	5.4	1.4	ss	(92)	硬砂	41-18	
8 19 住	(5.7)	4.4	1.5	ad	(56)	51-25		
9 -	(6.1)	5.4	1.7	hf	(86)	-26		
10 21 住	(6.7)	3.4	1.3	sh	(52)	56-32		
11 -	(6.3)	4.0	1.5	sh	(61)	-33		
12 表 面	(8.8)	5.7	1.7	ad	(38)	85-1		
13 -	(10.9)	4.6	2.1	sl	(86)	2		
14 L 17	12.3	4.8	1.2	ss	(31)	-3		
15 D 11	9.1	3.7	1.4	sl	(93)	-4		
16 T 5	(9.3)	4.0	1.7	ad	(92)	-5		
17 K 6	10.4	2.8	1.8	sh	(85)	-6		
18 G 6	9.9	3.2	1.8	sh	109	hf化	-7	
19 表 H 8.7	8.7	1.7	1.4	sh	44	石灰質	-8	
20 H 16	(8.7)	3.1	1.6	ss	(63)	-9		
21 K 7	10.3	3.3	1.6	ad	(107)	-10		
22 L 17	8.4	2.6	1.2	sh	(55)	-11		
23 E 11	12.3	3.4	1.8	sh	(144)	-12		
24 C 10	14.3	4.7	1.9	sh	(96)	石灰質	-13	
25 H 6	11.3	4.9	2.0	st	(183)	-14		
26 D 11	14.9	5.6	3.7	sh	(550)	-15		
27 E 10	(8.9)	5.5	2.3	ss	(154)	-16		
28 G 17	(9.5)	5.2	2.7	sh	(260)	-17		
29 J 5	(6.9)	5.1	1.4	ad	(87)	-18		

4. 石 剣 (26)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 7 住	(15.5)	3.0	3.0	sc	(277)	細粒	22-59	
2 -	31.6	15.0	13.6	ad	9700	-60		
3 -	34.3	13.8	9.8	ad	8300	-61		
4 -	26.2	10.0	8.5	ad	3500	-62		
5 9 住	(15.3)	11.0	11.0	ad	(2405)	29-32		
6 11 住	30.0	(18.0)	18.0	ad	(10400)	32-9		
7 15 住	11.2	11.0	11.0	ad	1911	多孔質	41-17	
8 17 住	(15.0)	14.5	(6.5)	ad	(1876)	多孔質	46-11	
9 19-21住	(20.5)	12.0	12.0	ad	(2783)	51-23		
10 12 土	(23.5)	18.0	(13.0)	ad	(6700)	56-4		
11 30 土	55.9	15.7	10.5	di	13600	56-1		
12 C 8	(13.8)	5.4	5.2	sd	(557)	綠泥	90-1	
13 H 7	(10.2)	3.6	(2.1)	sl	(92)	-2		
14 K 7	(9.1)	2.0	2.0	sc	(57)	綠泥	-3	
15 J 6	(8.5)	2.3	2.2	sc	(81)	-4		
16 L 5	(23.6)	5.0	4.5	sc	(945)	綠泥	-5	
17 M 13	(50.7)	(16.0)	10.5	ad	(11600)	96-3		
18 H 11	(19.0)	17.0	(10.5)	ad	(6000)	-6		
19 J 7	(34.0)	12.5	12.5	ad	(5800)	-7		
20 K 6	35.0	14.3	9.5	ad	21300	-8		
21 K 12	(14.0)	9.5	9.0	ad	(4100)	-9		

5. 打削石斧 (23)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 5 住	5.9	3.3	1.3	br	(43.5)	14-20		
2 7 住	(5.6)	(4.9)	1.8	br	(76.3)	22-65		
3 -	(5.2)	2.6	1.0	br	(24.0)	-66		
4 -	(9.0)	3.8	1.9	ss	(14.5)	-67		
5 8 住	(10.2)	5.1	(3.2)	ss	(303)	25-30		
6 16 住	(11.0)	4.2	3.7	hf	(298)	44-21		
7 19 住	(5.6)	3.0	1.1	br	(49)	51-24		
8 21 住	5.2	3.1	1.1	br	30.9	56-34		
9 K 12	(4.0)	2.5	0.85	br	(15.6)	59-20		
10 D 10	(2.4)	2.0	0.8	br	(6.2)	-21		
11 J 14	(5.4)	1.5	0.9	ss	(16.0)	-22		
12 D 10	6.6	3.7	1.5	hf	66.3	-23		
13 表 H 5.9	5.2	2.3	sc	(191.3)	綠泥片岩	-24		
14 H 8	(4.6)	4.3	1.3	br	(48.1)	-25		
15 K 14	6.2	3.5	1.2	sc	53.3	-26		
16 L 17	(5.9)	4.1	1.7	sh	(71.6)	硬質	-27	
17 D 7	(4.8)	3.5	1.3	br	(39.1)	-28		
18 L 12	(4.6)	(4.2)	2.7	hf	(101.4)	海利田	-29	

6. 石 剣 (16)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 4 住	3.1	0.7	0.5	ob	1.25			11-12
2 8 住	2.6	1.5	0.6	ob	1.12			25-24
3 9 住	3.4	1.0	0.9	ob	2.47			29-34
4 12 住	3.3	1.2	0.6	ob	1.91			35-17
5 19 住	2.9	0.7	0.7	ob	1.27			51-17
6 表 振	3.0	2.5	0.9	ms	4.80			87-18
7 C 7	3.15	1.4	1.1	ob	2.37			-19
8 C 7	3.85	0.8	0.6	ob	2.40			-20
9 K-28	2.8	1.4	0.4	ob	1.43			-21

7. 破 石 (16)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 9 住	3.2	2.5	1.3	sc	(10.7)	25-30		
2 C 7	(5.2)	3.8	1.0	ss	(29.0)	91-1		
3 C 8	7.4	3.4	1.4	sc	(40.1)	-2		
4 D 8	(3.7)	4.4	1.7	ss	(35.4)	-3		
5 H 7	(6.7)	3.9	1.0	ss	(36.6)	-4		
6 H 7	(6.5)	(3.0)	2.3	ss	(579.0)	花崗岩質	5	
7 H 7	(5.2)	2.2	1.1	ss	(17.1)	花崗岩質	-6	
8 I 1	(4.2)	(5.7)	1.9	ss	(36.4)	花崗岩質	-7	
9 I 1	(4.0)	3.7	2.2	qp	(81.1)	花崗岩質	-8	
10 J 6	(4.7)	1.9	1.4	ss	(19.0)	-9		
11 J 6	(6.6)	3.5	2.5	qp	(81.2)	花崗岩質	-10	
12 J 7	5.8	5.3	1.3	ss	(37.2)	-11		
13 K 6	(5.1)	(3.3)	1.6	ad	(33.0)	-12		
14 L 14	(7.4)	2.9	2.8	ss	(59.6)	13		
15 表 振	(3.9)	(14.0)	3.5	ss	(180.7)	14		
16 表 振	15.0	12.0	7.0	di	(1797.7)	15		

8. 石 剑 (15)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 6 住	18.0	21.5	5.8	ad	(3174)	17-30		
2 7 住	(16.0)	(12.5)	2.9	ad	(1136)	22-70		
3 30 土	(12.5)	27.5	4.0	ad	(2472)	66-2		
4 30 土	(12.5)	27.5	4.0	ad	(2046)	68-1		
5 J 11	(34.5)	(33.0)	10.5	ad	(1178)	92-1		
6 L 12	(25.0)	23.5	5.5	ad	(6200)	-2		
7 表 振	(11.0)	(11.0)	5.0	ad	(591)	-3		
8 表 振	(17.0)	27.5	4.7	ad	(6200)	-4		
9 表 振	29.5	23.0	9.5	ad	10100	花崗	-5	
10 表 振	32.0	22.7	6.0	ad	7100	光輝	-6	

9. 多 孔 石 (14)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 5 住	16.0	12.0	7.2	ad	1500	14-28		
2 7 表	18.0	11.0	5.7	ds	(79.0)	細粒砂、礫	22-58	
3 10 住	5.7	2.8	2.8	ms	77.7	破質	31-31	
4 *	4.7	2.9	1.5	ms	31.5	破質	-32	

11. 丸 石 (7)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 7 住	16.5	16.5	ad	(4700)	確定 6-17	22-68		
2 12 住	13.1	41	36	ad	7300	95-2		
3 K 12	21	20.5	ad	8200	-4			
4 表 振	(8.5)	(4.0)	di	(632)	-5			

12. 不定形圓平石 (5)

No	長 幅	短 幅	厚 さ	石材	重 量	面 積	備 考	固番号
1 15 住	32.8	21.7	15.0	ad	15700	41-19		
2 14 土	31.0	20.5	10.5	ad	8200	60-5		
3 M 18	(24.5)	29.0	11.5	ad	(12200)	90-1		

図版 1



1 遺跡全景
(中央盛り土付近)



2 7~9号
住居址付近
(北から)

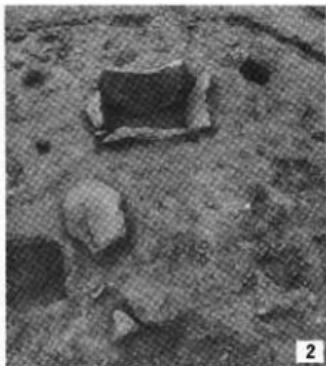


3 16~21号
住居址付近
(西から)

図版 2



1



2



4



3

1 1号住居址(南西より) 2 2号住居址(東より)
3 4・11号住居址(南より) 4 11号住居址の埋甕と立石
5 5号住居址(南より) 6 5号住居址 旧炉体土器

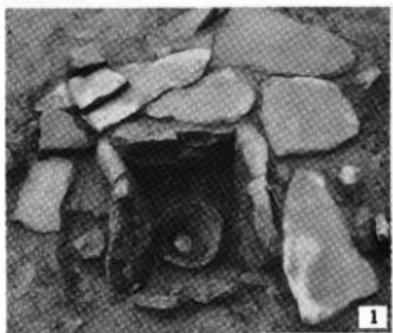


6



5

図版 3



1 5号住居址炉

2 5号住居址出土
状況

3 6号住居址
(南から)

4 7号住居址
(南から)



图版 4



1 7号住居址 新・旧炉址



2 7号住居址 人口部配石(南より)

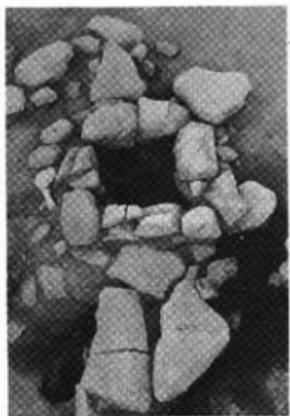


3 8・10号住
居址(南より)



4 8・9号住居址
(南より)

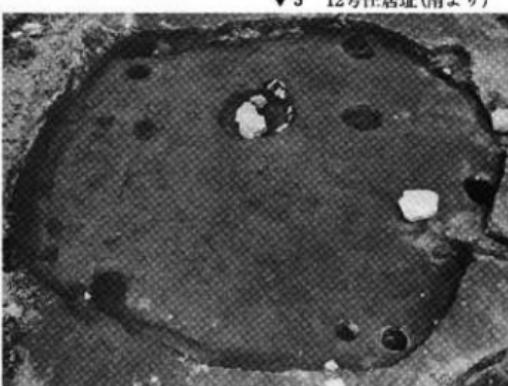
図版 5



▲1 9号住居址 炉址
(南より)



▲2 10号住居址 炉址(南より)



▼3 12号住居址(南より)



▲4 12号住居址 炉址
(南より)



5 13号住居址(南より)

図版 6



- 1 15号住居址(南より)►
2 15号住居址 炉址▲
3 16号住居址(南より)►
4 16号住居址 鈎手土器出土状況▼



5 17号住居址
(南より)

6 17号住居址
炉址



図版 7

1 18号住居址(南から)



2 19号住居址
(北から)



3 20・21号住居
址(南から)



図版 8

1 3号土壤
(西より)

2 1号集石

3 M13グリップ
ド付近集石

4 2号集石



1



2

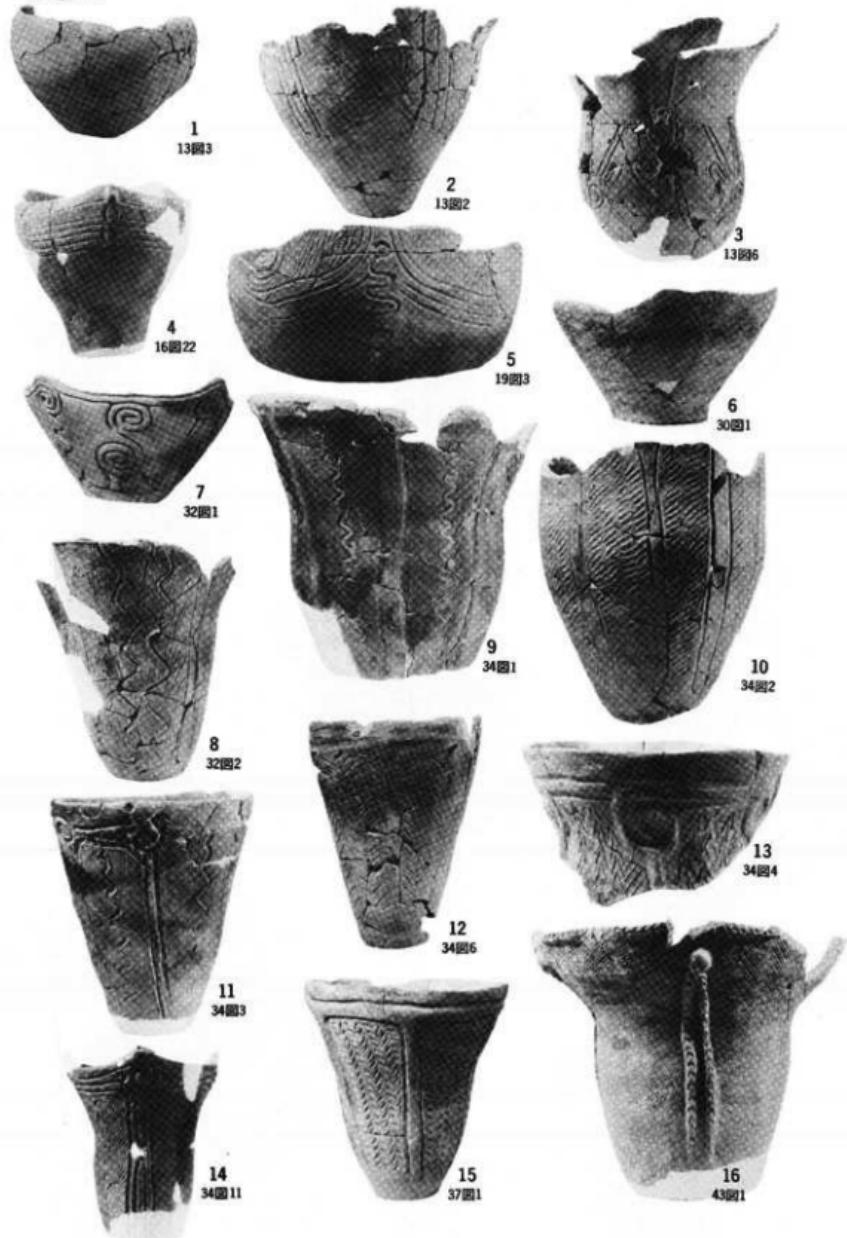


3



4

図版 9



図版 10

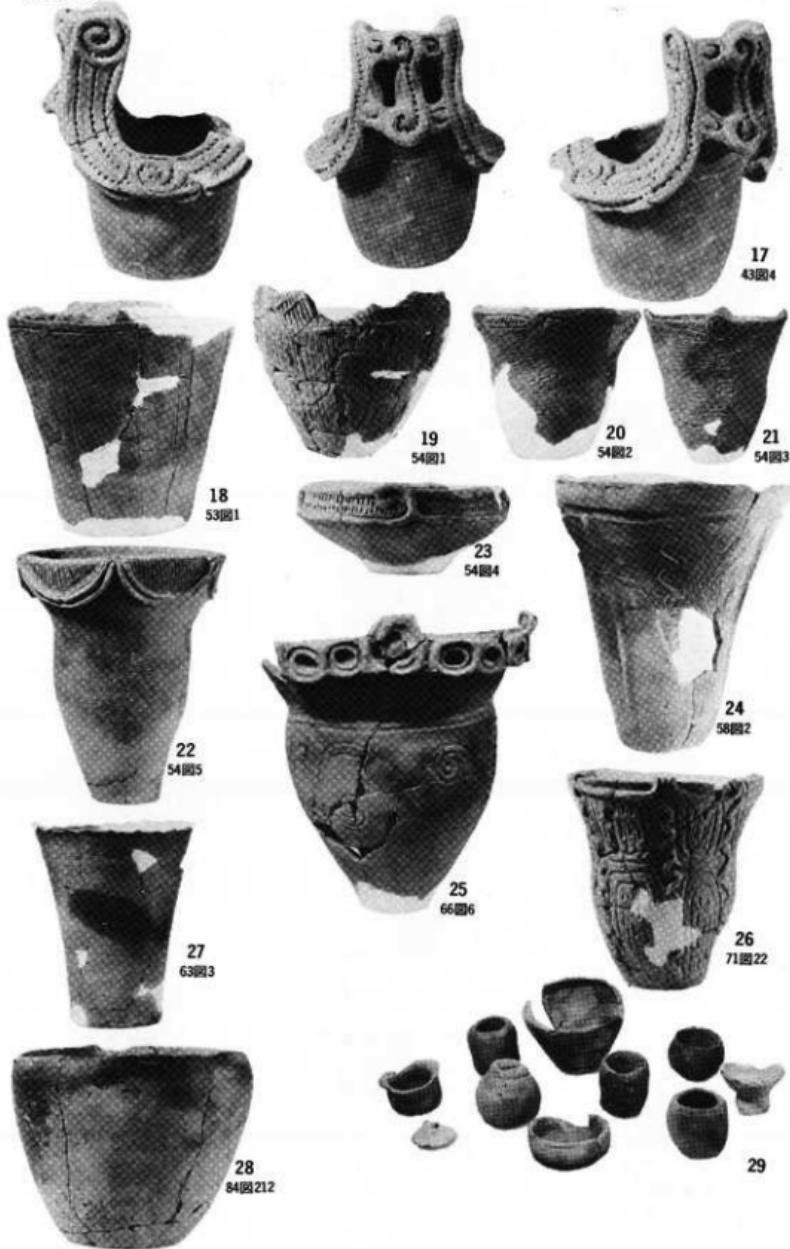
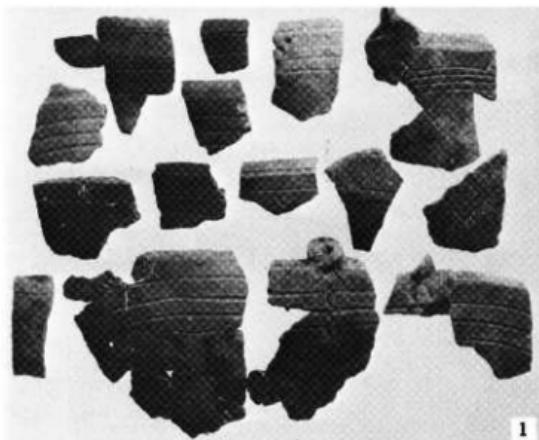
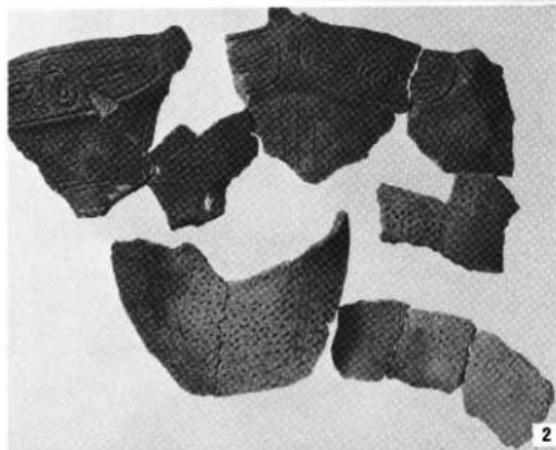


图 版 11

- 1 6号住居址
出土土器
- 2 21号住居址 17
- 3 21号住居址 18
- 4 遗構外出土土器
(唐草文土器)
- 5 遗構外出土土器



1



2



3

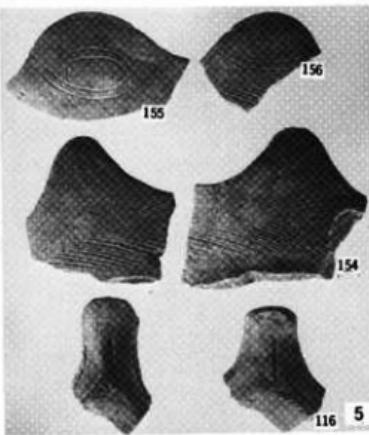


25

27

4

26



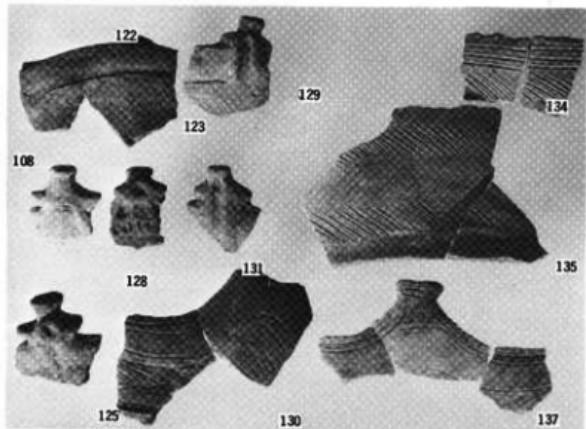
155

154

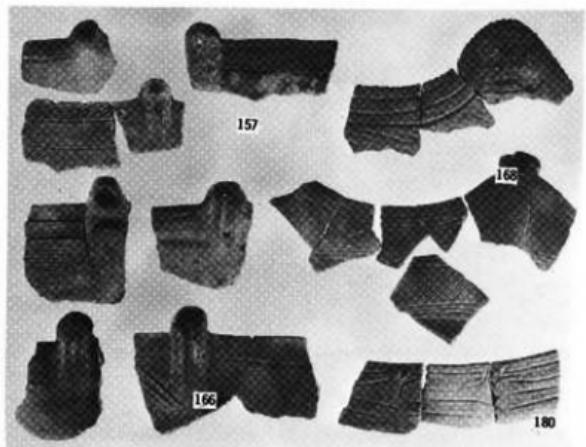
5

図版 12

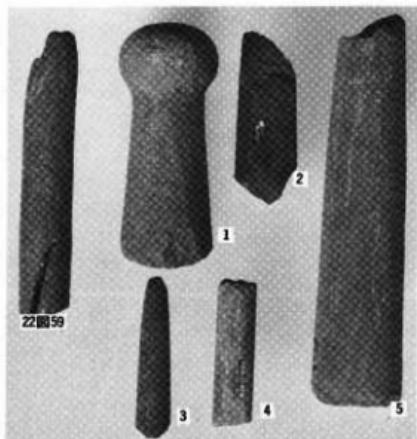
1 遺構外出土土器



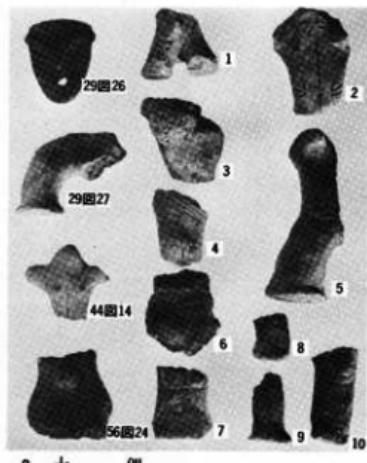
2 遺構外出土土器



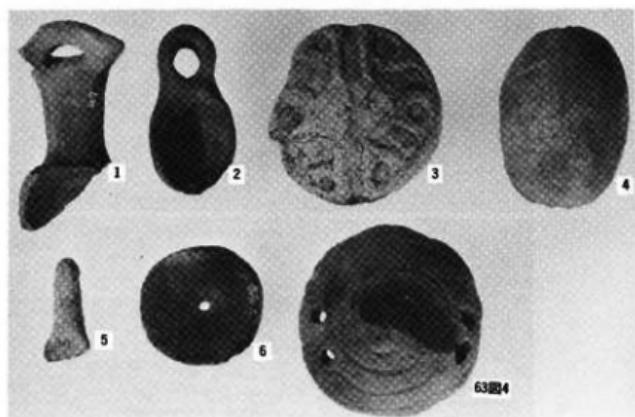
図版 13



1 石 棒



2 土 偶

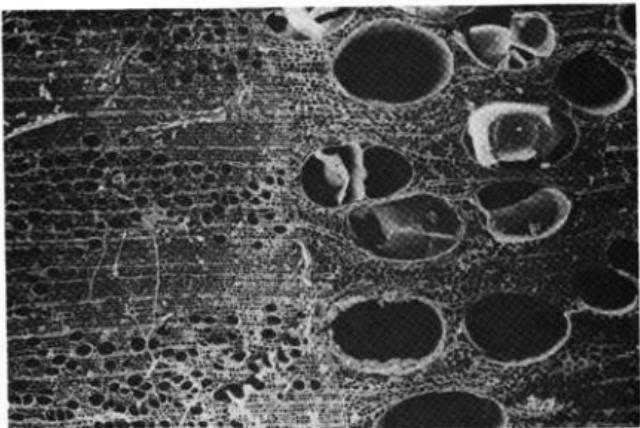


3 土 製 品

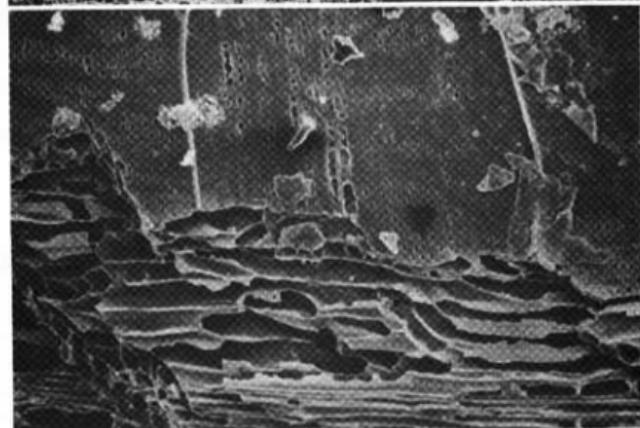
図版 14

7号住居址 クリ
(*Castanea crenata*)

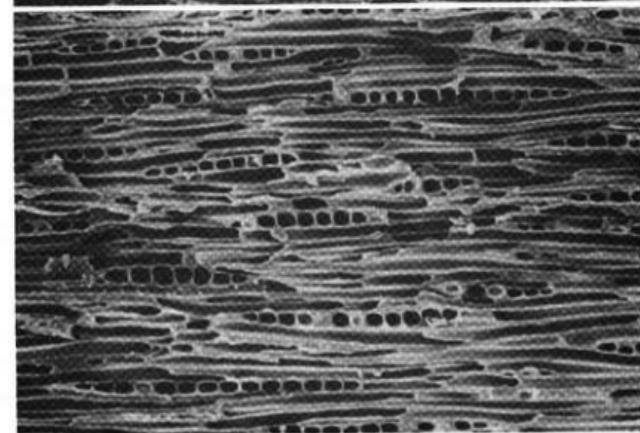
1 木 口
×35



2 桟 目
×140



3 板 目
×140



昭和62年3月31日発行
大泉村埋蔵文化財調査報告 第5集

姥 神 遺 跡

編集 大泉村教育委員会
発行 **T** 409-15
山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025
TEL 0551-38-3115
印刷 島北印刷株式会社
T 409-15
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条
TEL 0551-32-3245

